

この土坑としたものも墓として構築された可能性が高い。

- 8) 確認面からの深さを0.5m単位でまとめ、それを城館跡からの検出数109と、墓地からの検出数206で割った数値をグラフ化した。
- 9) 君津郡や長生郡のような上総北部においても同様な傾向が認められるが、これらの地域は、墓地だけ、または城館跡だけから地下式坑が検出されており、両者の対比としての深浅ではない。
- 10) 小見川城跡や田向城跡・堀之内遺跡において検出された地下式坑に、その可能性が窺える。
- 11) 地下式坑において天井部が残存しているものについては、安全上やむおえずその天井部を除去した後に調査を行わねばならない場合が多いことは、仕方のないことであろう。しかし、それ以外に情報の存在している部分は存在しているはずであり、新たな情報の探索は常に心がけるべきであろう。

## 第3章 出土遺物について

鳴田浩司

### 第1節 はじめに

発掘調査の中で中心的ともいえる遺物である広域流通する陶磁器類については、その生産地や年代の特定できる大量消費地での出土遺物との摺り合わせの結果、まだ完全とは言わないまでも、全国的に編年的な共通認識がほぼできあがってきた観がある。

一方で、カワラケは本来、儀式で使われたものと考えられ、中世では集落や墓地遺跡よりも城館跡で多く見られる。従来、千葉県では貿易陶磁器や瀬戸・美濃産、常滑産等の県外からの搬入品の編年に頼っていた部分があるが、例えば、文献上16世紀末まで確実に機能していたはずの東金城跡や大多喜城跡などの城館跡で、その供給量の差や城館の機能の差であろうか、瀬戸・美濃製品があまり出土しない例がある。それを明らかにするために、在地産土器の編年作業はその基礎となるものであり、城郭全体や各種遺構の研究上必要な作業である。

折しも、県内ではバブル経済時の大規模開発に伴う城館跡の広域な調査が終息し、ようやくその成果が徐々にではあるが、明らかにされつつある。また、大規模な城館跡以外の小規模な居館跡や中世墓などの資料も増加してきた。その結果、県内各地域ごとに、各時代の資料が蓄積され、それに伴いいくつかの特徴のある土器が認められるようになってきた。

そこで、この紀要を通じて、陶磁器類以上に出土量の多いカワラケを始とする、いわゆる在地産土器を整理・分類し、陶磁器類の研究成果をフィードバックさせ、カワラケを中心とした在地産土器類による編年を試みた。とりわけ、カワラケは生産に始まり使用から廃棄までのサイクルが最も短いものと考えられ、かつ広域に流通するものではなく、生産地＝消費地の図式が成り立つということで、消費地編年がそのまま生産地編年となりうる特性を持つ、極めて重要な遺物である。しかも中近世遺跡では普遍的に出土する遺物であり、時間軸を設定する遺物としては、最適であると考えられる。

対象とする年代は中世から近世までの流れを継続的におきたいため、13世紀から19世紀までとした。

対象遺物は、近世に入ると、土器は中世からの形態以外に、器種が爆発的に増加するので、カワラケ、内耳土器、土釜、土器搦鉢、深鉢形土器に限った。このうち、カワラケは対象とする全時代に見られ、内耳土器、深鉢形土器は中世後期から近世・近代にかけて継続的に見られる。また、土器搦鉢・土釜は、中世後期に出現し、近世初頭に消滅する器種で、その存在が、遺跡の時代を知る上で重要である。ところで、焙烙と呼ばれる内耳土器は19世紀には、内耳が付かなくなるのが一般的である。したがって本来内耳土器で取扱うのは明らかに不適切であるが、使用目的や使用方法に類似点が多いため、ここでは内耳土器の範疇に含めて取扱うことを了解していただきたい。

以下、過去の城館跡調査から出土した遺物を再検討すると共に、城館跡出土遺物に限らず、広く県内の中近世遺跡から出土した遺物を、整理し編年図作成を試みた。

資料の操作方法は、遺構一括資料に乏しいため、遺跡内の供伴遺物から、ある程度年代幅が押さえられる遺物を基準とし、形態変化を考慮して時間軸に沿って並べたものである。

## 第2節 千葉県および周縁の土器研究史

まず最初に、県内の土器研究で先駆的な例として、大橋康二氏は、四街道市池ノ尻館跡の発掘調査で多量に出土した土器播鉢と内耳土器に着目し、土師質や瓦質の土器播鉢を胎土や焼成方法、形態差から5種類に分類している。また、近代においても東金市東田間で、土器焙烙や植木鉢、蛸壺を生産していたり、成田や酒々井、東金周辺、五井付近で内耳土器(焙烙)が製作されていたことを紹介し(馬場脩; ⑤-001)、近代において地域の要望に応じた形態差が認められることを考慮して、中世においても内耳土器や土器播鉢に形態や焼成方法が異なるものが多いことから、消費地に近いところで需要に応えるべく、生産地が存在していたことを想定している。さらに、口縁部の形態の特徴から、瀬戸系播鉢の影響を強く受けていることを指摘している<sup>⑤-005~007</sup>。

津田芳男氏は、氏のフィールドである長生から安房地域の土器編年を、早くから試みている。まず、関東の内耳土器を鍋形と焙烙形に大きく分類し、各々をA類からG類、A類からB類に細分類している。また、内耳土器の分布と各地域の様相をまとめ、その使用法や系譜などについても論じられている。この中で千葉県の内耳土器の出現を15世紀半ばとし、15世紀後半に盛期があるとした。また、土師器以外の灰色の色調で硬く焼き締められ、還元焼成が行われている土器や、池ノ尻館跡に見られる、大型で体部立ち上がり<sup>⑤-019</sup>が緩やかで、直線的なものを南関東独特なものとし、この地域に焼成窯の存在の可能性を指摘した。翌年氏は、千葉県を中心とした中世煮炊具の資料集成と分類を行った。この中で、内耳土器は15世紀前半には出現し、15世紀後半から16世紀初頭に盛期をむかえろとし、前年の内容を一部訂正している<sup>⑤-021</sup>。更に翌年、茂原市国府関の阿波瀨神社遺跡出土遺物に、岩川遺跡や神田山第Ⅲ遺跡、長南城跡出土遺物を加え、長生郡内のカワラケ編年を試みている<sup>⑤-025</sup>。ここではカワラケを4つに形態分類し、1類を15世紀代、2類を16世紀初頭、3類を16世紀前半以降、4類を15世紀前半以前とした。また、②-298では、総計569点に上るカワラケをAからHの8類に分類して、16世紀後半から17世紀にかけてのカワラケを抽出している。

笹生衛氏は、千葉県のカワラケを上総中心に、大きくA、B、C、D、E類に型式分類し、編年した<sup>②-211</sup>。氏の研究は土器・陶磁器の組成に主眼を置き、初現形態である杯A類の祖形、A類からD類の法量変化、カワラケ生産の問題点をはじめ多岐にわたる。県内の中世の土器組成に言及した初めての論文であった。

小野正敏氏は、県内の城館跡出土の陶磁器組成と機能分担に主眼を置き、まず、カワラケが灯明具、ハレの皿、酒杯として使用されていたこと、在地産の土師質播鉢は、調理具の主体となる瀬戸・美濃産播鉢を補完していること、煮炊具に在地産の内耳鍋があることを指摘した。また、全国的な視野からカワラケの地域圏、煮炊用土器の地域圏を設定し、県内土器の特徴を抽出している<sup>②-209</sup>。さらに、本佐倉城跡確認調査例を取り上げ、陶磁器の組成による、城館の曲輪ごとの空間特性分析の可能性を指摘している<sup>②-263</sup>。

白根義久氏は、在地産土器そのものの編年に主眼を置き、千葉県のみならず茨城県を含めた常総地域の中で、13世紀から16世紀のカワラケを大きさ、底径：口径比、高台の有無、体部の形態差で細分類し、編年した<sup>⑤-046</sup>。それまでの分析が口径と器高の比を基準としていたのに対し、底径と口径の比を基準としたことに大きな違いがある。

また、築瀬裕一氏は、千葉市内の最新の中世城館跡調査資料を基に、千葉市域のカワラケ編年を試みている<sup>⑤-061</sup>。

以上が主に中世の千葉県内及び、千葉県内の土器を中心とした研究であるが、続いて、それ以外の千葉

県の土器を取扱った研究や、特に千葉県の土器を研究するにあたって重要なものについて、その幾つかを見てみよう。

まず、中世では浅野晴樹氏が、埼玉県を中心とした関東一円の土師質土器・瓦質土器の編年と段階の設定、土器組成<sup>⑤-016</sup>に言及した。更に引き続き、その対象となる地域を東国一帯に広めて、中世在地系土器における画期の設定を行い、供膳具、瓦質壺、調理具、煮炊具、その他の瓦質土器に分けて、地域ごとに分析した。また、京都・東海諸窯との関連、生産工人を始とした様々な問題を提起した<sup>⑤-026</sup>。

山口剛氏は、小田原城内・城下の豊富なカワラケを集成し、後北条時代から江戸時代までのカワラケを4期に区分した上で、変遷の歴史的背景についても考察している<sup>⑤-027</sup>。小田原のカワラケはロクロを使用したものと、手づくね成形のものに、成形技法上大別される。カワラケ1期(15世紀始めから16世紀初頭)はロクロ成形のカワラケのみで構成される。2期(16世紀初頭から16世紀末)は手づくねカワラケが出現する時期で、底部がくぼむいわゆるへそカワラケもこの時期に出現する。この時期に登場する手づくねカワラケは、形態的に多種多様で薄手の作りとなり、量的・質的にカワラケが全盛となった。3期(16世紀末から17世紀前葉)は形態的・量的にカワラケが極端に減少する。カワラケにかわって志野皿が灯明皿として使用される。しかし、4期(17世紀中葉から18世紀末)には丁寧なナデ調整で、硬質な焼成になり、器形も器壁と底部との境が明瞭になる。技術的に大きく変化した時期となる。特に2期は後北条氏が勢力を伸ばした最盛期にあたり、その勢力拡大に伴う社会的発展などの背景の下に成立したと捉えている。千葉県では、丁度小田原カワラケ2期(II a 期新段階)のころ、後北条氏と関係の深かった千葉氏の居城である本佐倉城で、手づくねカワラケを模倣したロクロカワラケが出土しており、この小田原城の編年は重要である。

服部敬史氏は、15・16世紀の関東・甲信地域の在地産土師器皿を編年的に整理し、その中で土師器皿(カワラケ)が「外反皿形」と「椀形」とに分類され、関東を古利根川を境に東西に分布するとし、前者の存在は「統一的地域権力」である後北条氏との関連で捉えられるとした。その基本となる2形態以外の地域色として、下総西部の16世紀後半に「椀形」土師器の地域形と見られる、腰に丸みのある形態を「下総タイプ」として捉え、境界となる古利根川流路沿いに見られる現象の一つであるとした<sup>⑤-047</sup>。

旧下総国に属する葛飾区葛西城跡の種類・量ともに豊富な資料は、16世紀から17世紀前半に至る(すなわち中世から近世への過渡期)カワラケの生産・流通・編年と使用方法の研究はもちろんのこと、江戸カワラケの出現を研究するに当たって、格好の材料となった。

ここで、葛西城跡とその周辺の遺跡から出土したカワラケの編年について、簡単に触れてみる。

最も早くカワラケを分析した長瀬衛氏は、2次調査資料で、口径と高さの比率を基準にカワラケを「坏型」と「皿型」のグループに初めて分類し、更に口径の大きさによって大小に分類した。A群は「大型坏型」、B群は「小型坏型」、C群は「大型皿型」、D群は「小型皿型」となる<sup>⑤-002</sup>。更に3次調査資料で、手づくねカワラケをE群、耳カワラケをF群として追加している。また、氏はカワラケを口径の大きさにより幾つかに分類し、古文書に記載された「かわらけ」と対比させて、その使用方法に言及するなど、単に形態分類だけにとどまらない意欲的な研究を行った。以後葛西城跡及びその周辺遺跡のカワラケは長瀬氏の編年が基準となっている<sup>⑤-003</sup>。

その後、谷口栄氏は長瀬氏の研究業績を整理し、いくつかの問題点を提示している<sup>⑤-036</sup>。江上智恵氏は、葛飾区上千葉遺跡や同区柴又帝釈天遺跡のものを、永越信吾氏は、上千葉遺跡15号溝出土のカワラケを分類<sup>⑤-050</sup>

し、近世初頭のカワラケの様相について論じている。<sup>⑤-069</sup>それによれば、16世紀後半から17世紀前半のカワラケには、右回転糸切りで、厚手の中世的なものと、左回転糸切りで、薄手、直線的な体部を持つ近世的なものが混在しているという。また、両角まり氏は葛西城跡周辺の内耳土器について、形態差から8つに分類したが、<sup>⑤-048</sup>カワラケ同様に中世的な器形と近世的な器形とが、混在しているのを指摘した。葛西城跡周辺のカワラケ編年はまだ確実なものとは言い難いが、今後の千葉県の土器研究の上で、重要な位置を占めることは間違いない。

近世陶磁器・土器研究の進展著しい江戸遺跡<sup>3)</sup>での、カワラケ・内耳土器・土器播鉢・深鉢形土器について見てみよう。

中世末期のカワラケから、江戸カワラケへの転換に関する論考がいくつか出されている。その中で、小林謙一氏は、中世末期16世紀後半から末までの資料として、長勝寺脇館跡の鎮壇遺物である右回転ロクロ成形で、底部内面が盛り上がる厚い底部、弱く張る体部、やや突出した立ち上がり、直線的な外傾口縁をもつ一群のカワラケを「下総タイプ」と分類した。<sup>⑤-035</sup>

佐々木彰氏は東大医学部付属病院地点の資料を以下のように分析している。<sup>⑤-022</sup>17世紀前葉のカワラケは白を基調とした褐色の粗い胎土に、粗雑な調整の手づくねで、口縁が外反し、口縁下部の器壁が厚い右回転のロクロ成形である。17世紀中葉には、器壁が厚く丁寧なナデ調整の手づくねで、底径が大きく器高が低い右回転のロクロ成形となる。17世紀後葉になると手づくねが激減し、底径が大きく内湾ぎみの左回転ロクロ成形が主体となる。18世紀以降はすべて左回転のロクロ成形となる。江戸カワラケが左回転に転換したのは、上方から江戸の町作りに連れてきた土器職人の影響と考えた。

鈴木裕子氏は、東大御殿下記念館地点の資料を分析し、左回転糸切り底タイプを「江戸タイプ」とし、<sup>⑤-020</sup>17世紀後半に外反の器形から内湾化、底径の大型化へと変化すると論じた。

また、両角まり氏は、体部と底部の間に見られる切れ目を、今戸焼き職人の子孫に対する聞き取り調査から、「折り返し技法」によるものと解釈している<sup>4)</sup>。その技法の出現は17世紀後葉から18世紀初頭で、氏はこの技法の出現をもって、江戸在地系土器<sup>5)</sup>生産が本格化したと見ている。それに先行して、17世紀中葉には、<sup>⑤-034</sup>輪積み成形からロクロ水挽き成形に移行したと捉えた。

次に、近世江戸在地系焙烙について見てみよう。佐々木彰氏は、江戸在地系焙烙が17世紀前葉から中葉に平底から丸底に転換しており、この背景にはカワラケ同様、徳川家康の江戸入府に伴う関西方面からの土器職人の移入を想定している。<sup>⑤-023</sup>両角まり氏は、器形上の特徴から、関東には上野・北武蔵を中心に分布するもの、常陸・下総を中心に分布するもの、及びその後者に出自を求められる「江戸在地系焙烙」の三者がある一方で、南関東から相模には土器焙烙自体が分布しないことを明らかにした。<sup>⑤-049,062</sup>氏は同じ系譜上にある内耳土鍋と焙烙を区分せず、内耳土器として大きく3群に分類し、中世末期から近世にかけての関東地域の形態変化を追っている。この章を執筆するにあたって、内耳土鍋と焙烙を区別せず、一括して内耳土器として扱った。

更に、鈴木裕子氏のように土器播鉢や深鉢形土器など、今まで江戸遺跡で取扱われることがほとんどなかった江戸周縁の在地産土器について、問題提起するようになってきている。<sup>⑤-066</sup>

このように、江戸遺跡からの近世在地産土器成立に対するアプローチはあるものの、千葉県内からの見解は次の藤尾氏の論考以外、特に目立ったものはない。

近世内耳土器については、藤尾慎一郎氏が、国立歴史民俗博物館研究棟建設予定地内の豊富な発掘資料

を、胎土・形態・成形・整形・法量などの点から詳細に分析を加え、分類した。<sup>⑤-028</sup>この分類は今回の編年の基準として使用しているように、以後刊行された多くの報告書の分類基準となっている。氏は佐倉城跡出土焙烙を細分類し、江戸在在系焙烙と異なる当該地域在地焙烙を抽出し、その中で18世紀後葉から19世紀前葉にかけて、平底から丸底に転換したと考えている。氏の分類については、第3節佐倉城跡で詳細に説明する。一方、下総国に接する茨城県側では、白田正子氏によって中世から近世の内耳土器の編年案が提示されるようになってきた。<sup>⑤-068</sup>

最後になるが、近年中世在地産土器に対する資料の集成が顕著に見られるようになってきている。1997年から1999年にわたり、「神奈川の考古学」の中で、中世プロジェクトチームによって神奈川県内の「かわらけ」が集成された。<sup>⑤-056,063,070</sup> そのほか茨城県や福島県など、関東各県や東北地方でもグループによる中世土器研究の気運が盛り上がりつつある。<sup>⑤-041</sup> <sup>⑤-051,057,067</sup>

さらに、これまで蓄積されてきた全国の中世食器が集大成されており、全国の中世の食器様相を知る上で貴重である。<sup>⑤-058</sup>

## 注

1) 分類は以下の通りである。

1類a：底部からやや外反して立ち上がり、中程で稜をつくり内湾して立ち上がる。淡い赤褐色。口径7.8cm～8.7cm、器高1.4cm～1.7cm、口高指数17～20%。器壁は体部・底部とも厚い。

1類b：形態は1類aと同じ。口径6.1cm、器高1.6cm、口高指数26%。

2類：口径7.8cm～8.7cm、器高1.4cm～1.7cm、口高指数19～23%。体部は口縁部に向けて内湾して立ち上がる。淡褐色。器壁は体部・底部とも厚い。

3類：口径8.8cm、底径5.6cm、器高2.4cm。口高指数26%。厚い底部から外反して口縁部に立ち上がる。淡褐色。

4類：底径6.5cm～6.8cm。大型。淡褐色。

2) 分類は以下の通りである。

杯A類：底部を柱状に厚く切り残し、体部は強く内湾、口縁端部が外反するもの。口高指数（口径に対する器高の割合）は30%前後以上。

杯B類：底部を柱状に厚く切り残し、体部は強く内湾するが、口縁端部の外反は見られない。器面にはロクロ目が強く残され、A類と比較して、整形に要するロクロ回転数が少ないものである。口高指数は30%前後以上。

杯C類：体部中位が強く内湾し、そのまま口縁部に至るもの。口高指数は30%前後以上。

杯D類：体部は内湾して立ち上がり、そのまま口縁部に至るもので、口高指数は20%前後。C類と比べ、器高を著しく減少させる一群である。

杯E類：体部は直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至るもの。口高指数が20%前後のE2類と、30%前後以上のE1類とに細分類できる。

3) ここで言う「江戸遺跡」は、近世都市江戸における同時代の遺跡で、地域としては朱引き線内（町奉行管轄地）に限定される。

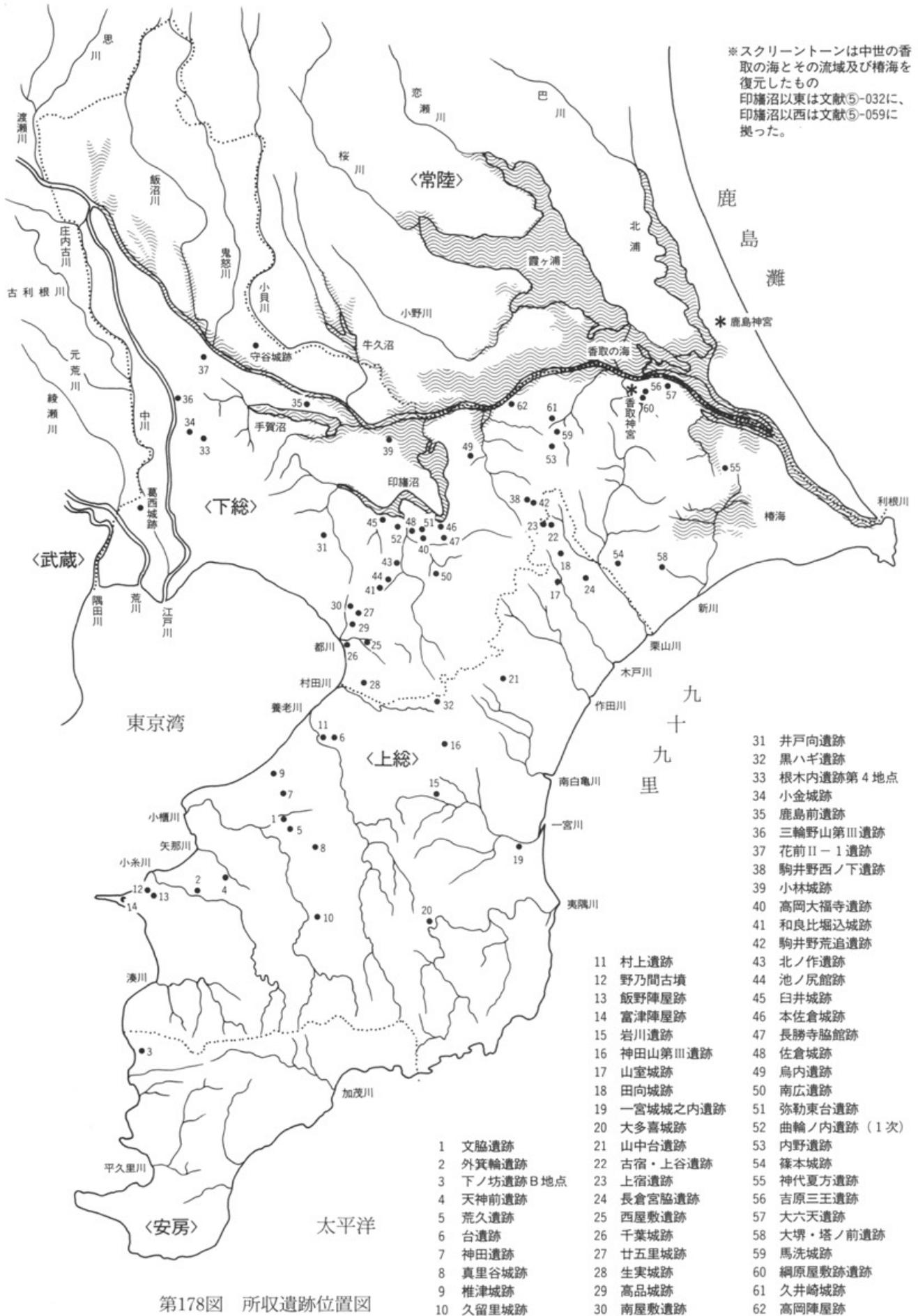
4) 小林謙一氏は基本的には両角まり氏を指示しているが、折り返しの痕跡については、「腰折れ状痕」と

### 第3章 出土遺物について

⑤-055  
呼びかえている。

一方で、小川貴司氏は「折り返し技法」について、実際に製作した場合に技術的な観点から否定的見解を示している。  
⑤-043～045

5) ここで言う「江戸在地系土器」は、近世江戸地域において伝統的に生産・消費された土製の器物類である。



第178図 所収遺跡位置図

### 第3節 所収遺跡の概説と出土土器

まず、県内及び県外の遺跡の概要と、出土した中近世遺物を紹介する。また、検出した遺構や出土した遺物から得られた遺跡の時期幅と遺物の中心となる時期を第11表に一覧とした。基本的に、この時期設定に基づき土器の編年を行った。なお、挿図中のカワラケの縮尺は1/3で、それ以外は1/6にしている。

#### 県内

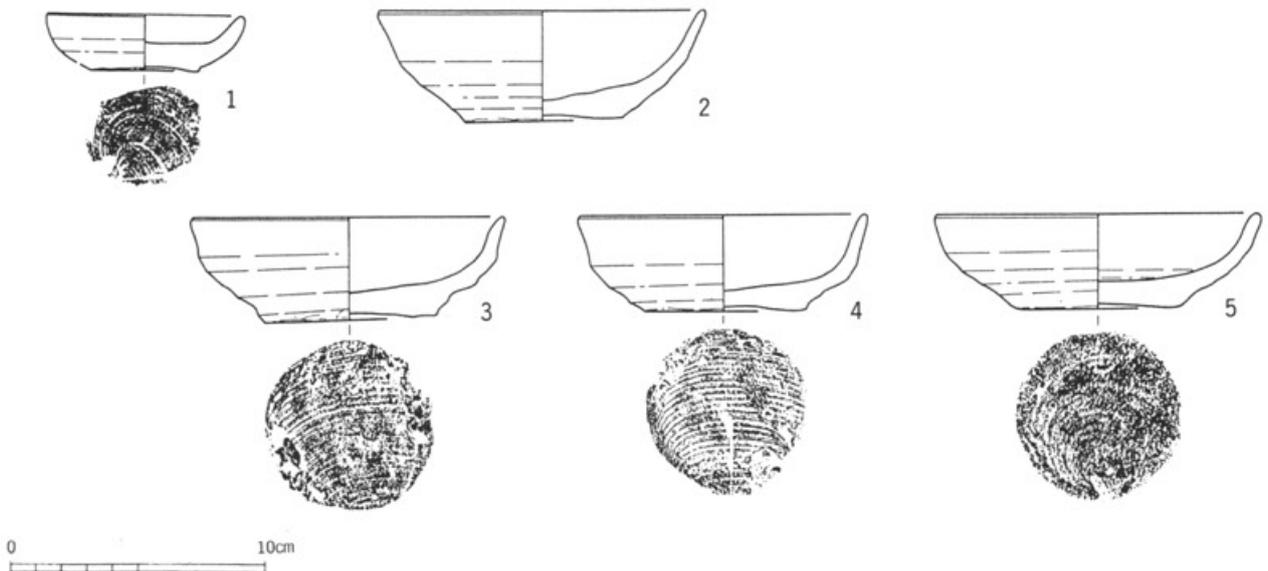
##### (1) 安房郡・君津郡・市原市地域

##### 文脇遺跡 (第179図)

文献③-206

文脇遺跡は袖ヶ浦市野里に所在する。小櫃川中流北岸の標高40m前後の台地上に立地する。小櫃川中流域から上流にかけての地域は、古代には畦蒜郡に属しており、中世初頭の『吾妻鏡』文治2年(1186)6月11日条によると、畦蒜荘として、源頼朝から熊野社別当へ寄進されている。調査地区の北側と中央に1号・2号道路遺構があり、区画溝が埋没する過程で、道路として使用されていた。覆土中からカワラケが出土している。また、土坑墓からは和鏡2面(菊花双雀鏡、桜花双雀鏡)が出土した。

カワラケは小型と大型に大きく分類できる。1は小型で、口径7.9cm、底径4.5cm、器高2.2cm、全体に厚手、体部は緩やかに内湾する。2は大型で口径13.0cm、底径6.3cm、器高4.4cm、底部は静止糸切りで、底部はわずかに突出する。体部は緩やかに内湾する。3～5は2号道路状遺構・26号溝から出土した。2と同形態であるが、底部の突出が顕著である。カワラケはいずれも、胎土中に金雲母・鉄分・白色針状物を含み、明褐色～淡褐色に発色するが、2のみ淡黄灰色である。



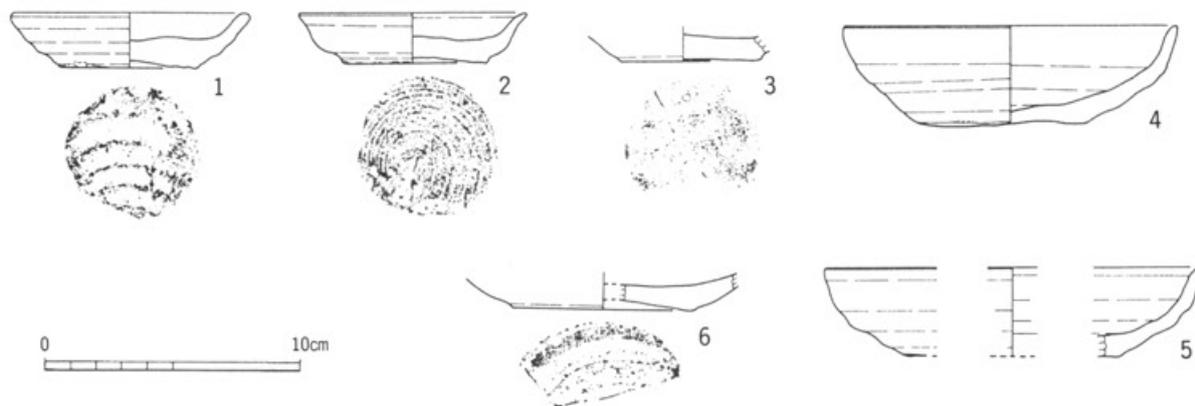
第179図 文脇遺跡

## 外箕輪遺跡 (第180図)

文献③-164

外箕輪遺跡は君津市外箕輪に所在する。小糸川中流北岸、標高16m前後の低位段丘上に立地する。中世では周東郡に含まれていたと考えられ、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけては上総氏の一族である周東氏の支配下に置かれていた可能性が高い。建物面積が60㎡～70㎡に達する大型建物や大型の区画溝が検出され、遺物にも二彩陶器盤や青白磁梅瓶などが含まれることから、有力農民層の屋敷地か在地領主層の居館の一部である可能性が考えられている。

カワラケは小型のものとは大型のものに大きく分けられる。小型の1は口径9.4cm、底径5.3cm、器高2.2cmで、口縁端を丸く仕上げる。胎土中には鉄分・白色針状物・細砂粒を含み、淡明褐色。底部は静止糸切りである。2は口径9.0cm、底径5.4cm、器高2.0cmで、口縁端で内面に稜をもち、外反する先端が鋭利になる。底部は左回転糸切りで、赤褐色～暗褐色である。3は胎土中に雲母を含み、灰白色である。4は口径13.2cm、底径6.5cm、器高4.0cmで、1に調整・成形・胎土が対応する。同様に5は2に、6は3にそれぞれ対応する。



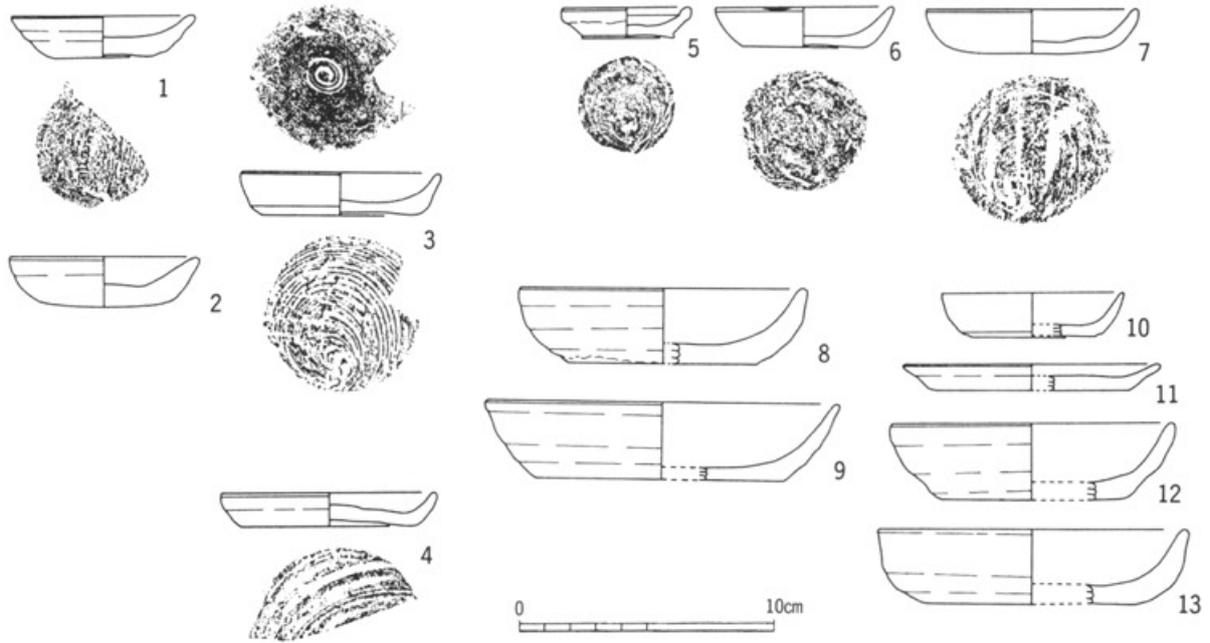
第180図 外箕輪遺跡

## 下ノ坊遺跡B地点 (第181図)

文献③-176

下ノ坊遺跡B地点は安房郡鋸南町保田に所在する。保田川中流域の北岸、標高10m前後の低位段丘面上に位置する。中世には安房北郡に含まれ、三浦氏、二階堂氏、北条(大仏)氏に領有されていた。発掘調査では掘立柱建物、井戸、塀、堀などが検出されている。SB-2(大型建物)は桁行3間以上、梁行3間の主屋に南北の両面庇が付く。掘立柱建物はいずれも調査区北端部分に集中している。

様々な形態のカワラケが出土している。1、2はSE-1(井戸)から出土したもので、いずれも小型である。1は口径7.2cm、底径3.8cm、器高1.7cmで、暗褐色、石英・赤色粒子を含む。底部には回転糸切り痕と箕の子状圧痕が残る。3、4はSE-2(井戸)から出土したもので、3は口径7.8cm、底径6.2cm、器高1.7cm、内面に渦状の痕跡を残す。淡橙色で、砂粒・赤色粒子・黄褐色粒子を含む。5、6、7はSA(塀)から出土したもので、5は口径5.2cm、底径3.6cm、器高1.2cmで、明橙色、石英・雲母・赤色粒子を含む。6は灯明皿として使用されていた。8～13はグリッド出土で、11は扁平で皿状になる。いずれも口径と底径の比が小さく、器厚が厚いものが多い。8、9、10、13は胎土中に雲母を含む。



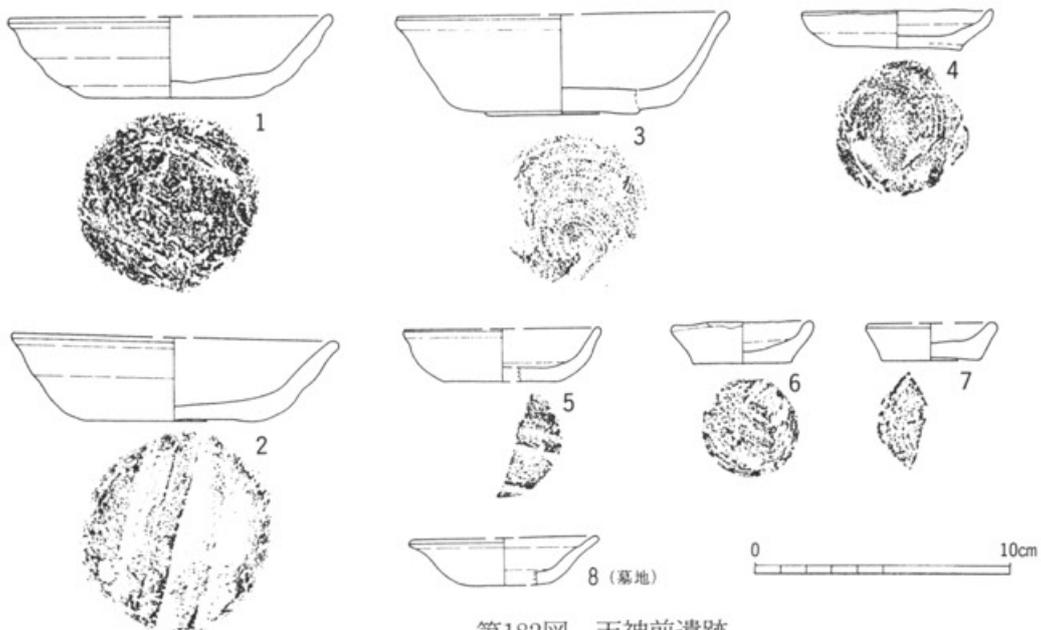
第181図 下ノ坊遺跡B地点

天神前遺跡 (第182図)

文献③-207

天神前遺跡は木更津市矢那に所在する。矢那川上流域左岸、標高50m前後の台地斜面に立地する。遺跡周辺は上総鋳物師集団の拠点の一つとされる。調査では斜面を削平して造り出した平坦面に、火葬墓を中心とした40基の中世墓を確認した。

カワラケはテラス部分の墓域から出土している。1、2は合わせ口で出土した。1は口径13.0cm、底径7.0cm、器高3.6cm、内面の立ち上がりは緩やかで、若干外反気味である。3は体部がやや深く、口縁端が



第182図 天神前遺跡

肥厚する。底部糸切り範囲は直径6.0cmとかなり狭い。4は口径7.6cm、底径5.0cm、器高1.5cmで、体部が内湾し、細くなるタイプである。6は口径5.6cm、底径4.0cm、器高1.6cmで、小型厚手のタイプである。4～8はいずれも灯明皿として使用されていた痕跡が見られる。また、カワラケはいずれも胎土中に白色砂粒と白色針状物が含まれる。なお、3、4が出土した遺構からは共に6a形式の常滑壺が出土している。

#### 荒久遺跡 (第183図)

文献③-298

荒久遺跡は袖ヶ浦市高谷に所在する。小櫃川中流北岸の標高35mの台地上に位置する。小櫃川中流域から上流にかけての地域は、古代には畦蒜郡に属しており、中世初頭の『吾妻鏡』文治2年(1186)6月11日条によると、畦蒜荘として、源頼朝から熊野社別当へ寄進されている。応永23年(1416)の「畦蒜荘横田郷検注帳案」(「覚園寺戌神将胎内文書」)などで知られる禁裏御服料所である横田郷の東約2kmにあたる。また、鎌倉街道(久留里往還)や真言宗中本山延命寺に面している。調査では掘立柱建物、地下式坑、方形竪穴状遺構、土坑墓などが検出され、区画溝やその配置から、居住区域、倉庫・作業区域、墓域などに空間が分割できる。

SK-013(地下式坑)出土のカワラケ1～5のうち、1、5と3、4がそれぞれ重なり、合わせ口となって出土した。2は若干離れて出土したが、5点が1セットになると考えられる。最も大型の4は口径17.9cm、底径9.0cm、器高4.5cmで、内面に横方向の指ナデが見られる。最も小型の5は口径11.4cm、底径5.1cm、器高3.0cmである。いずれも体部が直線的に大きく開く。供伴遺物に常滑片口鉢II類10型式、古瀬戸後II期の折縁深皿があり、15世紀半ばに近い後半頃と推定される。6と7は合わせ口でP-268(地鎮遺構)から出土している。6は口径7.9cm、底径4.3cm、器高2.0cmで、内面に不動明王を表した梵字で「カーンマーン」を墨書する。8、9はSK-068(地下式坑)覆土中位から出土した。8の内面には梵字で「ウン」を墨書する。10は色調が灰色で、須恵質の瓦質土器搦鉢である。口縁端に溝が巡る。胎土には鉄分粒を含み、外面はナデ調整を施す。11、12は土師質の内耳土器である。11は復元口径29.0cm、器高17.0cmで、胎土中に石英を含み、外面には煤が付着する。12は口径28.0cmで、1対2の紐状内耳が付く。11、12共に、下側内耳接合部から体部が大きく外側に折れる。

#### 台遺跡 (第184図)

文献①-091

台遺跡は市原市加茂に所在する。養老川右岸、北東から南西に延びる海岸線と3kmほど離れて並行する縁辺をもつ国分寺台の西端に位置する。遺跡は区画溝により北部・中央部・南部の3つの遺跡群に分かれる大規模な中世墓地である。

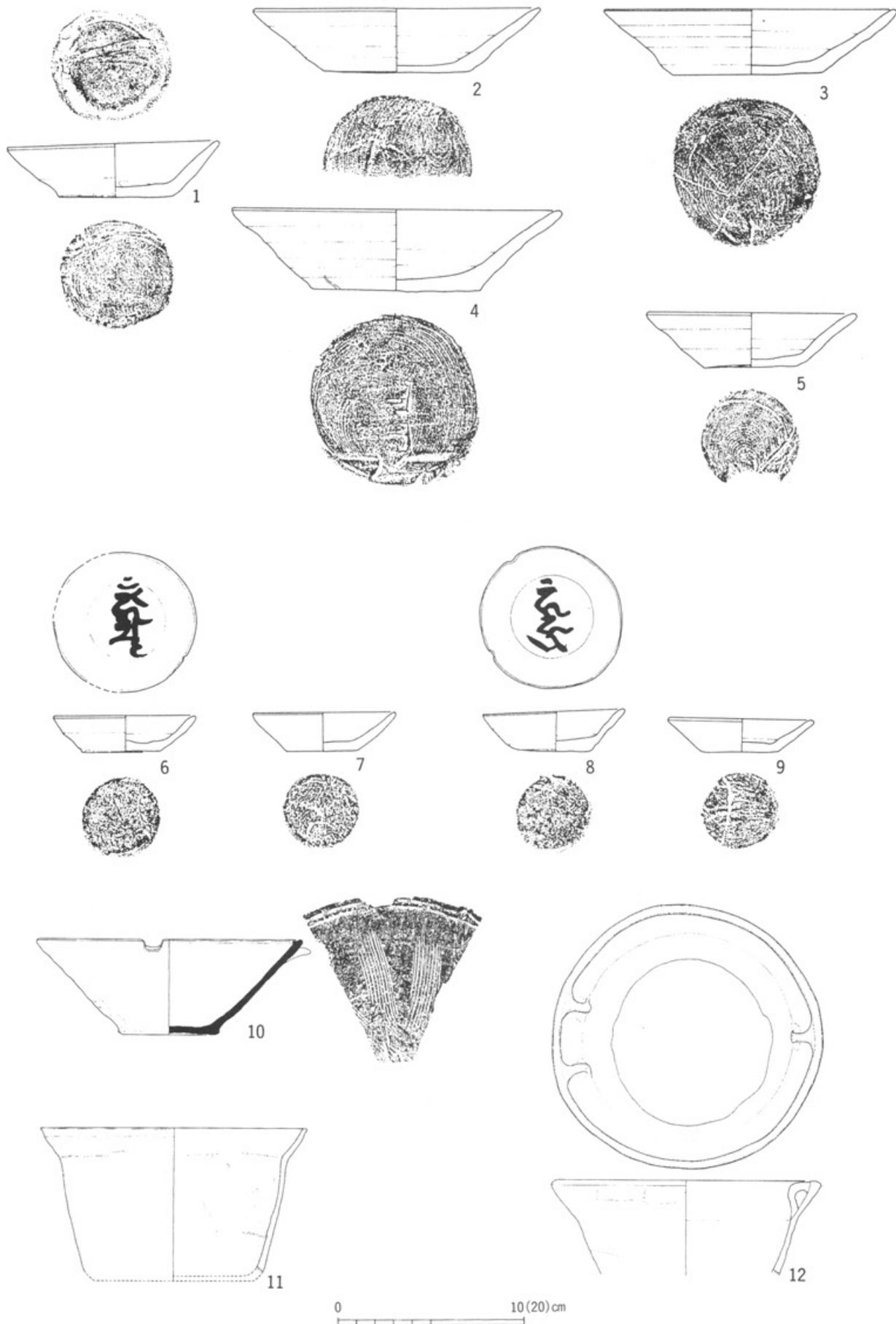
土器搦鉢は瓦質で、体部はわずかに外反するが、概ね直線的に延びる。口縁端は沈線状になるものや、内側に摘み上げるものが見られる。内耳土器は土師質で、底が深く、内面の内耳下側接合部の高さに稜が入り、そこから上が外側に張り出すタイプが見られる。

#### 神田遺跡 (第185図)

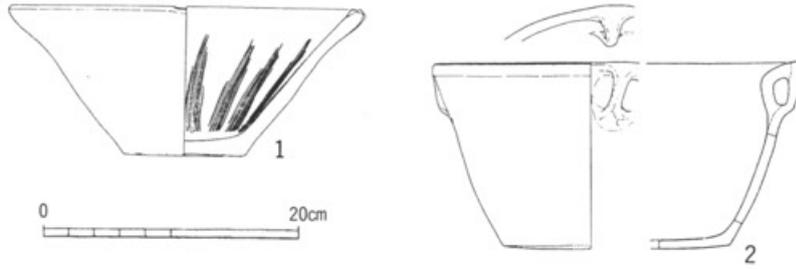
文献③-243

神田遺跡は袖ヶ浦市倉波に所在する。倉波川中流域北岸、標高40m前後の台地縁辺部に立地する。養老川流域と小櫃川流域の中間地点になっている。調査では土坑墓56基、火葬土坑6基、地下式坑4基を検出した。墓域の中心をなす階層は、14世紀当時在地で実力を蓄えつつあった土豪層で、板碑や五輪塔を伴い、周辺には土豪層に関連する氏族か農民層の中世墓地であったと推定される。

カワラケは大型のものと小型のものに大きく分類できる。大型の1は口径9.4cm、底径5.2cm、器高2.9cmで、鈍い黄橙色、胎土中に砂粒・石英粒を含み、口縁端が肥厚する。小型の2は口径7.4cm、底径3.8cm、

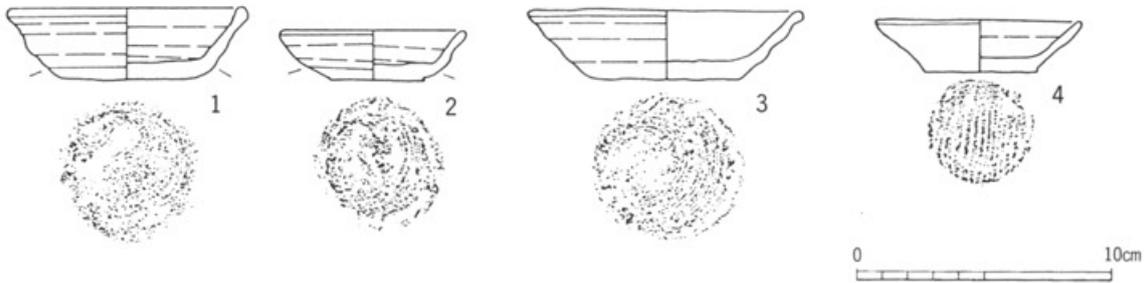


第183図 荒久遺跡



第184図 台遺跡

器高1.9cmで、腰が張り、口縁が外反する。大型の3は口径10.9cm、底径5.8cm、器高2.7cmで、体部は直線的に延びるが、口縁端が玉縁状に肥厚する。小型の4は口径8.2cm、底径4.4cm、器高2.0cmで、体部が肥厚する口縁端には煤が付着する。



第185図 神田遺跡

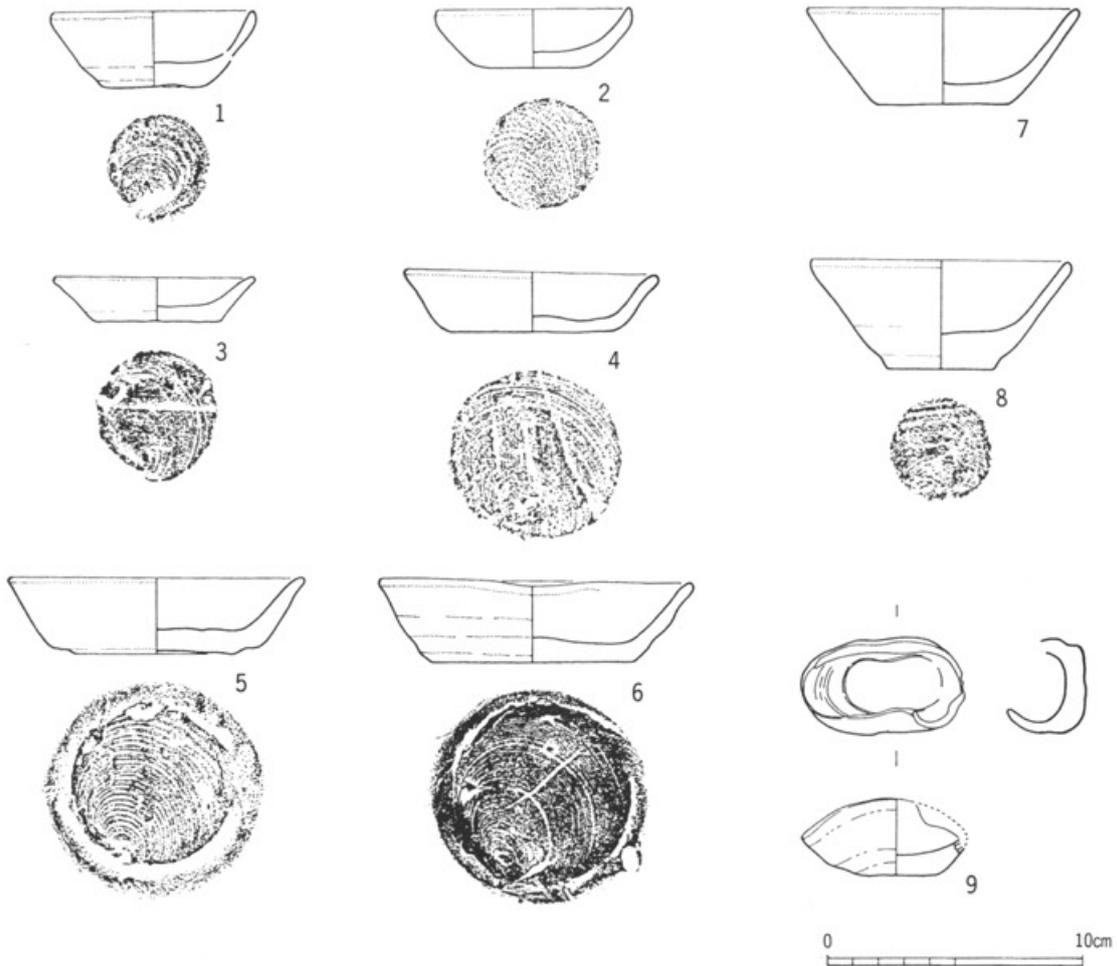
真里谷城跡 (第186図)

文献③-109

真里谷城跡は木更津市真里谷に所在する。小櫃川の支流武田川と泉川に挟まれた、標高約140m~160mの丘陵上に位置する。城の存続期間は、康生2年(1456)に武田信長が入部してから真里谷信政が椎津城で敗死した天文21年(1552)前後といわれる。

カワラケ1は口径8.0cm、底径4.0cm、器高3.0cmで、底部が厚く、体部がやや内湾する。2は底部から口縁にかけて緩やかに内湾する。3は口径7.9cm、底径5.0cm、器高1.8cmで、体部は直線的に緩やかに外反する。4は中型で、口径9.9cm、底径6.2cm、器高3.5cm、見込みに横方向の指ナデ痕があり、口縁端は外反する。暗褐色である。5、6はカワラケ中で最も多いタイプである。底部には円盤状の粘土塊を貼り付け、その粘土塊を回転糸切り離しするため、底部と立ち上がり部とが一致しない。口縁端で若干外反する。5で口径12.6cm、底径6.7cm、器高3.1cmである。7、8は1に近いやや大型のタイプで、8は高台状に切り残したため、結果として底部が分厚くなっている。砂粒を含み、茶褐色である。9は耳カワラケで、底径3.2cm、最大高3.0cmである。砂粒含み、暗褐色である。焼物の組成中、カワラケは57%を占める。

③-263



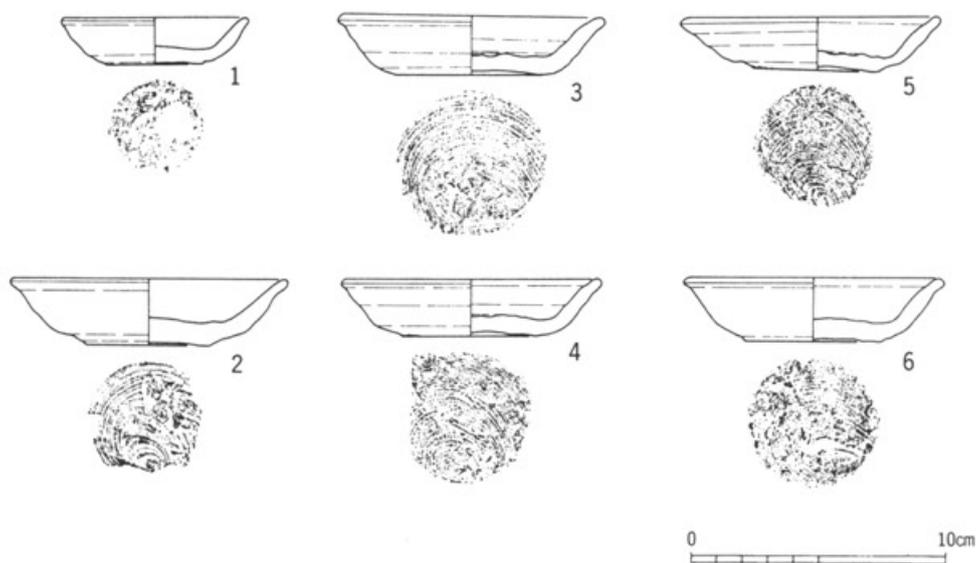
第186図 真里谷城跡

椎津城跡 (第187図)

文献③-171

椎津城跡は市原市椎津に所在する。東側と北側に境川が流れる、標高30m前後の台地の先端に位置する。永正16年(1519)ごろの「足利高基感状写」(「木連川家文書案」)に「椎津要害」の記述が見られるのが初現である。真里谷武田氏一族の居城で、一時足利義明の手に落ちるが、国府台合戦(1537)の後再び武田氏が復帰する。しかし、天文21年(1552)に武田信隆が没すると間もなく、里見氏の攻撃を受け、落城する。以後、里見氏と後北条氏勢力がめまぐるしく交替するものの、天正5年(1577)には後北条氏の支配下になっていたようである。

カワラケは小型と大型のものに大きく分かれる。1は小型で、口径7.2cm、底径3.8cm、器高1.9cm、2は大型で、口径10.7cm、底径4.9cm、器高2.6cm、1、2共に淡褐色から赤褐色で、胎土中に白色針状物・金雲母を含む。体部の腰が張る皿形である。3～6は一括出土遺物で、口径10.0cm～10.3cm、底径4.9cm～6.2cm、器高2.1cm～2.5cm、茶褐色で、砂粒を含む。皿形で底部がやや盛り上がり、口縁端が外反する。



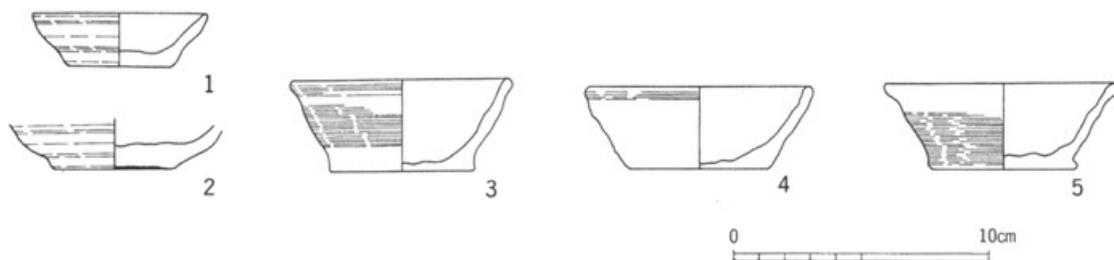
第187図 椎津城跡

久留里城跡 (第188図)

文献③-060

久留里城跡は君津市久留里に所在する。上総・安房の境に連なる清澄山系から北方の東京湾に流れ出る小櫃川中流の山間部と平野部の接点に位置する。久留里城は『君津郡誌』によれば、真里谷武田氏の築造とされる。しかし、里見氏全盛期(義堯・義弘)の40年間、安房より勢力を拡大してきた里見氏の勢力下に入り、里見氏の本城となった。この間、後北条氏との間で数度に渡る激しい攻防の場となったという。天正5年(1577)には後北条氏と和睦し、本城を佐貫に移した。天正18年(1590)には大須賀忠政が入城する。慶長6年(1601)に土屋氏に交代し、忠直・利直・頼直三代の後、延宝7年(1679)に酒井忠清の領地となり、一時廃城となった。しかし、寛保2年(1742)に黒田直純が入城すると、城修築のため幕府が5千両を下賜している。以後明治維新に至るまで黒田氏の治世が続いた。

カワラケは、いくつかの形態に分類できる。1は口径6.9cm、底径4.1cm、器高2.1cmで、体部の腰が締まり、体部途中が肥厚する。2は1の大型で、体部が大きく内湾する。3～5は本丸掘立柱建物遺構前面のピットから一括して出土している。3は口径8.8cm、底径5.7cm、器高3.6cmで、底部は薄く、高台状に切り残す。体部はロクロ目がきつよいようである。口縁端は丸く仕上げる。1と3は口縁に煤が付着しており、灯明具として使用されたようである。



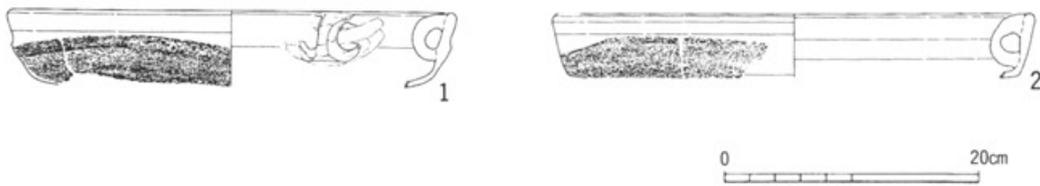
第188図 久留里城跡

村上遺跡 (第189図)

文献③-289

村上遺跡は市原市村上にあり、養老川下流の標高4m~7mの段丘、自然堤防及び旧河道に立地する。古代から近世に至る複合遺跡であるが、近世では水田面や道路遺構を検出している。

道路として使用されていたと考えられる有段・断面箱形のSD10から多くの内耳土器片が出土している。深い丸平底で、底部は薄いが体部は肉厚となり、口縁端でやや外反するものと、底部がほとんど平底で、内耳の下部からすぐに底面となり、比較的底が浅い形態のものに大きく分類できる。前者は復元口径32.6cm(1尺1寸)~34.8cm(1尺2寸?)で、後者は復元口径32cm前後(1尺1寸)のものと37cm(1尺2寸)のものに分かれる。内耳は稜の明瞭なものが多く、完全な団子形とは言えない。底面には型作りに伴う離れ砂の痕跡か、ちぢれ目が明瞭に残る。体部との接合部は横方向にヘラ削り調整される。

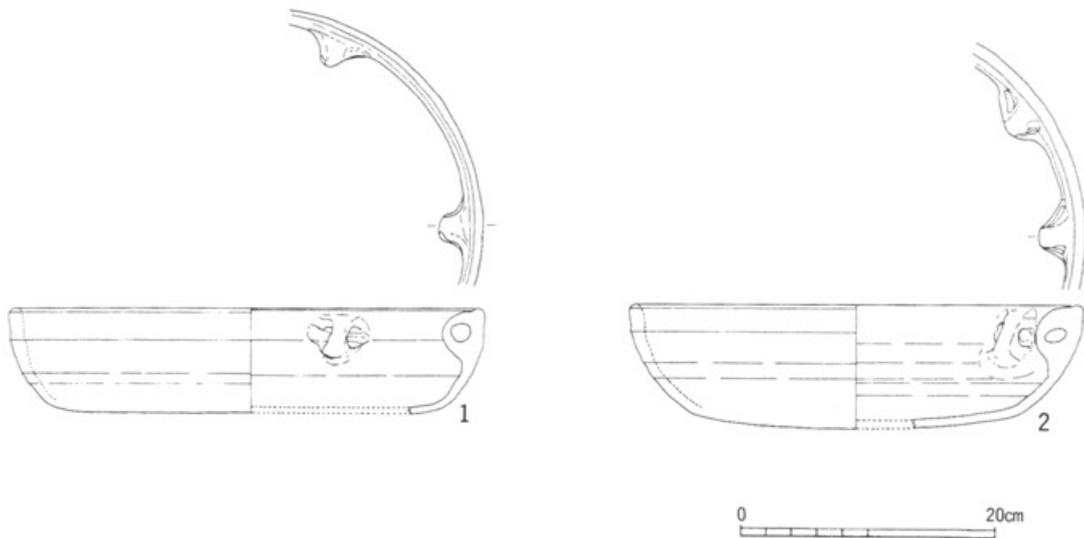


第189図 村上遺跡

野乃間古墳 (第190図)

文献③-146

野乃間古墳は、富津市上飯野にあり、大型前方後円墳である内裏塚古墳と九条塚古墳などとともに内裏塚古墳群を形成する。飯野陣屋跡から西北西へ約400mの地点になる。当古墳は、二重周溝の方墳で、緑釉新羅焼陶器が出土した古墳として有名である。昭和62年の調査区北端部の内側の周溝内貝殻廃棄坑からは、貝殻に伴って多量の18世紀後半代の陶磁器・土器類が出土した。調査者は、飯野藩の土族が所有していた生活用品だと考えている。



第190図 野乃間古墳

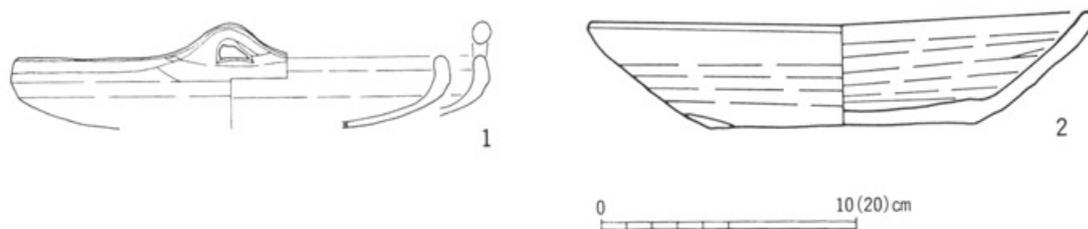
内耳土器1は、胎土は黄褐色で極めて脆い。口径37.2cm（1尺2寸）、器高8.2cmで、底部は薄く平坦であるが、その立ち上がりは丸く緩やかで、口縁部内外面は丁寧に横ナデされている。団子形に近い内耳は対面して2対、合計4個付く。外面全体には煤が付着する。一方、2は胎土が暗褐色で硬い。口径35.5cm（1尺2寸）、器高9.8cmで、1に比べ丸底傾向が強い。稜がはっきりとした耳は対面して2対、合計4個付くと考えられるが、1に比べ間隔が狭い。内面と口縁外面に横位のナデ、外面下半の一部にヘラ削り調整を施す。外面全体と内面の一部に煤が付着する。

**富津陣屋跡**（第191図、図版12-1）

文献③-287

富津陣屋跡は富津市の北西部に突出した富津洲から東へ4kmの、標高5mの沖積平野に立地する。幕末の江戸湾海域を防衛するために造られた、海防陣屋の一つである。文政4年(1821)幕命により、白河藩が造立にあたった。以後幕府や諸藩の統治を経て、明治元年(1868)8月頃には廃棄された。約48年間存続した陣屋である。会津藩か柳川藩統治下頃(1847~1858)の絵図があり、検出遺構と明瞭に対比できる。調査地点は陣屋推定地の北西隅に当たる。礎石立ての長屋建物跡や白洲跡、井戸跡、塀跡、貝殻地業跡をはじめ、地盤が緩い地点に重量物を建設する場合に採用される、ろうそく石礎石列が検出された。出土遺物がほぼ陣屋の存続時期と一致する、19世紀中葉の遺跡である。

出土した内耳土器は推定口径34.8cm（1尺1寸）の丸底のもので、耳が口縁上部に付く。ふつう内耳は、耳が土器の中心に向かって付けられるが、この器種は口縁に平行であるのが大きな特徴と言える。器面は橙色から黒褐色に発色している。また、カワラケは、口径20.0cm（7寸）、底径10.6cm、器高4.4cmで、内面立ち上がり部はやや溝状にくぼみ、体部はほぼ直線的に伸びる。底面には回転糸切り痕を残す。器面は橙色に発色している。



第191図 富津陣屋跡

**飯野陣屋跡**（第192図）

文献③-155他

飯野陣屋跡は、小糸川下流域の標高7m~8mの沖積地上に立地する。飯野藩主保科正貞が、慶安元年(1648)に、現在の富津市下飯野に築造したとされる。平成9年度末現在までに陣屋内と周辺を含めて、18次に及ぶ発掘調査を実施している。遺構には、貝殻地業跡や礎石跡、土坑、溝などが見られる。國學院大學図書館に旧飯野県に県庁が置かれていた頃(明治4年)の絵図が残っており、検出遺構と概ね対比できる。しかし、同年飯野県は木更津県に併合され、陣屋は取り壊されたようである。遺物には18世紀から明治以降に至る陶磁器・土器類が多量に出土しているが、これらは飯野藩藩士や家族が使用した遺品である。

内耳土器は、いずれも丸底で、内耳をもたない薄手の底部のタイプである。大きくは口縁端が内面方向に膨らみ折り返されるもの(1)と、緩やかに内湾するもの(2)とに分類できる。口径は後者が32cm~33cm（1尺1寸）であるのに対し、前者は約27cm（9寸）である。



第192図 飯野陣屋跡

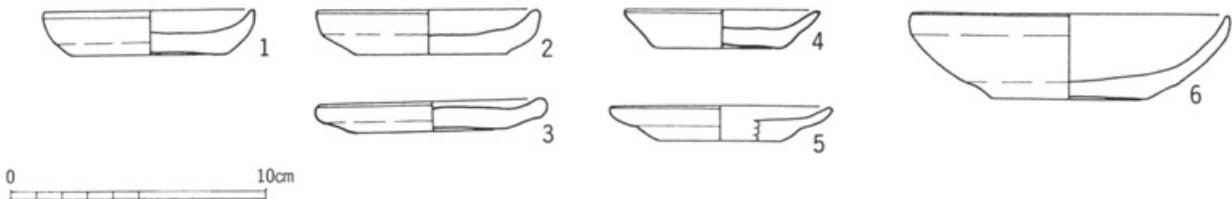
(2) 夷隅・長生・山武郡地域

岩川遺跡 (第193図、図版10-2)

文献③-170

岩川遺跡は長生郡長南町岩川に所在する。一宮川上流域右岸、標高15m前後の自然堤防上に位置する。遺跡南東の墨田・須田地区は、弘安2年(1279)8月25日「大膳職申状」(「兼仲卿記裏文書」)に見られる大膳職領としての「上総国墨田保」に当たると考えられる。調査では堀によって区画された範囲に、礎石建物、掘立柱建物、井戸、竪穴状遺構、土坑などから構成される屋敷跡が検出された。上総系平氏の中心氏族である角田氏の居館であった可能性が高いと考えられている。

カワラケは小型の皿形のもの、大型の杯形に大きく分類できる。1は口径8.4cm、底径6.1cm、器高1.8cmで、底部が厚く内面は極めて浅く、内湾する口縁端が鋭利である。2は1に比べ口縁端が丸く処理される。3は極めて扁平で、コースター状である。4、5はやや小形で、体部は直線的で細くなる。いずれも砂粒を含み、褐色になる。6は口径12.4cm、底径6.1cm、器高3.3cmで、内面が緩やかに立ち上がり、外面も緩やかに内湾する。砂粒を含みやや白っぽい褐色である。焼物の組成中、カワラケは20%、瓦質土器が<sup>③-263</sup>58%を占める。



第193図 岩川遺跡

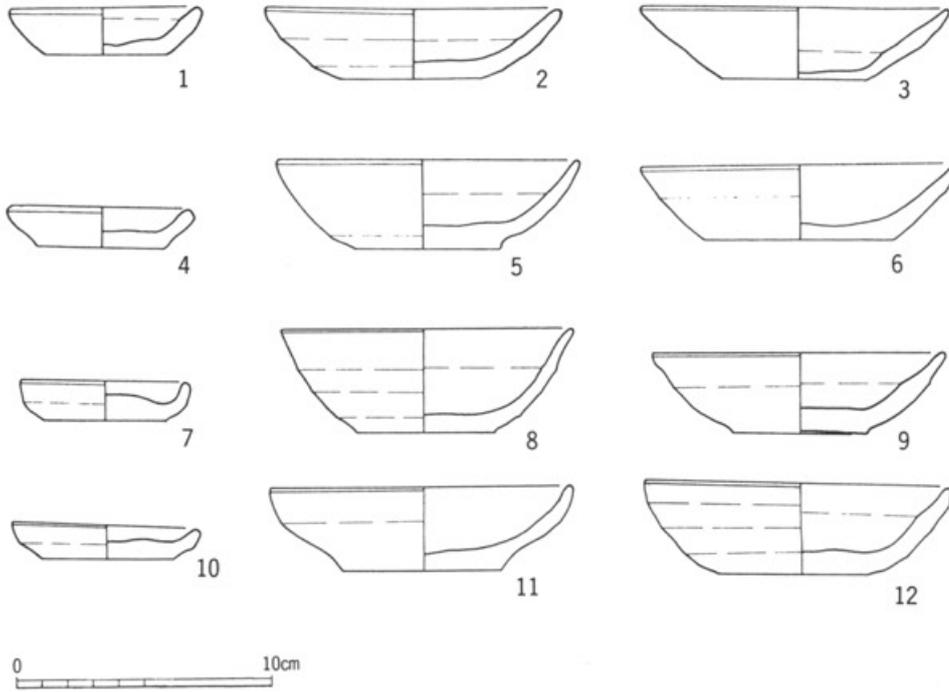
神田山第Ⅲ遺跡 (第194図)

文献③-219

神田山第Ⅲ遺跡は茂原市桂に所在する桂遺跡群を構成する遺跡の一つである。村田川最上流の標高100m前後の丘陵上で、太平洋と東京湾側の分水嶺にあたる。調査では掘立柱建物8棟、溝5条、土坑38基、地下式坑8基、火葬土坑1基などが検出された。その他の遺構には多数の塚や火葬土坑があり、また遺物には白磁碗・白磁四耳壺・石鍋・伊勢鍋等が見られるため、中世の寺院跡と考えられている。

1～3はH-012(地下式坑)覆土中位から出土した一括資料の内の3点である。そのうち3は内面底部から立ち上がり部にかけてかなり薄い、途中から厚みを増すため境目に稜ができる。口径12.3cm、底径5.7cm、器高2.5cm、白っぽい褐色で、砂粒を含む。4～6はH-015(地下式坑)出土一括遺物の内の3点である。5は底部を一部高台状に切り残す。5は口径12.1cm、底径5.8cm、器高3.6cmである。7～9は塚出土

遺物で、7は底面がかなり盛り上がっている。また、8は器高が4.2cmと、かなり深い。10～12はグリッド出土遺物で、11は腰が顕著に張るタイプである。口径12.1cm、底径6.2cm、器高3.4cm、白っぽい褐色で、砂粒を含む。カワラケに様々な形態が確認できるのは、おそらく、ある程度の年代幅があるからであろう。



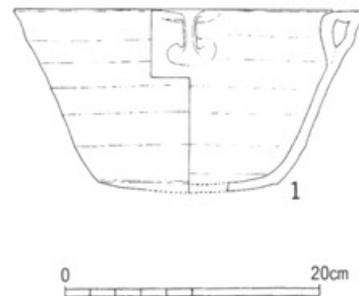
第194図 神田山第Ⅲ遺跡

山室城跡 (第195図)

文献③-201

山室城跡は山武郡松尾町山室に所在する。太平洋に注ぐ木戸川上流の右岸の台地先端に占地する。16世紀前葉に飯櫃城に移った山室氏の本城に推定されている。調査は崖面に近い台地先端部のみであったが、少ない資料の中に底部まで復元できる瓦質の内耳土器がある。

この内耳土器は推定口径26.0cm、底径14.0cm、器高14.5cmで、体部の立ち上がり部は明瞭ではあるが、底面は緩やかな弧を描き、中心部が最も垂れた丸平底である。体部は外傾して直線的に開き、内外面ともナデ調整される。内耳は粘土紐を口縁端から底部方向へ回し、体部との接合個所では肉厚となる。内耳の個数は不明である。



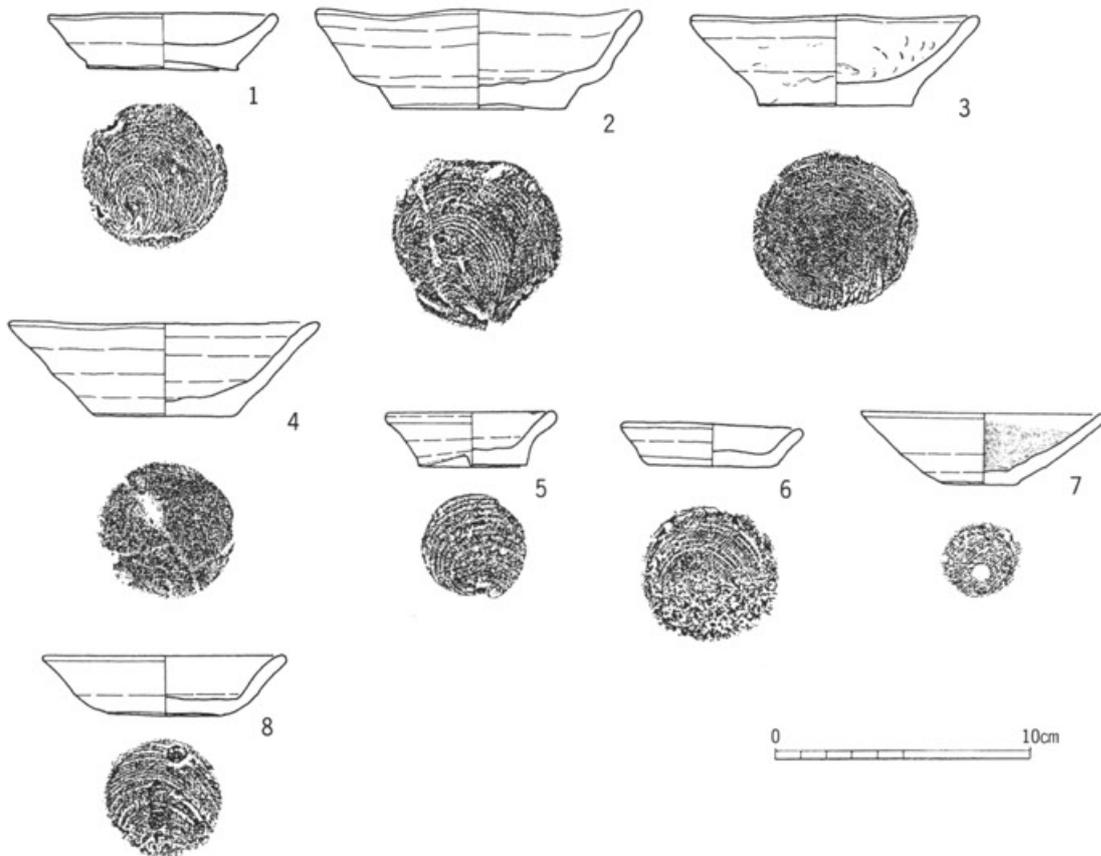
第195図 山室城跡

田向城跡 (第196図、図版9-2)

文献③-231

田向城跡は山武郡芝山町小池に所在する。栗山川支流の高谷川と木戸川に挟まれた標高39m~42mの台地上に位置する。『総州山室譜伝記』によれば、戦国時代後半に、現在の山武郡北半から匝瑳郡にかけての地域を領有した井田氏の最初の居城として登場する。井田氏については古文書で明らかだが、田向城については上記の軍記物以外に記載がない。

1~6は掘立柱建物の地鎮遺構から出土した一括資料である。ピットの対角線上と中心部分に一つずつ正位に置き、中央・東・南のカワラケ内には銭貨が文字面を上にして置いてあった。7は高台の突出が明瞭で、腰が張り出す。口径12.8cm、底径6.8cm、器高3.9cmを測る。長石・スコリアを含む。8は細砂・長石を含む。外面は橙褐色で内面は黒褐色である。9は底部から口縁まで一直線に開くもので、口径12.2cm、底径5.5cm、器高3.7cmである。10、11は小型で10は器高が2.2cm、11は器高が1.6cmである。12は口径と底径の比が大きく、胎土緻密で、内面に油煙が付着する。13は皿状の器形で、体部が緩やかに外反する。口径9.5cm、底径4.5cm、器高2.3cmである。



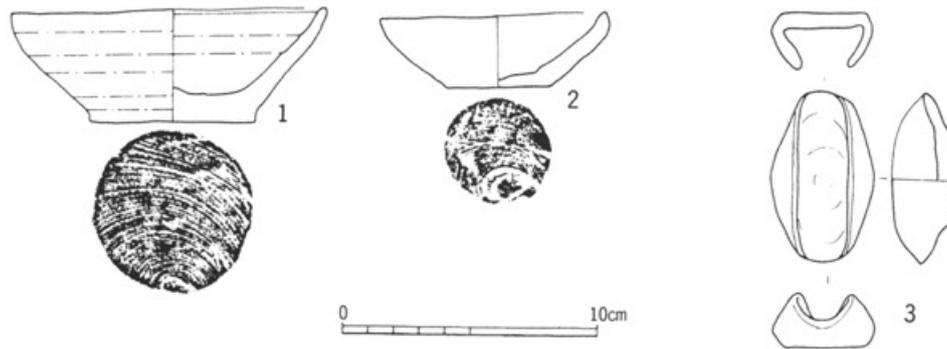
第196図 田向城跡

## 一宮城城之内遺跡 (第197図)

文献③-106

一宮城城之内遺跡は夷隅郡一宮町一宮に所在する。九十九里平野を眼下に見下ろす、標高18mの丘陵の東端に位置する。中世には正木氏の居城であり、近世に入ると明暦3年(1657)の脇坂淡路守と文政年間の加納久儔が一宮に陣屋を構えている。陣屋は幕末まで使用されたというが、一宮陣屋には脇坂陣屋と加納陣屋があり、双方とも位置についてははっきりしない。

カワラケは大小2種類あり、大きい方は口径12.5cm、底径6.5cm、器高4.4cmで、小さい方は口径9.0cm、底径4.1cm、器高2.8cmである。大型のものは底部が厚く、底部を少し残して糸切りしている。小型のものは底部よりも体部の方が厚くなっている。口縁端でやや内湾する傾向にある。また、口縁の最大幅6.8cm、最小幅2.0cm、底径3.3cm、最大高2.2cmを測る耳カワラケも出土している。



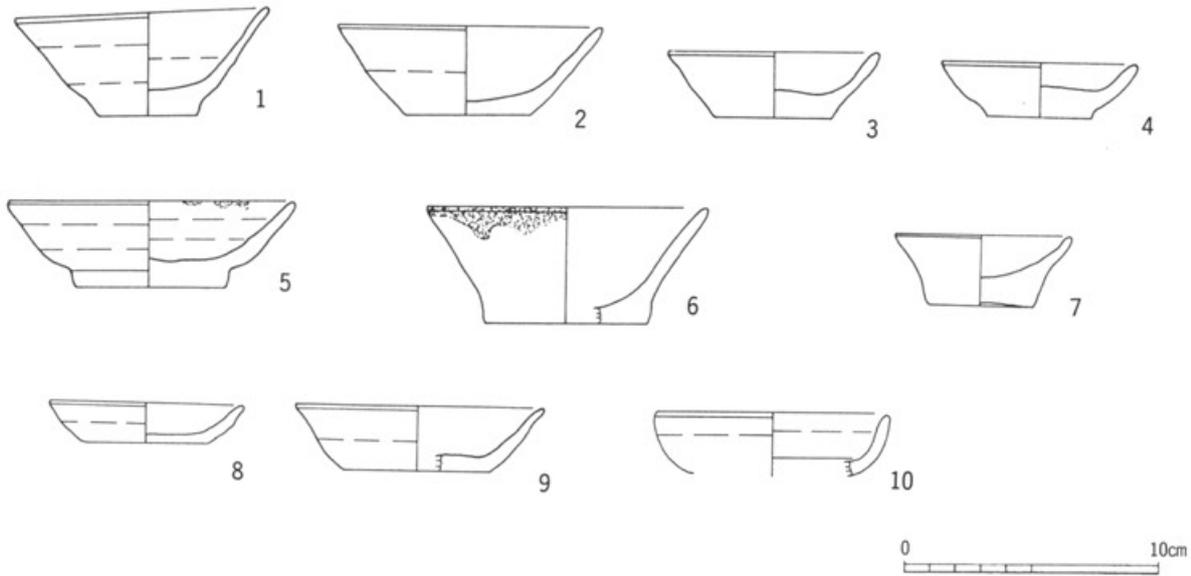
第197図 一宮城城之内遺跡

## 大多喜城跡 (第198図)

文献③-022

大多喜城跡は夷隅郡大多喜町大多喜に所在する。太平洋に注ぐ夷隅川が、中流域で流れを北から東へ変えるが、この屈曲部に西から東に張り出した丘陵上に位置する。近世になって著された軍記物によれば、上総武田氏が大永元年(1521)頃に築城し、天文13年(1544)に里見氏の重臣正木時茂が武田氏にかわって入城したとされる。天正18年(1590)には本多忠勝が入城するが、その後、阿部、稲垣、大河内松平氏などが城主となり、明治維新を迎えた。県立総南博物館建設時に発掘調査が実施されており、その際に出土したカワラケは、津田芳男・矢野淳一両氏により分類②-298されているので、これを基準に紹介する。

1はA類で、台状で底厚の底部をもち、器形は直線的に開き口縁部に至る。器高は高く碗形のものである。体部下端を強くナデ、底部を台状に作り出す。2はB類で、器形は直線的に開き口縁にいたる。器高は高く碗形のものである。底厚でやや台状になる底部をもつが、A類ほど顕著ではない。3はC類で、小型の皿類。底部は厚手である。4はD類で、小型の皿類。器形はC類に似るが、A類と同様に厚手で台状に作り出す底部をもつもの。5はE類で、D類に似て底厚で台状に作り出す底部をもつ、大型の皿類。口縁部に煤が付着するものが多く、灯明皿に利用されたものであろう。6、7はF類で、底部から外反気味に立ち上がる器形。大型と小型がある。8、9はG類で、小型の皿類。C、D類に比べ底径は大きくなり、器厚が薄い。10はH類で、丸みをもつ器形の小型の皿。底径は大きく、器厚も薄い。カワラケは概して、回転糸切り離したが、まれに静止糸切りが見られる。また、見込みを指ナデするものや、底面に板目状の圧痕が残るもの、底部外面を指ナデで、糸切り面を消すものもある。焼物の組成中、カワラケが48%、土師質土器が1%を占める。③-263



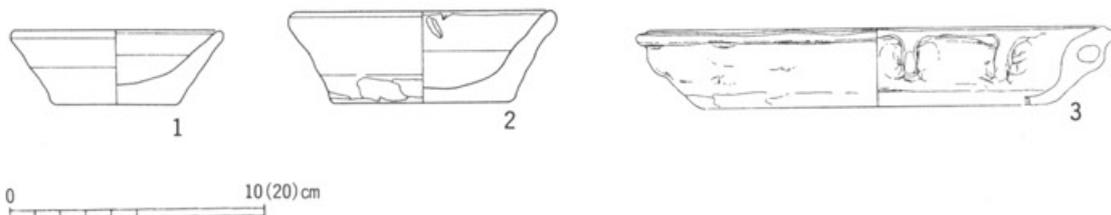
第198図 大多喜城跡

山中台遺跡 (第199図)

文献③-239

山中台遺跡は東金市山田に所在する。太平洋に注ぐ真亀川の支流小野川に北方から開析を受けた南北に伸びる舌状台地のほぼ中央に立地する。中世から近世の遺構・遺物を検出したが、中世を主体とする地点と近世を主体とする地点に、大きく分かれる。近世を主体とする地点からは、屋敷を構成する掘立柱建物、地下室、土坑墓、溝、土坑、ピット等が検出された。9号地下室からは、瀬戸・美濃産織部皿、唐津三島手大鉢、肥前磁器染付碗、青磁香炉などと共に、内耳土器が出土している。

この内耳土器3は、口径推定38.4cm (1尺3寸)、底径27.4cm、器高6.2cmを測る。底部はおそらく平底と思われる。体部立ち上がりは緩やかで、微妙に内湾する。外面にはナデ調整は認められない。内耳の箇所では、体部が押し出され、器厚がその部分だけ薄くなっている。胎土中に石英粒やスコリア、雲母を含む。内面は暗茶褐色で、外面は真っ黒く煤けている。また、同じ遺構からロクロ目の明瞭な大小2種のカワラケが出土している。大きい方2は推定口径10.6cm (3寸半)、底径7.4cm、器高3.7cmで、底部静止糸切り、体部は直線的に立ち上がる。総じて器壁が厚い。小さい方1は、推定口径8.6cm (3寸)、底径5.0cm、器高3.0cmで、底部回転糸切りである。胎土中には小砂粒、黒色粒、スコリアを含み、明褐色から暗黒褐色に発色する。



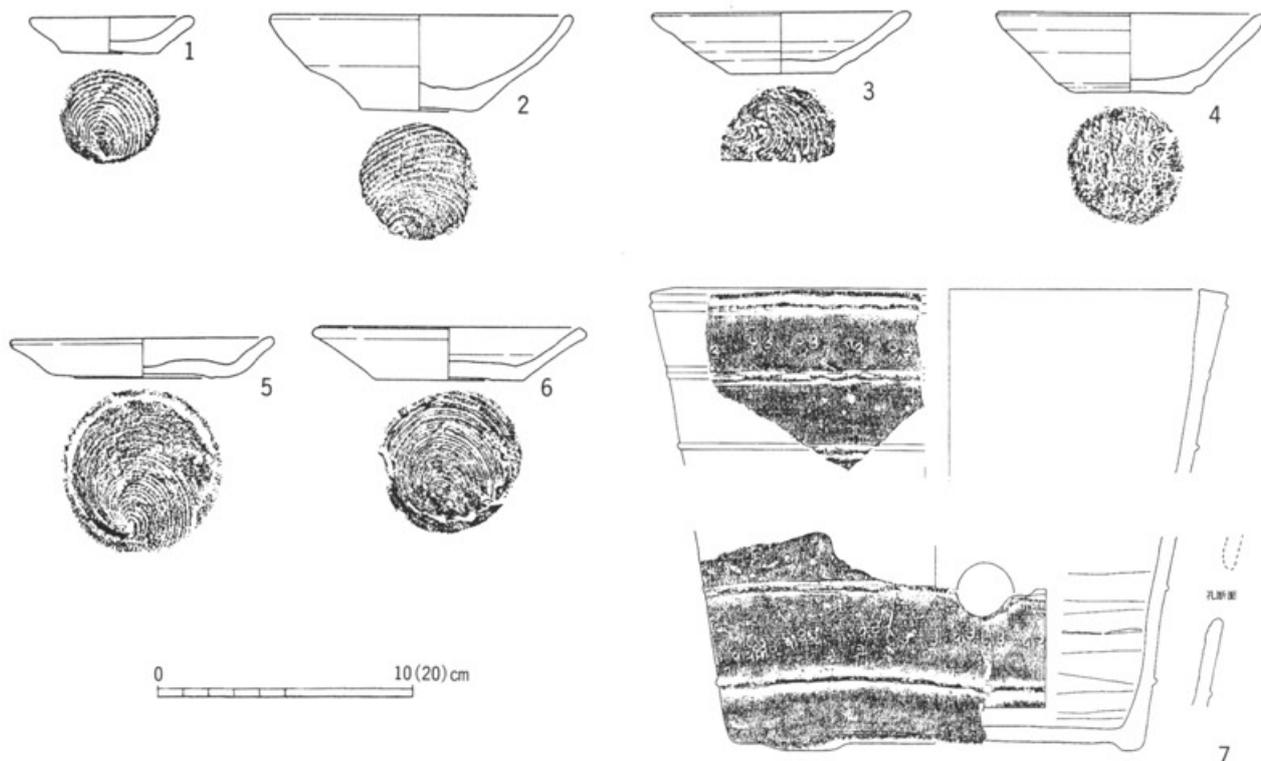
第199図 山中台遺跡

## 古宿・上谷遺跡 (第200図)

文献③-296

古宿・上谷遺跡は山武郡芝山町古宿に所在する。中世岩山城に隣接する遺跡で、13世紀後葉から16世紀半ばにかけての遺物が出土する土豪層の墓域や、17世紀半ばから18世紀にかけての近世屋敷関連の掘立柱建物、作業場的な浅い大型の土坑、貯蔵施設としての地下式坑、井戸、区画溝などの遺構が確認された。遺物は、17世紀前葉から18世紀代の土器・陶磁器が主体となる。

カワラケは中世から近世のものまで出土している。1は口径6.5cm、底径3.8cm、器高1.5cmで、底部回転糸切り、体部は直線的に短く立ち上がる。2は口径11.9cm、底径4.7cm、器高3.9cmで、口径と底径の比が大きく、体部は緩やかに立ち上がり、内湾する。3は口径10.2cm、底径4.1cm、器高2.4cmで、体部が大きく開き直線的に延びる。4は口径10.6cm、底径5.8cm、器高3.2cmで、底部と体部との接合部が外面でやや薄くなっている。5は口径10.4cm、底径5.5cm、器高1.6cmで、内面にタールが付着し、真っ黒になっている。立ち上がり部にやや歪みをもつ。6は口径10.7cm、底径5.7cm、器高2.1cmである。5、6共に内面の底部と体部の接合部が窪むのが大きな特徴である。7は土師質深鉢形土器である。底部から胴部にかけてと口縁部に大きく2分割され、接合できない。これは図面上で復元したものである。報告書では5本のタガを想定したが、他の遺跡出土の深鉢形土器に比べて口径に対する器高が短くなってしまった結果となったので、タガを6本に想定し直し器高を高くした。その結果、口径が45.4cm(15寸)、器高が36.7cmとなった。



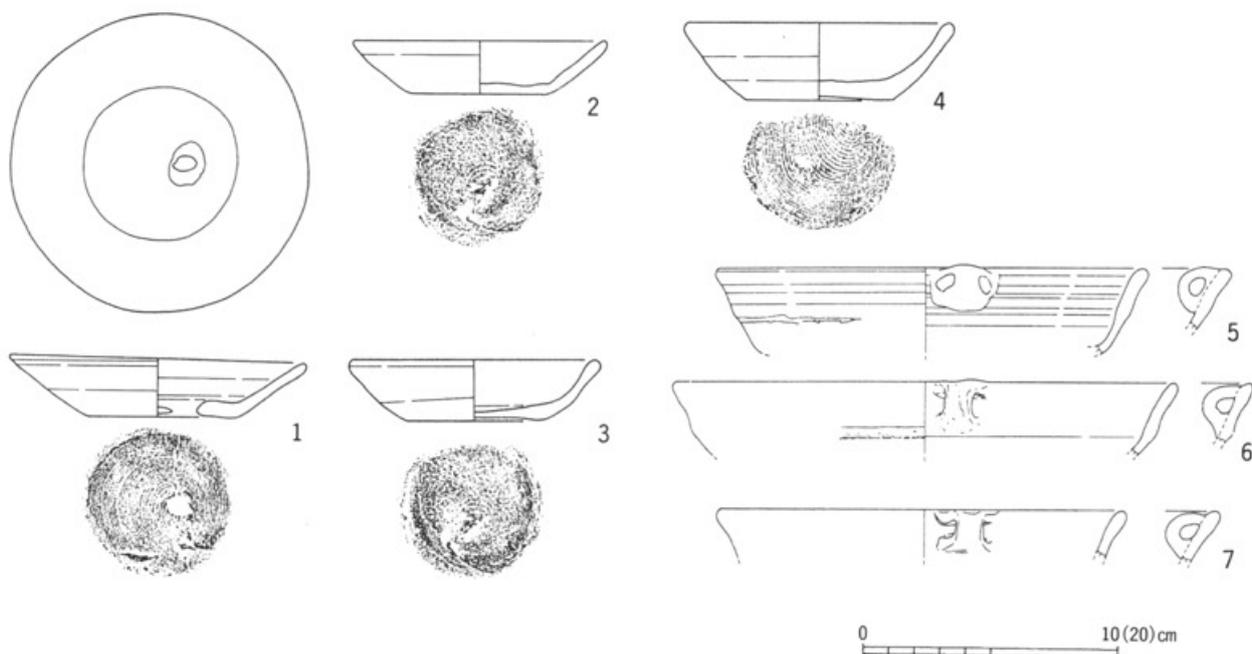
第200図 古宿・上谷遺跡

上宿遺跡 (第201図)

文献③-301

上宿遺跡は古宿・上谷遺跡に隣接し、数十年前までは、岩山地区最大の集落であった。検出した遺構は溝、方形竪穴状遺構、土坑、溝及び土坑列、竈、土蔵基礎部などで、古宿・上谷遺跡で見られた掘立柱建物を検出してない。遺物の主体は18世紀第3四半期から19世紀前半であり、おそらく18世紀第3四半期以降、建物が掘立柱建物から礎石を伴う建物へと変化していったものと考えられる。

この地点で出土したカワラケ2は推定口径10.0cm、底径5.5cm、器高2.1cmで、底部回転糸切り、体部は直線的に立ち上がる。内面立ち上がり部と底面が明瞭に窪んでいる。胎土は薄い褐色で、雲母細粒や鉄分粒を多量に含み、極めて企画性が高い。内耳土器は体部が底部に比べ厚く、口縁端でやや外反する。口唇部は丸くなっている。また、体部と底部との接合部はヘラケズリされている。耳の形態は様々で、団子状のもの(5)、太い粘土紐状のもの(6)、幅の広い板状のもの(7)などが見られる。ほとんどのものが丸平底のタイプである。



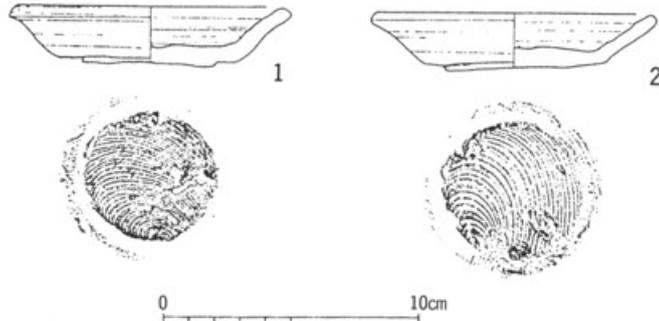
第201図 上宿遺跡

長倉宮脇遺跡 (第202図)

文献③-122

長倉宮脇遺跡は山武郡横芝町長倉に所在する近世塚である。標高37mの狭い台地上に2基並んでいるうちの東側の塚を調査した。平面形態は一辺約8.5mの正方形で、盛土高は約2.6m、主軸は南北方向をさす。墳頂下の旧表土面上から、青銅製双盤1点、和鏡2面、カワラケ2点、寛永通寶11点が出土した。

カワラケ1は口径10.8cm(3寸半)、底径6.8cm、器高2.2cm、底部回転糸切りで、体部はやや外反する。胎土は細砂粒を含み、色調は内外面茶褐色、硬質である。2は口径11.0cm(3寸半)、底径6.9cm、器高2.2cm、底部回転糸切りで、体部は直線的に開く。胎土は細砂粒を含み、内外面とも淡茶褐色、硬質である。塚造営時に何らかの仏教法要を行ったと思われる遺物群である。伴出した寛永通寶(古寛永1枚、文銭11枚)により、塚造営の時期が17世紀後半と考えられる。



第202図 長倉宮脇遺跡

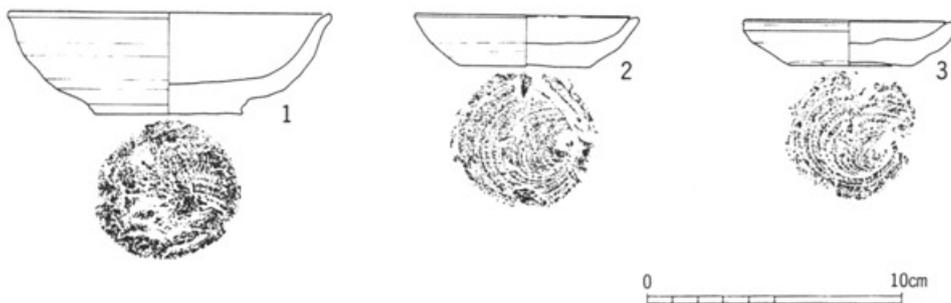
(3) 千葉市・八千代市地域

西屋敷遺跡 (第203図)

文献③-058

西屋敷遺跡は千葉市若葉区大宮町に所在する。都川とその支流に挟まれた標高20m前後の台地上に位置する。千葉氏宗家が滅亡する15世紀後半頃までは、千葉氏宗家か家臣の直接の支配下にあったものと考えられる。遺跡は名主などの上層農民の墓域を核とした集団墓と考えられている。遺跡は調査範囲で3つの台地整形によって造り出された区画に分割される。

010号跡(土坑墓)内から副葬品として一括して5点のカワラケが出土した。図示したのはそのうちの3点である。1は大型で、口径12.6cm、底径5.8cm、器高4.0cmで、底部は高台状に厚く切り残し、腰が張り、口縁端で大きく外反する。内面には一方向に指ナデ痕が残る。明黄褐色である。2、3は小型のもので、口径8.3cm~8.9cm、底径4.7cm~5.6cm、器高1.8cm~2.0cmで、体部は短く緩やかに内湾する。3の口縁端には、棒かへらによる沈線が廻る。外面底部は若干上げ底状になる。



第203図 西屋敷遺跡

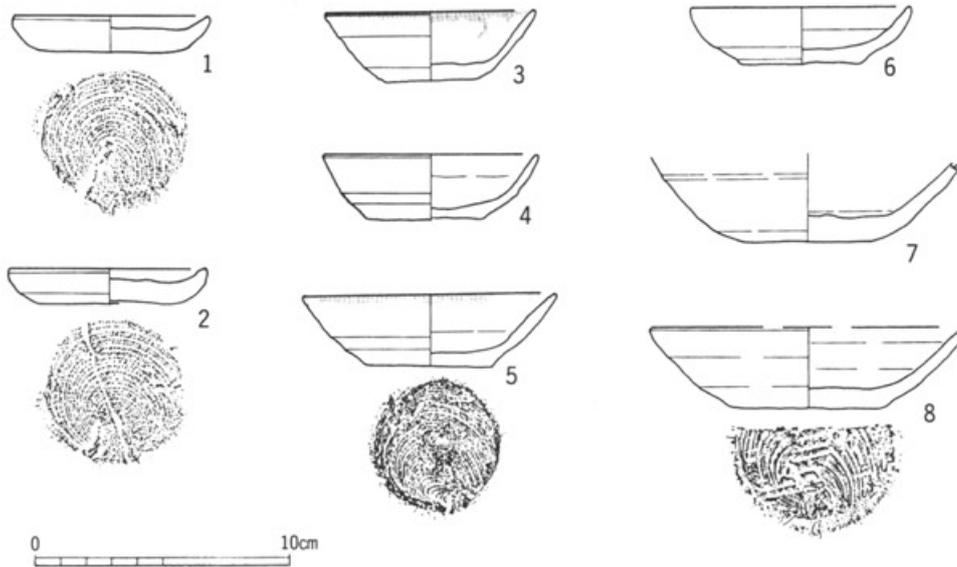
千葉城跡 (第204図)

文献①-091

千葉城跡は千葉市中央区亥鼻に所在する。東京湾を見下ろす北西方向(亥の方角)に突き出た標高約20mの台地先端に位置する。鎌倉時代から室町時代にかけて千葉宗家の居城であったが、享徳4年(1455)千葉胤直とその子胤宣は、一族の原氏と馬加康胤によって、自害に追い込まれた。その後、馬加氏は千葉

宗家を継ぎ本佐倉城を本拠としたため、千葉城は廃城になったと言われる。

主郭土塁下部から蔵骨器として使用されていた常滑産6a型式の壺、古瀬戸前II b期の灰釉四耳壺の蓋として、カワラケが2点(1、2)出土している。小型扁平で、底部は厚く体部は短い。また、多年度にわたる調査から様々な形態のカワラケが出土している。3～5は1号土坑(1982年度調査)出土一括資料で、大小2形態ある。5は立ち上がり部が一旦くびれ、明瞭な稜線をもって肥厚する。また、いずれも底径が短く、腰部が少し張るように見受けられる。6～8は1号地下式坑(1996年度調査)出土一括資料で、やはり大小2形態ある。いずれも、体部が緩やかに内湾する。底部を高台状に切り残すものと、高台がないものがある。



第204図 千葉城跡

廿五里城跡 (第205図)

文献③-131

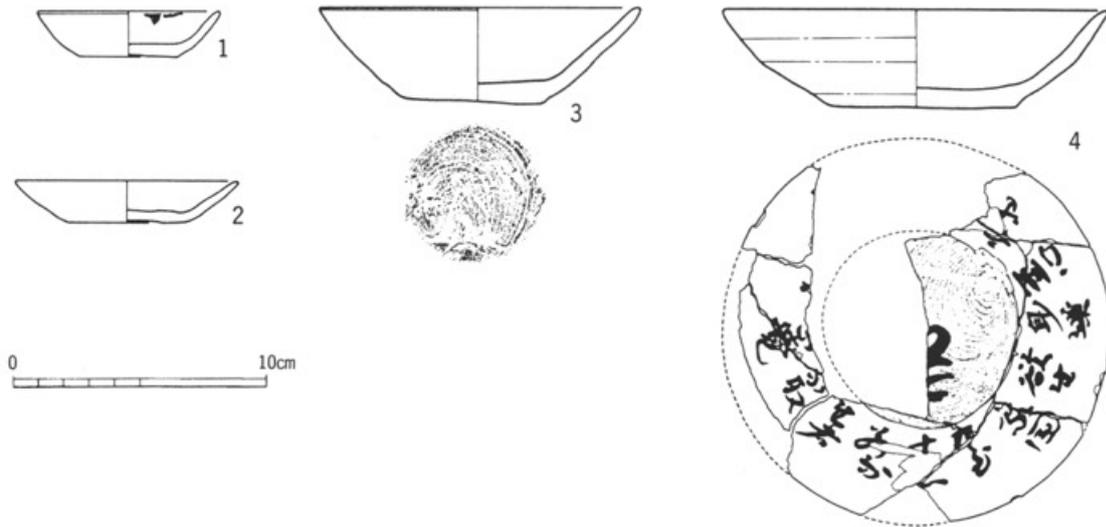
廿五里城跡は千葉市若葉区東寺山町に所在する。東京湾に流れ込む都川支流によって開析された標高25m前後の台地上に位置する。中世には千葉氏の所領下にあったものと考えられる。城館遺構と共に、甕棺墓(塚)、土坑墓、火葬墓、火葬土坑を検出した。

カワラケは小型と大型に分類できる。1は口径6.9cm、底径3.8cm、器高1.8cm、茶褐色で、細砂粒含む。口縁端に煤が付着する。内面中央に横方向の指ナデ痕が残る。2は口径8.5cm、底径4.6cm、器高1.7cm、細砂粒を含み、赤褐色である。3は口径11.4cm、底径5.3cm、器高3.8cmで、明茶褐色。4は口径15.1cm、底径5.9cm、器高3.8cmで、外面体部に『無量寿経』の阿弥陀仏四十八願のうち十八願が墨書される。いずれの形態も皿形で、口縁端が細くなる。

生実城跡 (第206図、図版7-2)

文献①-091他

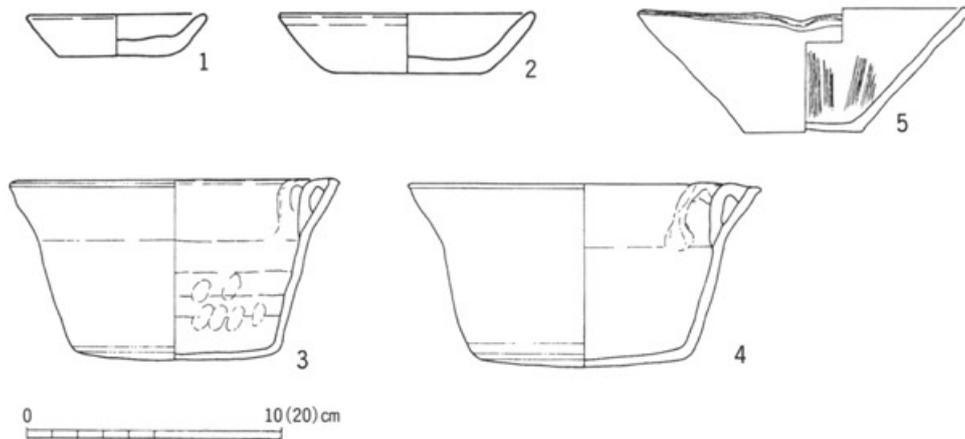
生実城跡は千葉氏中央区生実町に所在する。村田川によって形成された沖積平野を臨む、標高16m～22mの台地上に位置する。足利義明が小弓御所を奪うまで、原氏は小弓城を居城としていたが、国府台合戦で義明が戦死すると、天文8年(1539)原胤定が北生実の地に生実城を築いたとされる。この後、原氏は



第205図 廿五里城跡

臼井城に移り、生実城は上総方面に対処する拠点となった。永禄4年(1561)と元亀2年(1571)には里見氏に攻め落とされるが、再び原氏が奪回した。天正18年(1590)以後、徳川家康の家臣西郷家員が元和6年(1620)まで在城し、その後森川氏が生実藩1万石の領主として、城内の一角に陣屋を構え、明治4年(1871)の廃藩置県まで続いた。

1、2のカワラケは地下式坑一括資料で、大小2形態ある。いずれも皿形で、口径と底径の比が小さい。また、底部と体部の厚さに著しい違いが無く、体部は概ね直線的に延びる。内耳土器3、4は地下式坑覆土一括資料で、底部はやや深めで丸みを帯び、体部は内耳接合部下部から外側に折れる。内耳接合部で、体部が著しく外に突出するようなことはないようである。いずれも1対2の3耳で、外面に煤が付着する。5の土器挿鉢は片口状で、口縁端に浅い溝をもつ。瓦質である。



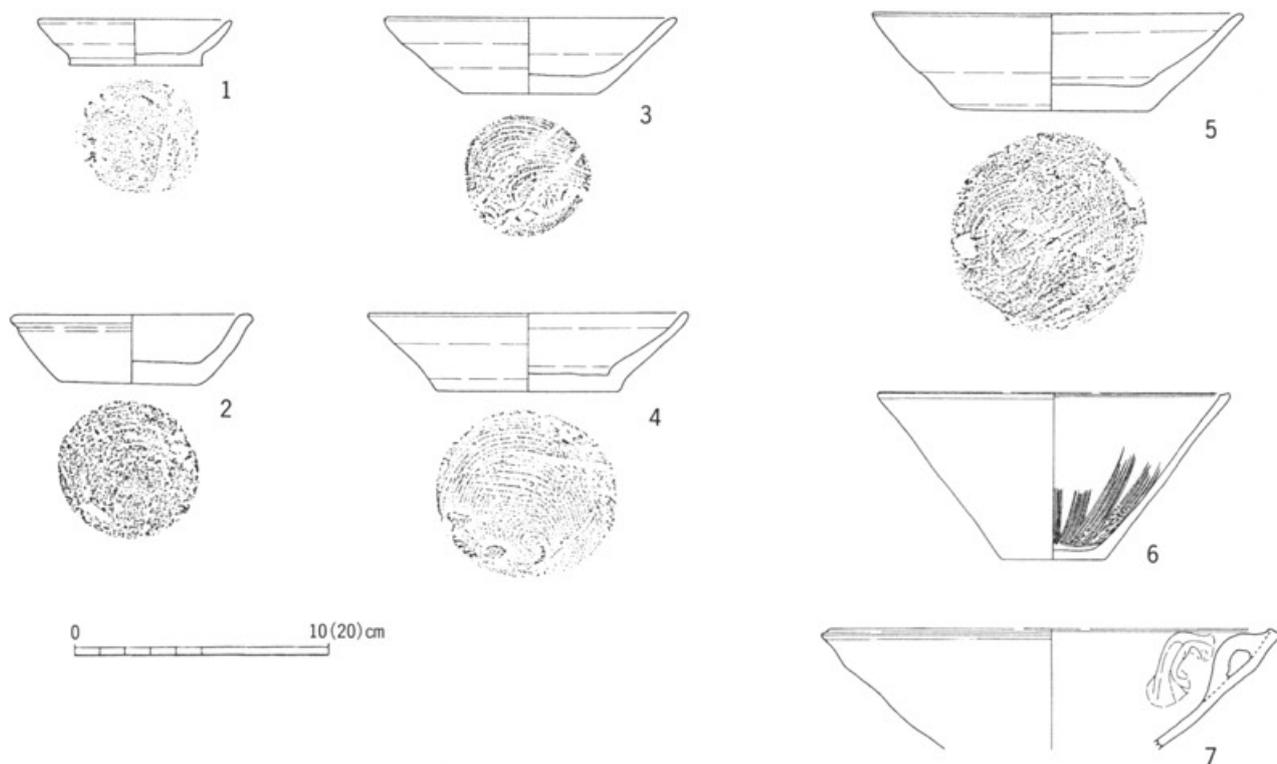
第206図 生実城跡

高品城跡 (第207図、図版7-1)

文献③-279

高品城跡は千葉市若葉区高品町に所在する。東京湾に面する沖積平野を見下ろす、標高約25mの台地上に位置する。中世には千葉庄高篠にあたり、中世を通じて千葉氏や家臣の支配下にあった。

カワラケは小型、中型、大型に大きく分類できる。小型の1は口径7.5cm、底径5.3cm、器高1.9cmで、見込み横ナデ、胎土中に白色針状物を含み、明黄褐色。2は全体に厚手で、口径9.0cm、底径5.4cm、器高2.8cm、見込み横ナデ、底部外周ナデ、胎土中に白色針状物を含み、黒褐色である。中型の3は径11.2cm、底径5.2cm、器高3.0cmで、底部に板状圧痕が残り、黄褐色である。4は口径12.4cm、底径7.1cm、器高3.1cm、胎土中に白色針状物を含み、黄褐色である。大型の5は口径14.4cm、底径7.5cm、器高3.9cm、見込み横ナデ、胎土中に白色針状物を含む。底面に簾状圧痕が残る。明黄褐色である。瓦質の内耳土器6は口径27.4cm、底径7.8cm、器高13.2cmで、砂粒多く、黒褐色。土器挿鉢7は口径に比べ底径が著しく小さいタイプのもので、瓦質である。



第207図 高品城跡

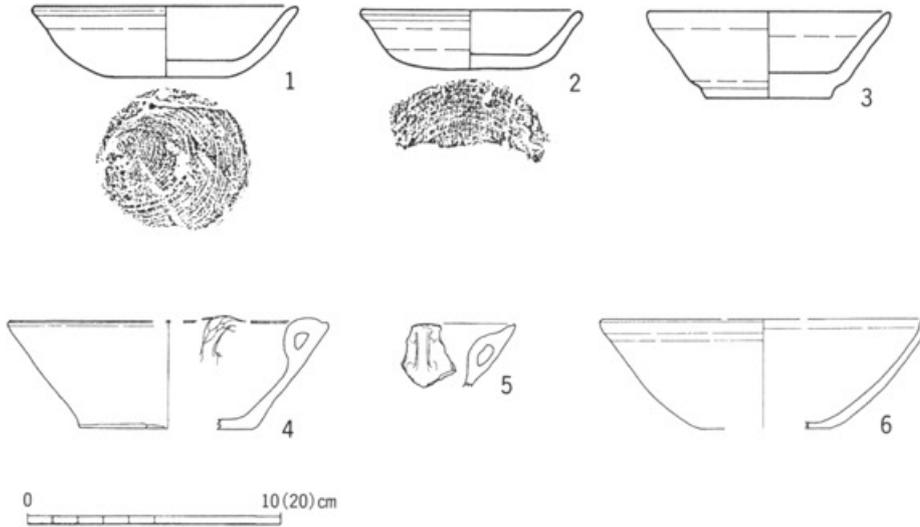
南屋敷遺跡 (第208図)

文献①-091

南屋敷遺跡は千葉市若葉区源町に所在する。葎川支流によって開析された標高約30mの舌状台地の中央部からやや基部側に寄った所に位置する。中世には千葉荘寺山郷に属し、鎌倉中期には千葉氏家臣「名主寺山殿」による支配を受けていた。15世紀初頭には寺山氏や木内氏の所領があった。遺跡は四方を土塁と堀によって囲まれた方形館跡である。総じて遺物量は少ないものの、大窯1段階の縁釉挟み皿や挿鉢が主体で、15世紀後葉から16世紀初頭の年代を想定できる。

カワラケは1、2が大小2形態の皿形で、口縁端でやや外反する。3は杯形で、底部を高台状に切り残

しているため、結果的に底部が分厚くなっている。体部は直線的に延びる。内耳土器（4～5）はいずれも瓦質で、5は4に比べ口径と底径の比が大きいものであろうか。6は4に比べ薄手で、体部は緩やかに内湾し、口縁端が玉縁状に肥大する。



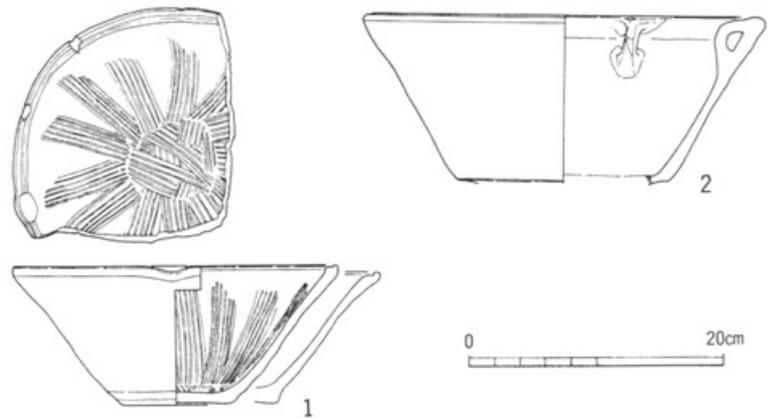
第208図 南屋敷遺跡

井戸向遺跡（第209図）

文献③-142

井戸向遺跡は八千代市萱田に所在する。印旛沼に流れ込む新川の中流左岸、標高20m前後の台地上及びその斜面に位置する。12世紀から13世紀前半にかけては国衙領であったが、13世紀後半伊勢神宮の御厨になった。中世の墓地遺跡で、調査では土坑墓から「山吹双鳥鏡」と短刀が出土している。また、小型方形の埋納銭土坑からは新の貨銭にはじまり明の宣徳通寶、朝鮮通寶に至るまで660枚の輸入銭貨が出土している。

土器擂鉢1は口径25.2cm、底径8.7cm、器高11.1cmで、胎土中に砂粒を含む。黒褐色で、底部に木葉痕が残る。口縁端が片口状になり、内面には櫛目が入る。内耳土器2は口径31.3cm、底径16.4cm、暗褐色で瓦質。砂粒を含み、外面には煤が付着する。



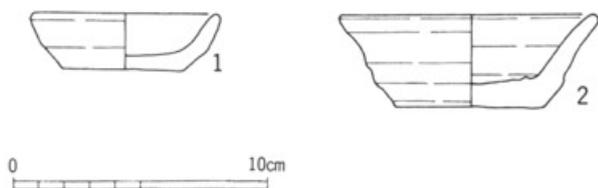
第209図 井戸向遺跡

黒ハギ遺跡 (第210図)

文献⑤-061

黒ハギ遺跡は千葉市緑区土気町に所在する。標高90m前後の鹿島川源流部の台地上一帯に立地する。平成9年度のI区調査では、中世掘立柱建物35、溝40、道路4、土坑23、井戸1、地下式坑3などを検出しており、現在も調査を継続している。

紹介したカワラケは大小あるが、いずれも小型で、口径と底径の比が小さく、体部の立ち上がりが急である。



第210図 黒ハギ遺跡

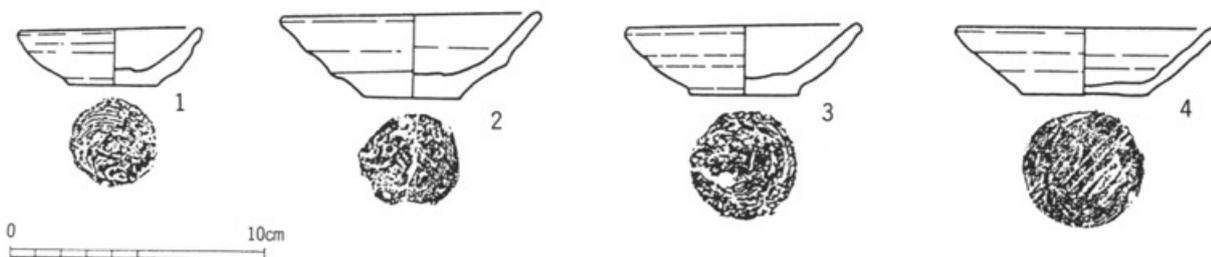
(4) 東葛飾郡地域

根木内遺跡第4地点 (第211図)

文献③-270

根木内遺跡第4地点は松戸市根木内に所在する。後述する小金城跡の東方約1km、標高23m前後の台地上に位置する。根木内城の一角にあたり、高城氏が小金城にその拠点を移すまで在城していたとされる。第4地点では、空堀、掘立柱建物、土坑等城郭の一部の遺構が検出された。空堀の張り出し部コーナーから、底面より約10cm程浮いた状態で、2か所でカワラケが重なって出土した(3が1点、4及びその同形態合計5点)。

カワラケ1は口径7.3cm、底径3.5cm、器高2.3cmで、胎土中に混和材を含まない。2は口径10.2cm、底径3.8cm、器高3.3cmで、体部外面に明瞭な稜を残す。3は口径9.4cm、底径4.3cm、器高2.8cmで、回転糸切り離したが、高台状に底部を残している。4は口径10.4cm、底径4.9cm、器高2.7cmで、体部は直線的に延びる。全体に薄手で、胎土中に砂粒・白色粒子を若干含む。3及び4は出土状況から同一時期のものである。



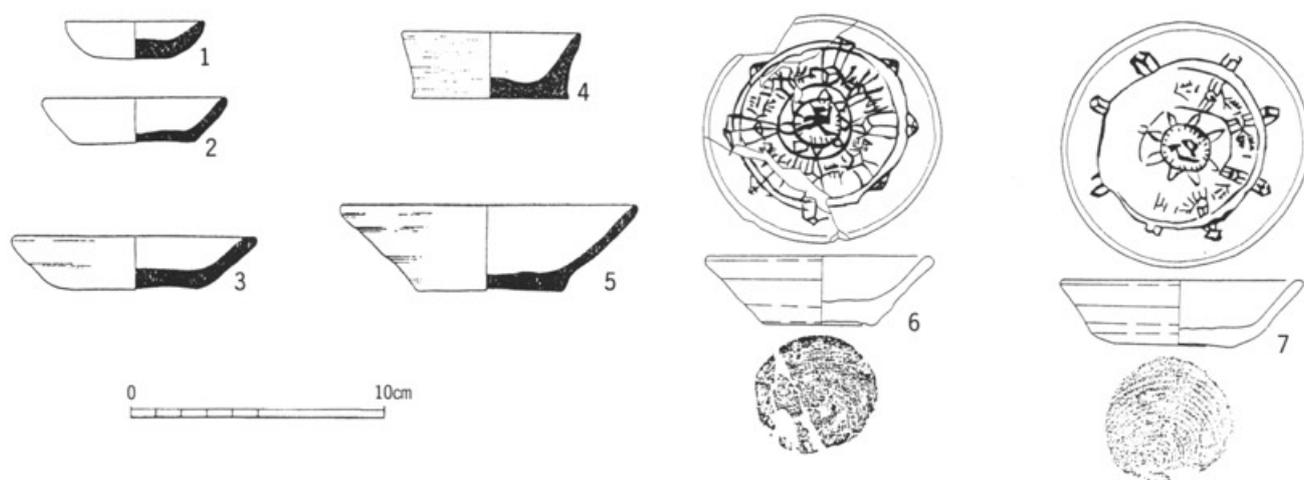
第211図 根木内遺跡第4地点

小金城跡 (第212図、図版1-1)

文献③-005・271

小金城跡は松戸市大谷口に所在する。江戸川に向かって東から西に突き出た標高20m余りの台地上に位置する。戦国時代後期には原氏と主従関係にあった高城氏が、天文7年(1538)以降小金城を本拠としていた。東西800m、南北600mに及ぶ大規模な城郭である。

カワラケ1は口径5.5cm、器高1.5cm、小型・厚手で立ち上がりがはっきりしない。2は口径7.3cm、底径4.6cm、器高1.8cmで、胎土は5に類似する。3は口径9.6cm、底径5.0cm、器高2.1cmで、器壁厚く焼成やや不良で、脆い。灯明皿としての痕跡が残る。4は口径7.0cm、底径6.1cm、器高2.7cmで、底面は厚く、体部は外反しながら垂直に近く立ち上がる。水引き痕が明瞭である。5は口径11.7cm、底径5.7cm、器高3.5cm、口縁はやや内湾気味で、肥大する。淡黄褐色ないし橙褐色で、胎土は精選されている。内面には顕著な口クロ目が残る。建物付近から多く出土している。6及び7は輪宝墨書土器で、6は口径8.7cm、底径4.2cm、器高2.8cm、7は口径9.3cm、底径4.5cm、器高2.7cmを測る。いずれも赤褐色で、胎土中に鉄分を含み、緻密である。



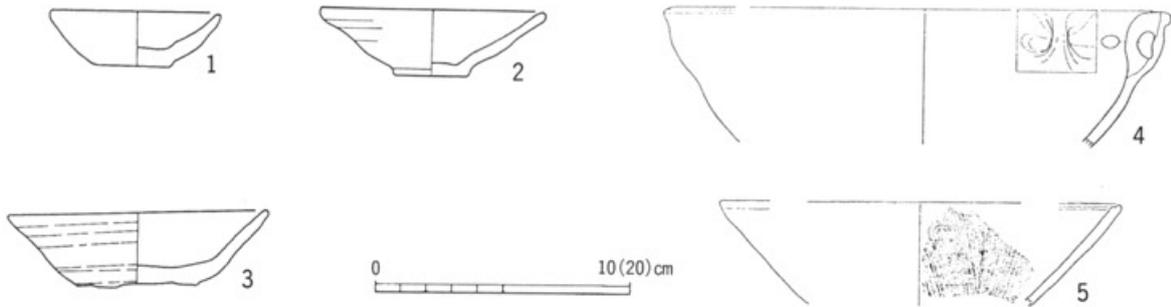
第212図 小金城跡

## 鹿島前遺跡 (第213図)

文献③-077

鹿島前遺跡は我孫子市中峠台に所在する。手賀沼と利根川に挟まれた、標高約20mの台地上に位置する。当地域は中世前期には相馬御厨に含まれていた。また、本土寺過去帳に天正17年(1589)没した「道悦 中峠 河 石雲齋/天正十七巳丑三月」など、河村氏が中峠に居住したことが見え、同氏が城主とされる中峠城跡(\*)も所在する。中世から近世にかけての大規模な墓地遺跡である。

カワラケ1は厚手で、若干内湾気味である。赤褐色で胎土中に雲母を少量含む。2は底径が著しく小さく、体部が直線的に大きく開く。底部と体部接合部内面が大きく扶れるように薄くなる。胎土は密で、褐色である。3は大形で、胎土は密で、黄褐色である。立ち上がり部が若干張り出す。4の内耳土器は胎土中に雲母・石英が含まれ、薄い褐色である。内耳は紐状で体部との接合部は太くしっかりしている。また、内耳接合部の体部面は内側から指で押し出され、器壁が薄くなっている。内耳土器は概ね立ち上がり之急で、深いタイプのものばかりである。雲母・石英含み、薄い褐色である。5の土器播鉢は内面灰色、外面暗褐色である。



第213図 鹿島前遺跡

三輪野山第Ⅲ遺跡 (第214図)

文献③-150

三輪野山第Ⅲ遺跡は流山市三輪野山に所在する。江戸川中流左岸の標高約17mの台地上に位置する。中世前期には矢木（八木）郷に含まれ、相馬氏一族の八木氏の支配下にあり、戦国時代には高城氏の支配に入っていたと考えられる。中世から近世にかけての大規模な墓地遺跡である。開元通寶から宋元通寶、宣和通寶、咸淳元寶、洪武通寶、永楽通寶、宣徳通寶、寛永通寶、文久永寶などの27種393枚の多量の錢貨が出土している。したがって、カワラケ、内耳土器にもかなりの年代幅が想定される。

内耳土器は、1のように胎土中に多量の雲母を含み、体部が緩やかに立ち上がるものと、2、3の雲母を含まない底部が平坦、体部が垂直に立ち上がるものの2種類に大きく分類できる。1は復元口径39.0cm（1尺3寸）、底径30.5cm、器高5.7cmで、体部のほぼ中間あたりに紐状の内耳を付ける。2、3は板状の耳を口縁端から底面に掛けて貼り付けている。



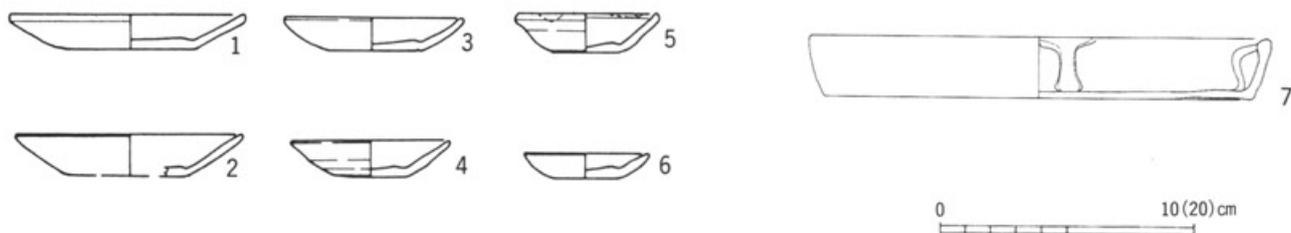
第214図 三輪ノ山第Ⅲ遺跡

花前Ⅱ-1遺跡 (第215図)

文献③-078

花前Ⅱ-1遺跡は柏市船戸に所在する。田中藩第25代代官を勤めた増田半兵衛の屋敷跡と考えられる。6間×8間の主屋や土蔵の基礎部分をはじめ井戸、流し溜、土坑、溝などを検出した。主屋の基礎は粘土・ロームで版築し、その上に土台石を置いて上屋を構築したもので、土蔵は布堀り後、ローム、粘土、黒色土を交互に充填し、築き固めている。

出土したカワラケは、大きさから大中小の3種類に分類できる。大型の1は口径9.3cm（3寸）、底径5.0cm、器高1.4cm、非常に薄手で、内面立ち上がり部が深く窪む。2は同型で、3はやや小型（2寸半）のものである。中型の4は口径6.3cm（2寸）、底径2.8cm、器高1.5cmで、小型の6は口径5.0cm（1寸半）、底径2.4cm、器高1.0cmである。1、3、5はいずれも灯明皿として使用されていた。カワラケは江戸カワラケと見られる。内耳土器7は口径36.5cm（1尺2寸）、底径33.7cm、器高4.8cmで、内面は赤みを帯び、外面は煤が付着する。底面は完全に平坦で、体部は短く口縁端で肥厚する。内耳は幅の広いものが、口縁部から底部立ち上がりに近いところに付く。



第215図 花前II-1遺跡

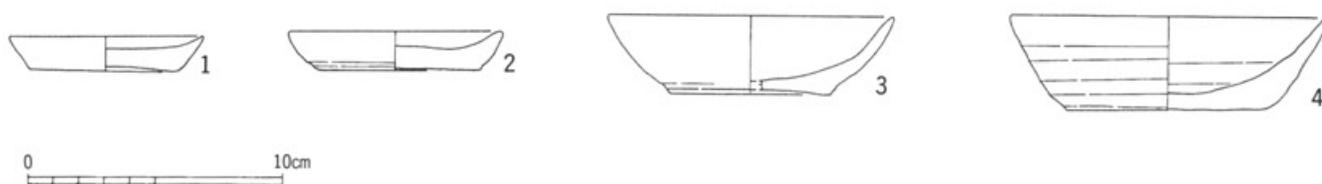
(5) 印旛郡地域

駒井野西ノ下遺跡 (第216図)

文献②-306

駒井野西ノ下遺跡は成田市駒井野に所在する。利根川に注ぐ取香川の最上流部に面した、標高40m前後の台地上に立地する。駒井野という地名は貞和4年(1348)正月晦日「平清胤寄進状」(「香取分飯司家文書」)に見え、平清胤が駒井野の阿弥陀堂に免田を寄進したことがわかる。調査では溝によって区画された範囲に2間×6間、四面縁で、廊状の張り出しが見られる掘立柱建物が検出された。中世の掘立柱建物としては珍しい礎石立ての建物で、在地土豪層の屋敷跡と考えられる。

掘立柱建物を囲む溝の北西コーナー付近から、数十点を数える一括廃棄されたカワラケが出土した。このカワラケは大きさで大きく2つに分類できる。1は口径7.6cm、底径5.7cm、器高1.4cm、底面が分厚く体部がほとんどなく、すぐに口縁となり、口縁端が鋭利な処理をされる。2は口径8.4cm、底径6.5cm、器高1.6cmで、口縁端が少し丸みを帯びている。1、2ともに体部が短く、まるでコースターのようなものである。一方3は口径11.2cm、底径6.3cm、器高3.1cmで、底部外面がやや窪む。体部は緩やかに内湾する。4は口径12.5cm、底径7.6cm、器高3.7cmで、体部立ち上がりが分厚く、内面は緩やかに立ち上がる。結果的に立ち上がり部が相当分厚くなっており、重量感がある。底部はいずれも回転糸切りである。



第216図 駒井野西ノ下遺跡

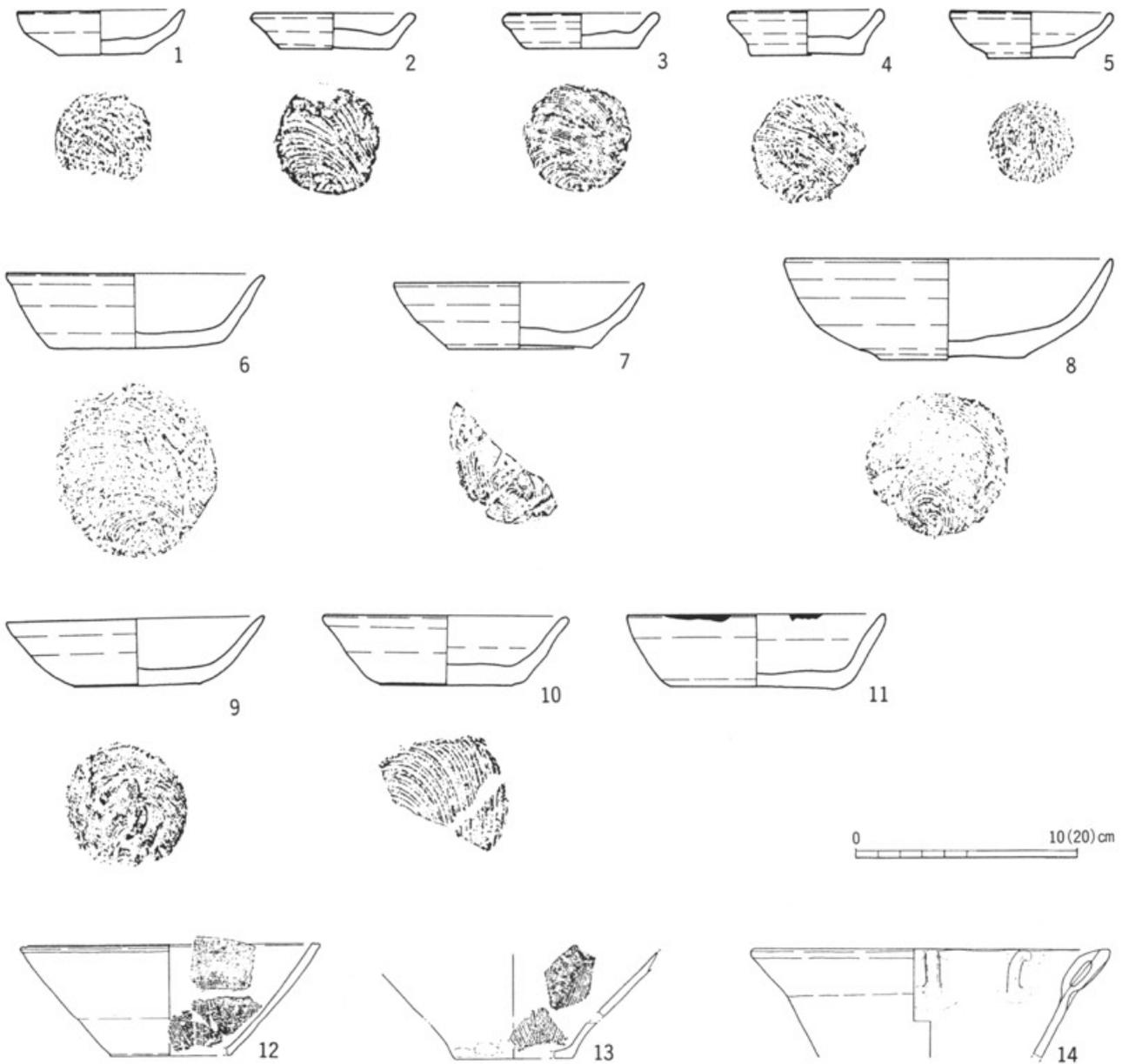
小林城跡 (第217図、図版1-2・2-1・2-2)

文献③-228

小林城跡は印西市小林に所在する。利根川及びその支流である将藍川と長門川によって開析された標高25mの台地先端部に位置する。小林城を直接示す中世史料はない。16世紀半ば以降には印西荘が千葉宗家の所領となっていた。中世の出土陶磁器・土器のうち土師質土器(カワラケを含む)が411点(49.5%)と最も多く、次いで内耳土器(土鍋)84点、瓦質土器115点となり、73%を在地産土器が占める。

カワラケは大きさから大中小の3種類に分類できる。小型の1と5は口径7.4cm~7.6cm、底径3.9cm~4.0cm、器高2.0cm~2.1cmで、口径と底径の比が大きく、体部が緩やかに内湾する。一方2~4は口径7.1cm~7.5

cm、底径5.0cm～5.1cm、器高1.6cm～2.0cmで、口径と底径の比が小さく、底部が厚めで、体部が短く直線的である。中型の7と9は口径と底径の比が比較的大きく、緩やかに立ち上がった後、口縁端が鋭利になる。1と同形態になる。6、10、11は7、9に比べると口径と底径の比が小さく口縁端も丸く処理される。口径11.1cm～11.7cm、底径5.9cm～7.7cm、器高3.2cm～3.5cmである。8は大型で1と形態が類似する。口径15.0cm、底径6.5cm、器高4.5cmである。土器挿鉢(瓦質)12は口径27.1cm、底径11.0cm、器高10.4cmで、体部は直線的に立ち上がり、口縁端に浅い沈線が巡る。内耳土器14は口径32.6cmで、底部は不明。細いリング状の内耳が付く。口縁から5cmほど下部のところで、体部が大きく外側に折れる。外面黒褐色で、内面浅黄橙色である。



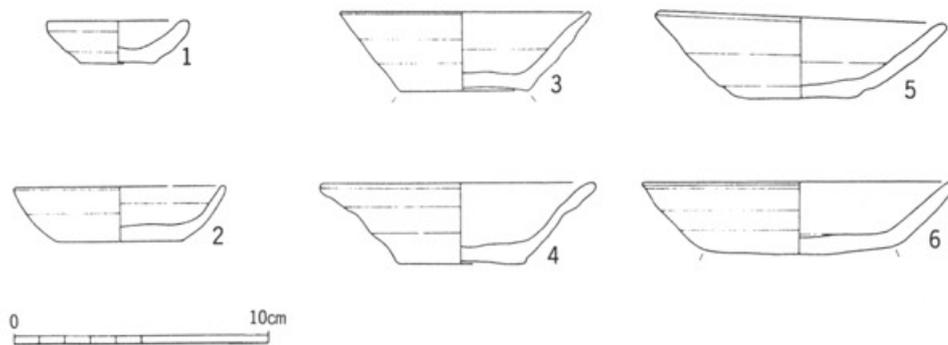
第217図 小林城跡

## 高岡大福寺遺跡 (第218図)

文献③-210

高岡大福寺遺跡は佐倉市高岡に所在する。鹿島川支流の高崎川右岸、標高30m前後の台地上に立地する。12世紀後半には遺跡は印東荘に含まれ、上総氏系印東氏の拠点の所領であった。13世紀中ごろ以降は千葉氏の勢力下にあった。4万㎡に及ぶ広範囲の調査区は7ブロックに分かれ、15世紀代には、屋敷、寺院、墓地となっていた。屋敷地は百姓・作人層のもので、寺院は土豪や有力農民層により維持・運営されていたものとされる。

カワラケは大きさで、大中小に分類できる。小型の1は口径5.6cm、底径2.9cm、器高1.7cmで、全体に厚手で、体部は短く内湾する。鉄分粒・白色砂粒を含み、淡茶褐色。中型の2は口径8.3cm、底径4.9cm、器高2.2cmで、底部は厚く体部は緩やかに内湾する。口縁部に油煙付着し、胎土は1に同じである。大型の3、4は鉄分粒・白色砂粒・半透明砂粒を含む。3が口縁が細く真っ直ぐなのに比べ、4は口縁端が肥大し、外反する。5は体部がやや内湾気味である。底部外面に板状の圧痕がある。内面指ナデ、淡茶褐色である。また、外面の底部と体部の接合面が窪む。3～5が口径と底径の比が大きいのに比べ、6はその比が小さい。口径12.3cm、底径7.4cm、器高2.9cmである。胎土中には雲母を含む。



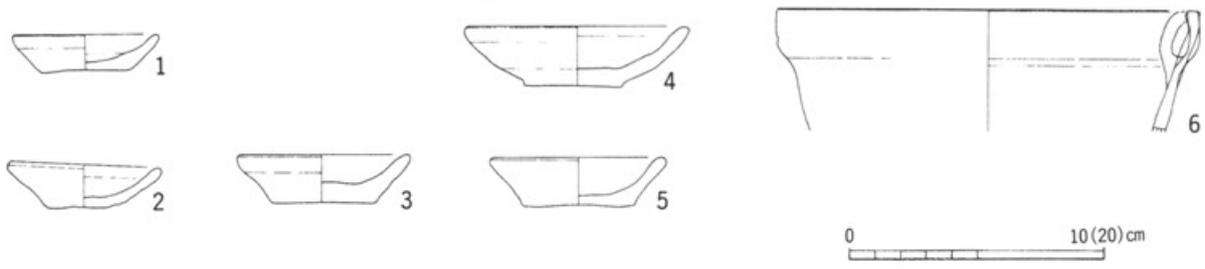
第218図 高岡大福寺遺跡

## 駒井野荒追遺跡 (第219図)

文献③-196

駒井野荒追遺跡は成田市駒井野に所在する。浅い谷を隔てて、駒井野西ノ下遺跡の南東側に位置する。調査では中世から近世にかけての建物関連の遺構を検出した。掘立柱建物内の不整形の土坑内から、正位の状態でカワラケ5点が出土している。この長軸0.75m、短軸0.68m、深さ0.20mの不整形の土坑は炭化物や焼土を多く含み、カワラケ自体も被熱している。

大きさから大中小の3種類に分類できる。小型の1は口径と底径の比が比較的小さく、逆に2は大きい。3、5はほぼ同形態であるが、底部の厚さが著しく異なる。4は口径と底径の比が大きく、口縁端がやや肥大し、内湾する。1は口径5.6cm、底径3.5cm、器高1.4cmで、3は口径6.6cm、底径4.0cm、器高1.9cmで、4は口径8.6cm、底径3.8cm、器高2.4である。内耳土器の6は体部の立ち上がりがかかなり急で、口縁端に内耳が付く。内耳の下側接合部の位置から外側に大きく屈曲するのが、当遺跡出土の内耳土器に共通する特徴である。口径33.0cmで、胎土中に石英・雲母を多く含む。



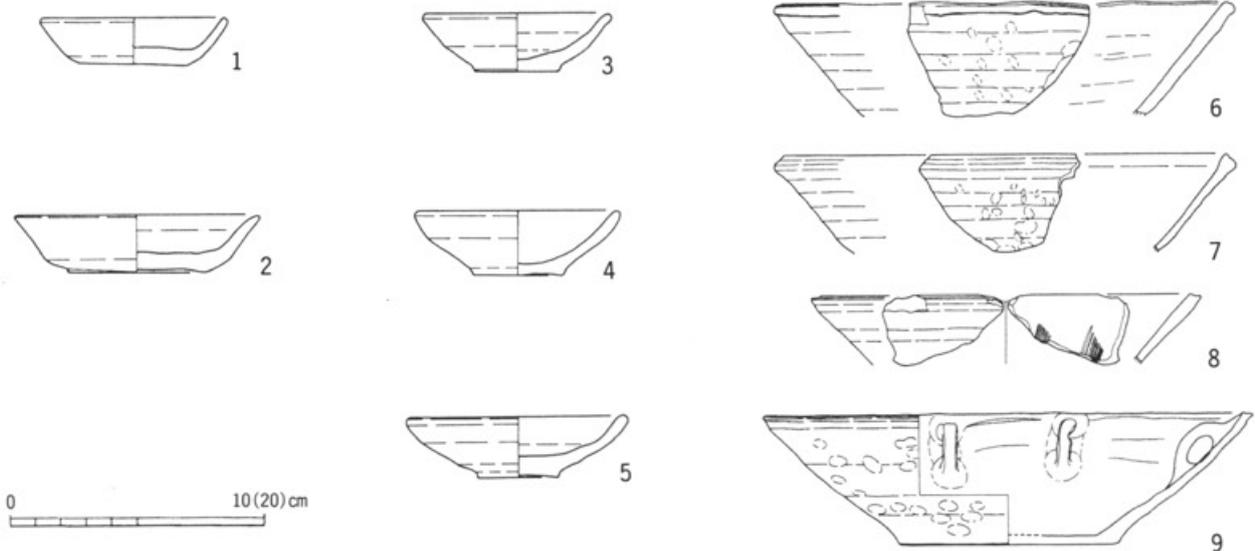
第219図 駒井野荒追遺跡

北ノ作遺跡 (第220図、図版4-1・4-2・5-1・5-2)

文献②-360・363

北ノ作遺跡は四街道市物井に所在する。印旛沼に注ぐ鹿島川の左岸、標高28m前後の台地上に立地する中世城館跡である。北ノ作(A区)出土遺物については、文献②-363にデータが発表されており、概ね15世紀第3四半期から16世紀初頭を中心としている。

カラケは形態及び大小の違いから大きく4つに分類できる。1は土師器杯形で、口径7.1cm、底径4.1cm、器高2.0cm、底部回転糸切りで、底面が厚く体部はやや内湾気味である。2は口径9.5cm、底径6.5cm、器高2.3cm、底部回転糸切りで、外面立ち上がりに稜をもち、口縁が外反する。3は口径7.4cm、底径3.3cm、器高2.3cm、底部回転糸切りで、口径と底径の比が大きく、口縁が外反する。4は口径8.1cm、底径3.5cm、器高2.6cm、底部回転糸切りで、3と比べ口縁部が肥厚し、内湾する。4は3がさらに扁平になったものである。瓦質の播鉢や鉢、内耳土器も出土している。8は口径38.5cm、底径17.1cm、器高10.5cmで、口径と底径の比が大きい。内耳は細い紐状で、接合部体部面はほとんど外面に突き出ていない。内面はナデ、外面には指頭痕が顕著に残る。



第220図 北ノ作遺跡

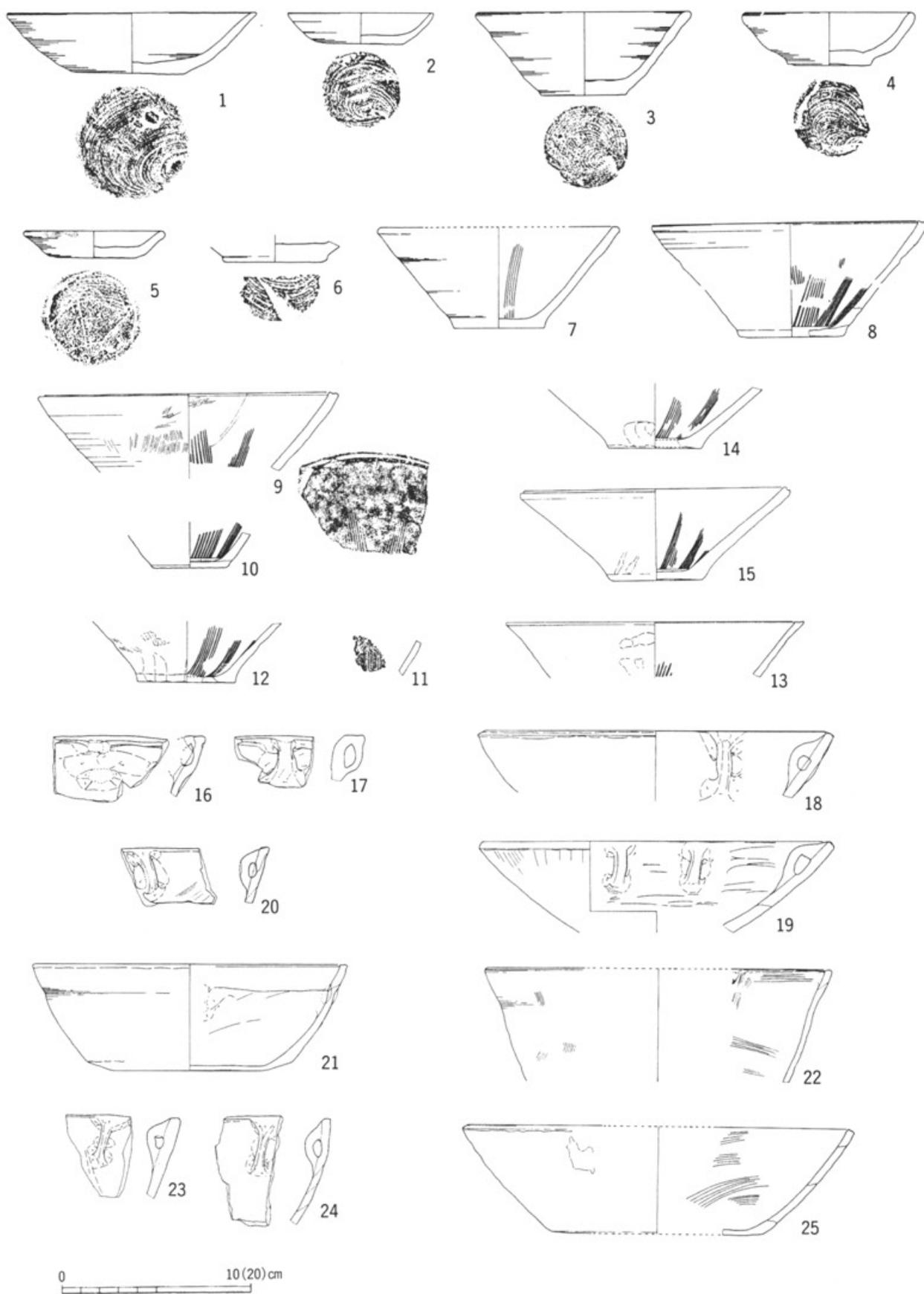
## 池ノ尻館跡（第221図）

文献③-128

池ノ尻館跡は四街道市栗山に所在する。印旛沼に注ぐ鹿島川の支谷最奥部標高29mの台地上に立地する。周辺には「栗山（栗山）」、「山無（梨）」、「鹿渡」、「小名（小名木）」、「蕨（和良比）」など、『神代本千葉系図』や『千学集抜粹』に見える白井氏一族の名字と一致する地名が残されており、戦国期の白井氏と強い結びつきが確認できる地域である。遺跡は土塁と空堀によって正方形に区画され、3つの郭から成る。中心となるI郭で検出した1号建物は2間×4間の主屋の東辺と北辺に縁が付き、さらに中門廊状の張り出しが見られる。出土土器に関しては、調査報告書で詳細に分類しているので、それを基に、以下に説明する。

カワラケはIa、Ib、II、III、IV、Vの6つに分類される。Ia類（1）は口径13.0cm、底径6.0cm、器高3.0cm前後の大型の皿で、底面には簧の子状圧痕が顕著で、内面中央には指ナデ痕が見られる。口縁はわずかに外反する。精選された胎土で、淡黄褐色である。Ib類（2）は口径7.5cm、底径4.0cm、器高1.7cm前後で、II類（3）は口径11.5cm、底径4.5cm、器高4.5cm前後で、杯状である。内外に鋭いロクロ痕を残す。口縁端は肥厚し、やや外反する。見込み中央に一方向の指ナデ痕が見られる。小石や砂粒を含む。III類（4）は口径9.2cm、底径4.4cm、器高2.8cm前後で、やや厚手。体部は内湾する。IV類（5）は口径7.5cm、底径4.0cm、器高1.4cm前後の極めて浅い皿である。口縁端がやや外反し、器壁が少し厚い他はIb類と同様である。V類（6）は底径5.5cm～6.5cmの大型の皿で、6は軟質で淡黄褐色。土器擂鉢はA～Eの5種類に分類される。A類（7、8）は胎土中に雲母と小砂粒を含み、赤褐色に硬く焼き締まっている。外面は指頭痕が顕著に残る。口縁端には小さな溝がある。B類（9、10）は内面から口縁外面にかけてナデ調整されている。9は茶褐色で、焼け斑が著しい。C類（11）は灰色で、硬く焼き締まっている。雲母や小石を含み、一見すると須恵器のようである。D類（12、13）は黒色で、比較的薄手の擂鉢である。E類（14、15）はD類より厚手で、柔らかい感じの器肌である。黒色で、雲母と小砂粒を含む。内耳土器はA～Gの7種類に分類される。A類（16、17）の口縁端は内側へ突出させることによって幅広く作り、上面に浅く広い凹帯を巡らす。色調は赤褐色、内耳は口縁突帯から下方へと橋状に貼り付ける。外面が著しく膨らむ。B類（18）は、胴部は微かに外方へ膨らみ、器厚が一定である。口唇上部には小さな溝を巡らす。全体に雑な作り。C類（19）は素地は淡い灰色であるが、器表は鼠色で、硬く焼き締められている。D類（20）はA～C類に比べて耳の頂部がやや上方に移り、口唇が丸みを帯びて凹帯が見られない。素地は灰色で、器表は青みの強い鼠色を帯びる。E類（21）は器表は鼠色、外壁の口縁下約3.4cmにくびれを作り、その内面には明瞭な稜線を巡らす。断面は弱い「く」字状になる。F類（22）は薄手で焼き締めも良好。口縁下4cm程にくびれを設けるが、内面に稜はない。深い鉢形。G類（23～25）は黒色で、耳の断面が細く丸い。内面は粗いハケ目のナデ調整を施す。

また、カワラケ焼成窯と考えられる土坑が西辺の堀の中から検出されている。これは長軸1.1mで、堀底から土塁裾部の堀壁面にかけて斜めに掘り込まれて造られ、堀底の土坑下端部付近で木炭が、堀壁面に当たる土坑上半部内で、杯・皿形が5個体出土している。



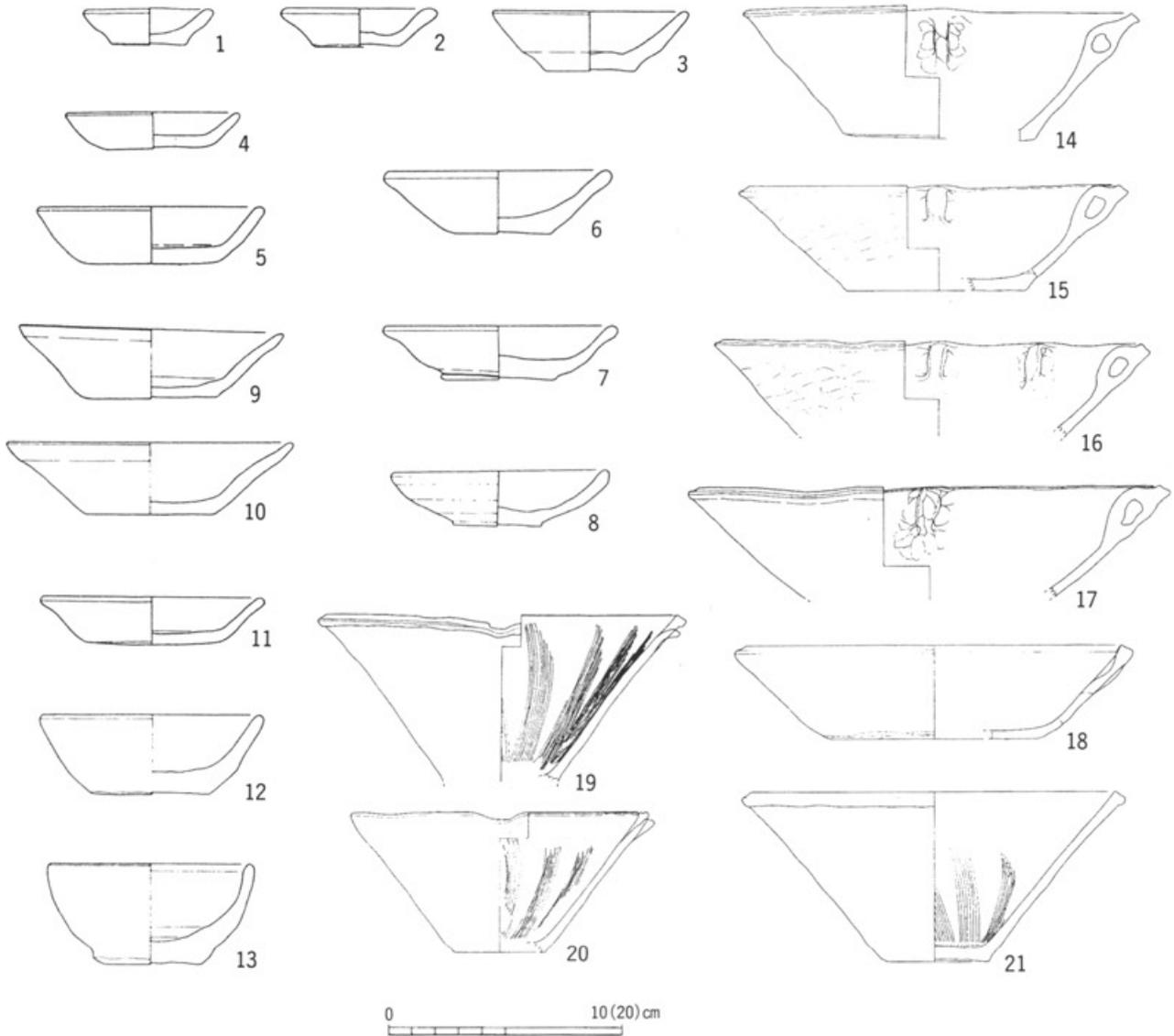
第221図 池ノ尻館跡

和良比堀込城跡（第222図、図版6-1）

文献③-194

和良比堀込城跡は四街道市和良比に所在する。印旛沼に注ぐ鹿島川の支流によって開析された支谷最奥部の、標高約28mの舌状台地先端に立地する。池ノ尻館跡同様、戦国期の臼井氏との関係が深い地域である。

カワラケには様々な形態が見られる。1は体部中位でやや内湾するもの。2は口唇部が肥厚し、外反するもの。3は体部中位で外側に突出するもの。4は皿形で体部が直線的に延びるものの内小型のもの、同じく5は大型のもの。6は口唇部が肥厚し、直線的に延びるもの。7は腰が張り口唇部が肥厚するもの。8は体部がやや内湾するもの。9、10は体部が緩やかに外反するが、口縁部で内湾し、大きく蛇行するもので、底部に板目状圧痕が残る。11は皿状で、体部がやや外反するもの。12、13は深めのもので、12は口径9.7cm、底径5.3cm、器高3.5cmである。14～18は内耳土器である。全体に口径と底径の比が大きく、内面が浅い。体部外面に指圧痕が残ったり、内耳に紐による擦痕も見られた。19～21は土器播鉢であるが、胎土中に白色・半透明粒子・雲母が混入する。21は口径33.5cm、底径9.6cm、器高15.1cmである。



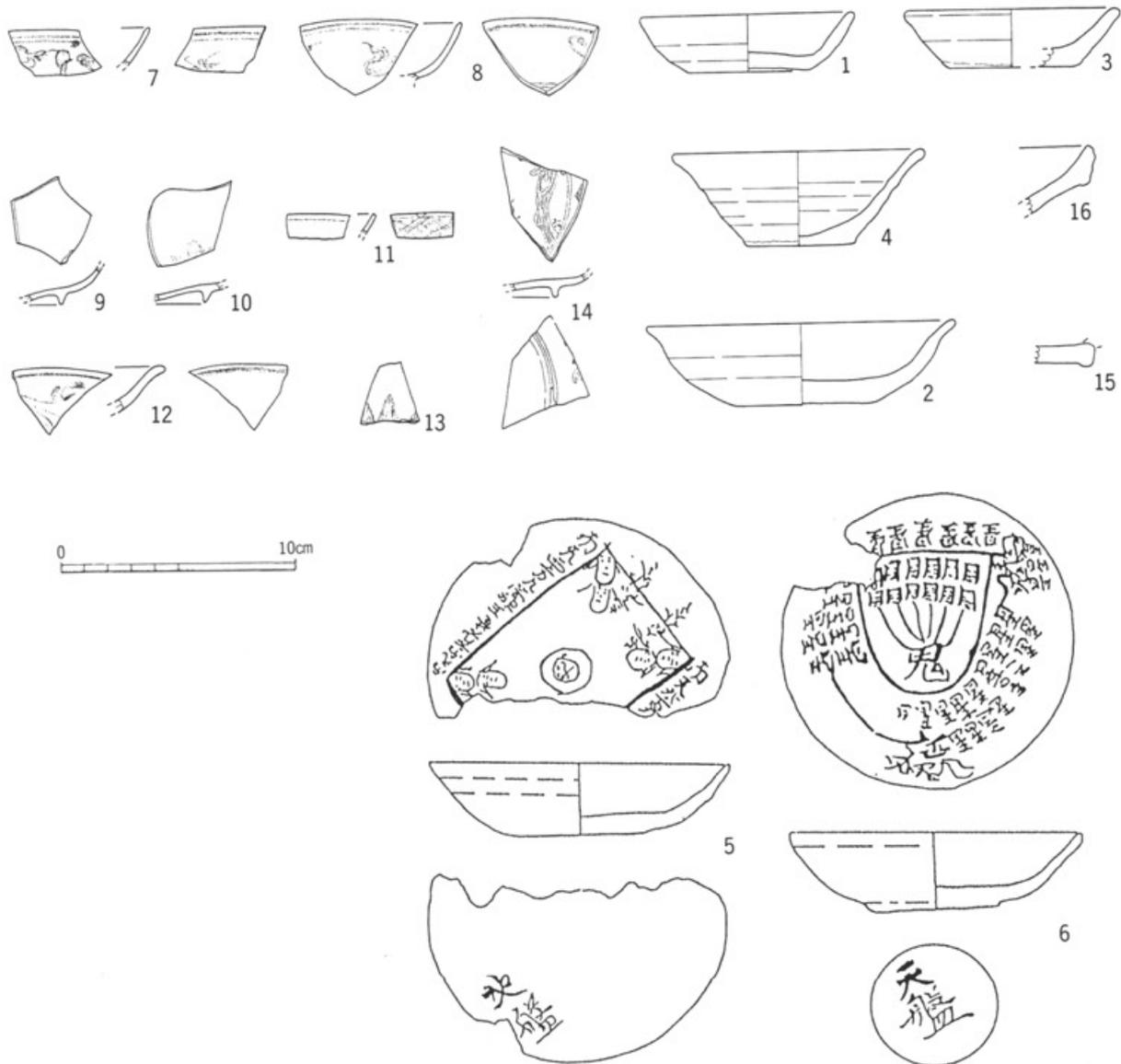
第222図 和良比堀込城跡

白井城跡 (第223図)

文献③-113・130

白井城跡は佐倉市白井台、白井田、八幡台にあり、印旛沼の南岸、標高27mの台地上に立地する。白井城の築城については不明な点があるが、千葉介常兼の三男白井六郎常康が12世紀後半には当地に居を構えていたと考えられる。文明11年(1479)に太田道灌と武蔵千葉氏に攻められ落城するが、程なく千葉氏の手に戻ったとされる。天文7年(1538)以後後北条氏の支配の下で千葉氏の重臣原氏が入城した。永禄4年(1561)里見氏の攻撃により一旦は落城するが、再び原氏の支配に置かれ、天正18年(1590)の小田原後北条氏の滅亡を迎える。天正19年(1591)に徳川家康は酒井家次を封じ、慶長9年(1604)まで酒井氏の居城となった。

出土したカワラケ1は口径9.2cm、底径5.3cm、器高2.4cm、底部回転糸切り後板目状圧痕、内面中央指ナデで、胎土中に白色・黒色微粒子や針状物を含む。薄い褐色。土師器の杯形に似る。2は口径13.3cm、底



第223図 白井城跡

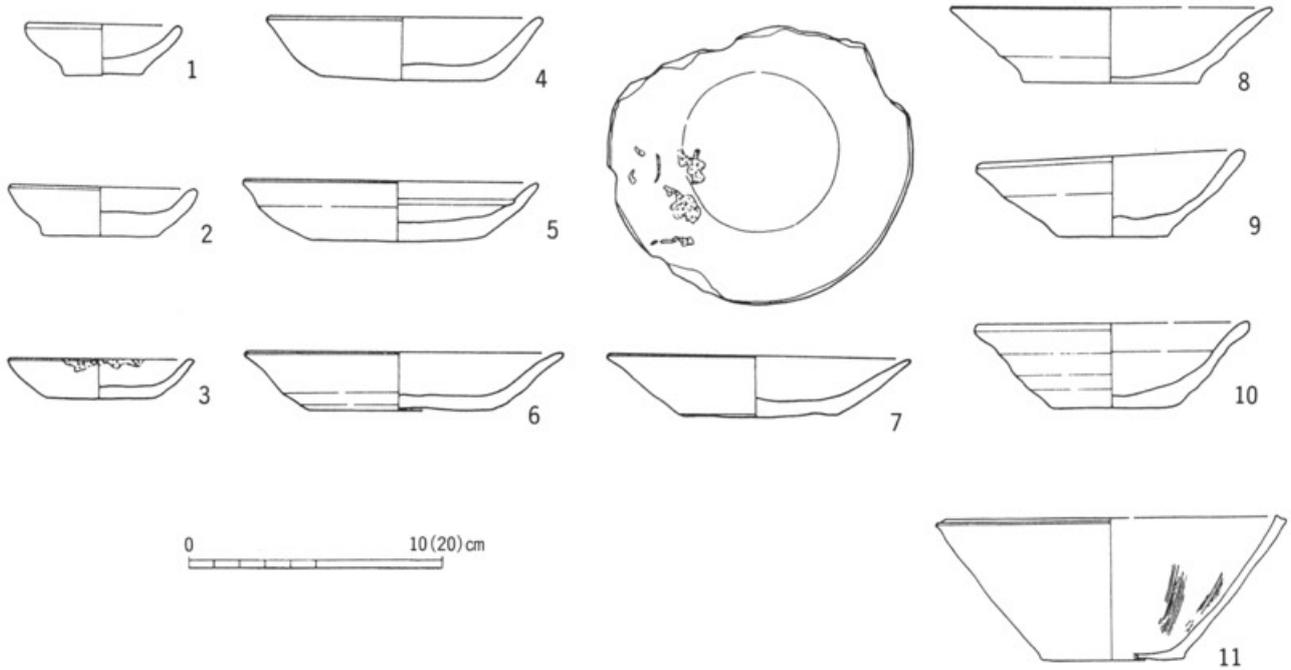
径6.6cm、器高3.5cm、底部回転糸切り、底面はかなり厚手で、口縁端が外反する。内面が摩滅する。胎土中に鉄分、白色砂、雲母粒を多く含む。非常に薄い褐色で、口縁端に油煙が付着しているため、灯明皿として使用されていた。瀬戸・美濃大窯1段階の縁釉挟み皿に似ている。3は復元口径9.2cm（3寸）、底径5.8cm、器高2.5cm、底部回転糸切りで、鉄分や白色砂粒を含む。薄い褐色である。4は口径10.9cm、底径4.7cm、器高5.0cmで、底部回転糸切り、高台状に低く切り残す。口縁端はやや肥厚化し外反する。内面立ち上がりは緩やかに立ち上がり、底面は平坦ではない。胎土中に白色砂粒を多量に含む。練りが足りないためか、土の小塊が確認できる。薄い褐色である。5と6は地鎮墨書土器である。5は『外面には「地盤」、内面には重圈内中央に「鬼」字と長方形の四方結界線の四隅に各々2段の四方諸神の顔を描き、界線外の片側に「南無西方□神王」及び「南無南方九□神王」の文字を上下に対置し、他の側に「南無北方九・・」の文字があり、さらに界線をまたいで「急急如律令」が上下に対置して各々2行墨書した身』で、一方6は『外面には「天盤」、内面には鬼を頂点とする12神王とその眷属の諸星・鬼を顔形に表現した、中央顔形の界線内に12個の顔面と「鬼」字とを6本の線で結ぶ図を描き、周囲に34文字の「星」と7文字の「鬼」を巡らせた蓋』で、5と6が合わせ口で出土した（『内⑤-029引用）。その他、中国製染付皿E群、同B群、碗C群、同E群の破片が合計12点（7～14）、瀬戸・美濃大窯1段階の播鉢口縁破片（16）、天目茶碗底部片（15）などが出土している。

#### 本佐倉城跡（第224図）

文献③-236

本佐倉城跡は印旛郡酒々井町本佐倉と佐倉市大佐倉に所在する。印旛沼の南岸、標高36mの台地上に築かれ、内郭群、外郭群、城下町を含む総構えの三重の同心円構造で、総面積は35万㎡に及ぶ。享徳3年（1454）千葉氏の内紛により千葉城が荒廃し、続く文明年間（1469～1486）に千葉輔胤によって当地に築かれ、天正18年（1590）まで千葉氏の居城となり、下総国の首府として栄えた。

出土したカワラケは大小さまざまな形態が確認できる。1～3は小型のもので、1は浅い高台を持ち、厚手で、口径と底径の比が比較的大きいのに比べ、3は薄手で、口径と底径の比が小さい。1には雲母を含み、2、3は砂粒・白色針状物を含む。4～8は大型の皿形の器形で、4のように比較的厚手で、体部が直線的であるもの、5のように体部内面が沈線状に窪むもの、6、7のように体部がやや外湾気味に細く開くもの、8は底部外面が少し開くものなどがある。9、10は口径と底径の比が大きく、器高が高いもので、口縁端が肥大し、外反する。9は茶褐色で、砂を多量に含み、焼成不良である。1と10は雲母と砂粒を含み、淡茶褐色に発色する。また、3と7には内面に油煙が付着している。特に、5は小田原後北条氏の影響を強く受けた手づくねカワラケを模倣したロクロカワラケとされ、他の遺跡では見ることでできない遺物である。口径11.5cm、底径6.8cm、器高2.4cmを測る。土器播鉢は瓦質で、口縁端に沈線状の溝が巡る。器壁の厚さは口縁端でやや厚くなる程度で、体部は若干内湾気味である。



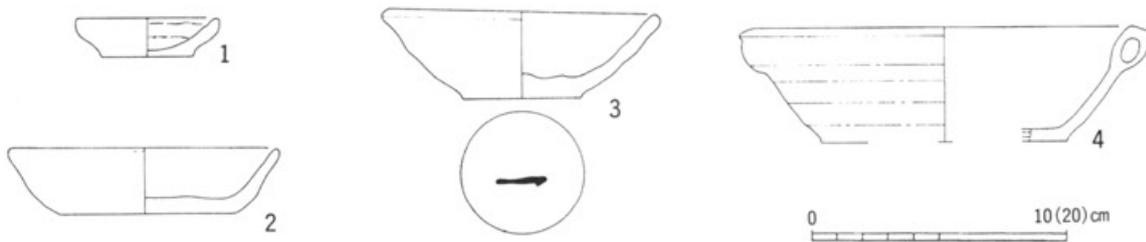
第224図 本佐倉城跡

長勝寺脇館跡 (第225図、図版6-2)

文献③-167

長勝寺脇館跡は印旛郡酒々井町上本佐倉の、鹿島川支流、高崎川によって開析された標高35m前後の台地上に位置する。本佐倉城の南方外縁部に位置し、本佐倉城の支城の一つとして、16世紀代に機能していた。005号掘立柱建物(南北5間×東西1間、東・南・西面に一間の庇が付属する)は館内最大の建物で、身舎四隅柱穴内から、いずれも合わせ口の状態で、2枚セットで合計8点のカワラケが出土した。

カワラケ1は口径5.6cm、底径3.5cm、器高1.5cmで、底部回転糸切り、体部はやや膨らみ、内面に粘土紐の接合痕を残す。2は口径10.6cm、底径6.8cm、器高2.7cmで、口径と底径の比が小さい。底部回転糸切りである。3は、合わせ口で出土した地鎮カワラケで、口径10.9cm、底径4.6cm、器高3.6cmで、底部回転糸切り、外面底部に墨書「一」が見られる。その他の地鎮カワラケも概ね同一の形態である。内耳土器4は復元口径32.0cm、底径19.3cm、器高9.2cmである。内耳は口縁近くに付き、外面が大きく張り出し、底部は平底である。



第225図 長勝寺脇館跡

## 佐倉城跡（第226図）

文献③-079、⑤-028他

佐倉城跡は徳川家康の命により、土井利勝が慶長15年(1610)に佐倉に封ぜられた翌年から元和2年(1616)までの間に、中世鹿島城の地に築いたとされる城郭である。佐倉城は平成11年6月の時点で、城内・城下を含めて27回以上にわたって調査が行われている。今回の資料は、国立歴史民俗博物館研究棟敷地内の資料である。この地区は、椎の木曲輪と呼ばれる一角で、佐倉藩の上級武士の屋敷の敷地内にあたる。この調査で出土した多量の内耳土器については、藤尾慎一郎氏が研究報告の中でまとめている。ここでは焙烙形とした資料について詳細に紹介する。ちなみに1は土鍋形とされたものである。

**I類** 瓦質で体部がまっすぐに立ち上がるもの。ベタの平底でやや内湾しながら立ち上がる器形。色調は灰褐色で、細砂混じりの粒度の細かい胎土。口径1.3尺、器高2寸、底径1.2尺。底部ちぢれ目。紐状内耳B。外面上部から内面にかけてロクロナデ仕上げ。外面下半は指ナデ。煤は見られなかった。

**II類** 土師質で体部は湾曲しながら立ち上がる平底の焙烙

**A** 暗褐色系。底部は平底と思われ体部が湾曲しながら立ち上がり、形態的には焙烙形だが、器高は高いほうである。口唇部は内側や外側にかえりをもつ。横ナデによって上面が窪む。内耳は粘土紐を口唇部の上端から体部にかけて渡す紐状内耳で、内面の上の方に偏って貼り付けられる。耳に対応する体部外面は大きく張り出す。I類に比べて体部が外傾している。胎土は長石がやや目立つ程度で、3mm大の石英を含む。底面には何か敷いた上で底板を作ったと考えられる粗面と合わせ目が見られる。体部は粘土板積み上げである。体部外面から口縁部体部内面まではロクロナデ、内面中央は斜め方向のナデ、体部下半は指ナデ。煤は口唇部外端部から体部外面にかけてみられ、特に口縁部外面に強く残る、口唇部上面と底部には煤が付かない。

**B** 茶褐色。金雲母・長石を含む。底部は上げ底で底板に粘土の合わせ目がある。内耳は体部の上半に偏る。底部には簾状の粗面が見られる。外面下半にケズリ状のヘラ調整が見られる。

**III類** 土師質で、体部が湾曲しながら立ち上がる平底の焙烙で、口唇部の形態から2つに分類できる。

**A** 体部上半のロクロナデによって二次的に口縁部が内側に折れたり、体部外面に稜が生じる。底部はやや上げ底で湾曲気味に立ち上がる体部をもつ。口唇部は土鍋状のかえりをもつものや内折するものなどがある。紐状内耳は口縁部の上端から体部の下半まで粘土紐を掛け渡す紐状内耳。内耳部の体部外面は外側に張り出す。色調は茶赤色で金雲母を少し含む。粗面には簾状のものと粗い離れ砂のものがある。底板との合わせ目は体部外面最下端に移動する。体部は3段にわたって粘土板を積み上げる。

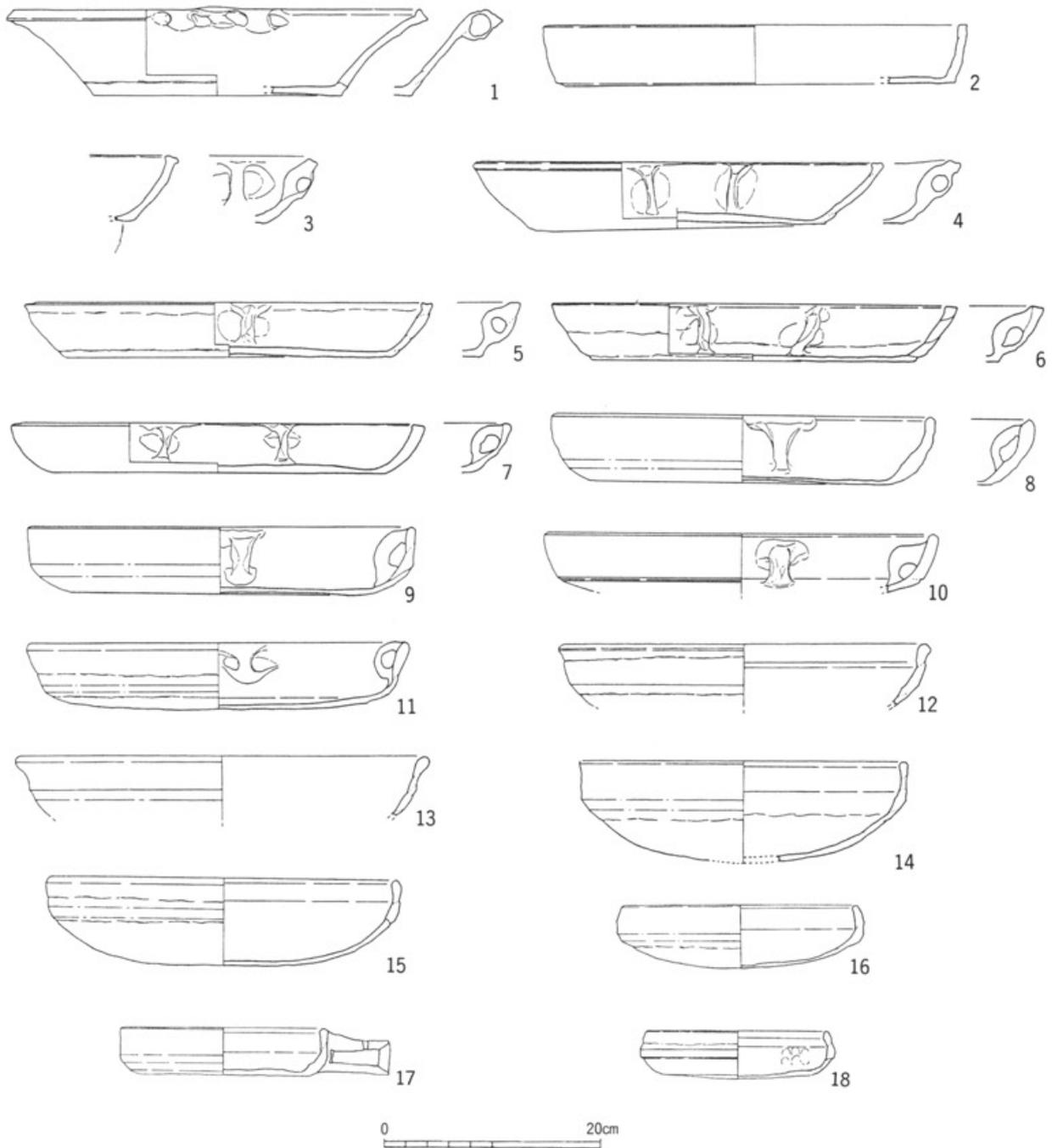
**B** 口唇部がロクロナデによってわずかに内側に突出する鐔状口縁をもつ。内湾しながら立ち上がる体部、茶赤色の器壁、金雲母を含む。金雲母の量が著しく多く、底板には簾状のものと粗い離れ砂のものがある。内耳はやや扁平になり体部いっぱい貼り付ける紐状内耳である。内耳の断面は丸みをもつ逆二等辺三角形である。体部の粘土帯積み上げは内傾接合である。18世紀中心。

**IV類** 器高に占める体部高の割合が50%以上の平丸底焙烙で、紐状の内耳をもつ。内耳の付け方は体部のロクロナデの後に貼り付ける。黄褐色系。

**A** やや上げ底。ケズリを体部側に施すことで底部との境に稜をもつ。器高が口径の割に高く、焙烙としては深い部類に入る。体部下半の器壁は厚い。耳は口唇部の下から内面いっぱい紐状粘土で貼り付ける。断面は平べったい楕円形。底面は粗い離れ砂痕をナデ消したもの。ケズリが体部側に用いられる。胎土は精良で、焼きがよい。器壁に還元帯が認められる。

B 1.2尺の口径をもつ大型の焙烙で、ケズリを体部側に施す。底板の縁を上方に折り曲げ、その上に粘土板を積み上げて体部を直線的に立ち上げる。口唇部は外側にロクロナデによる稜をもつ。耳はがっちりしたもので、孔は垂直方向に細長くなっている。内面の調整が全面ロクロナデになる。胎土は精良で、焼きがよい。器壁に還元帯が認められる。18世紀代。

C 幅3cmほどの紐状内耳をもつ。粗い離れ砂の痕跡をもつ底板に粘土板を積み上げ、外に開き気味に仕上げる。口唇部は丸みをもたせている。体部と底部の境にヘラで削り取ったような部分がある。棒を挟んだ紐状内耳もある。18世紀中心。



第226図 佐倉城跡

V類 平丸底で、体部高が器高の50%以上の焙烙の内、体部をロクロナデした後、粘土塊を貼り付け孔をあける粘土塊内耳。胎土は黄褐色系で精良だが、わずかに石英を含む。口径7寸、1.1尺のものがある。粗面は粗い離れ砂の他にちぢれのものが出現する。口唇部は丸くおさめる。内耳には粘土塊製作時から挟み込んでいた棒を抜き取ることによって孔をあけるものと、指で孔をあけたものがある。体部外面上半と内面は全面ロクロナデ。ケズリが体部側に施される。18世紀から19世紀にかけて。

VI類 底部形態ははっきりしないが、丸底に近い。粗い離れ砂の粗面をもつ。底板に粘土板を3段積み上げ、ロクロナデの口唇部。口径1.2~1.3尺。混和材をほとんど含まない。色調は暗黄褐色である。還元帯が認められる。

A 口縁部の下に強いロクロナデを幅狭く加えて整形。18世紀前葉から19世紀前葉。

B 口縁部の下に幅広く深いロクロナデを加える。

VII類 内耳をもたない。口径が1.1尺の中型で、器高に占める体部高の割合が50%以下の焙烙。

A 直線的に立ち上がる体部と底板側にケズリを加える。

B 内湾気味に立ち上がる体部をもつもので、底部側にケズリ調整を加えるものと、体部と底部にまたがってケズリを施すもの。

VIII類 口径が6寸半ほどの小型丸底焙烙で、器形はVII B類に似ているが、やや扁平で、体部の内湾度も強い。胎土は精良で、焼成良、明るい橙色。底板には非常に細かい離れ砂の痕跡。18世紀末から19世紀の早い時期

IX類 口径6.5寸の把手付小型平底焙烙。立ち上がりのない底部に体部が湾曲しながら立ち上がる。精良な胎土で、還元帯はない。底板の粗面には細かい離れ砂がびっしりと残されている。体部外面から内面は全面ロクロナデ。筒状に作った把手を貼り付ける。19世紀。

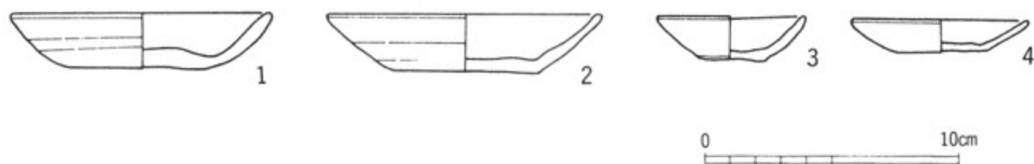
X類 口径5.5寸の極小型焙烙。丸底に近い底部。VIII類を小型化したもの。底板の粗面は離れ砂の跡をナデ消したよう。体部との境界付近に近い底板の縁の部分はちぢれによるしわが激しく認められる。18世紀末から19世紀の早い段階。

#### 烏内遺跡 (第227図)

文献③-119

烏内遺跡は成田市松崎に所在する。利根川に流れ込む根木名川支流の谷の最奥部に近い台地上に位置する。近世遺構は標高30m~33mの台地の南側を、方形に区画整形された地点に確認された。この区画の中から、掘立柱建物、地下式坑、地鎮遺構(土坑)、土取り穴状の浅く大きな掘り込みなどの遺構が検出された。特に316号跡、328号跡、317号跡のいずれも掘立柱建物に関する遺構から、合わせ口のカワラケが8組、入子状のカワラケが1組出土した。

カワラケは1から4の4種類に分類できる。1は口径10cm強、器高2.3cm前後で、底部回転糸切り、内面体部と底部の接合部がやや窪む。胎土中に鉄分粒・砂粒を含む。2は口径10cm強、器高2cm以下で、底部回転糸切り、胎土中に鉄分粒を含む。底部は平坦で、体部が直線的に開く。3は口径6cm、器高2cm以下で、底部回転糸切り、胎土中に雲母を含む。4は口径7cm前後、器高1.5cm程度で、底部回転糸切り、胎土中に鉄分粒を含む。2の小型品である。いずれも明らかに近世のカワラケであるが、このような状況で多量に出土した例は少ない。同じ区画内からは17世紀半ばから18世紀はじめを主体とする陶磁器類が出土しているが、これらの遺構群の性格は判然としない。



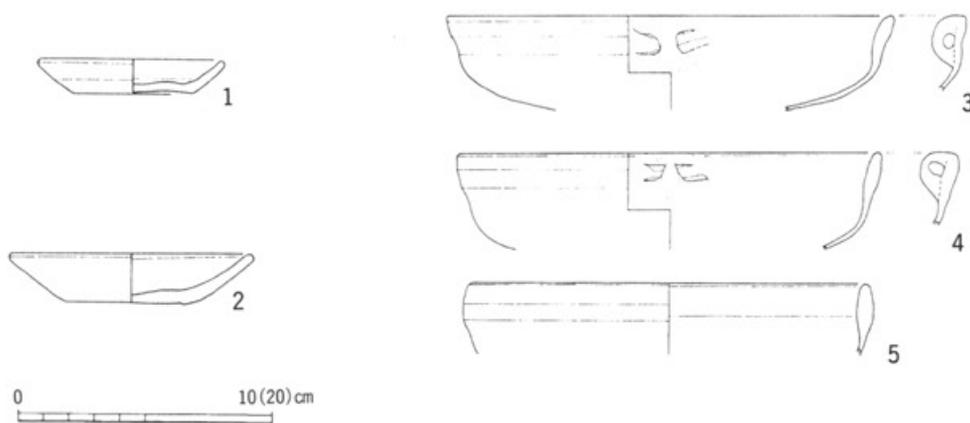
第227図 烏内遺跡

南広遺跡 (第228図)

文献③-211

南広遺跡は佐倉市大作に所在する。鹿島川に流れ込む高崎川支流に面した台地上に位置する。近世遺構が検出されたのは、遺跡の東北端、標高30m～33mの南側に面した緩斜面部である。掘立柱建物（3間×2間）、方形竪穴10基、柵列4群、溝、土葬墓、火葬墓等から構成される。出土遺物から18世紀後半頃の、佐倉藩内の農家屋敷跡と考えられる。佐倉城跡をはじめ武家地の調査が主体である近世遺跡の発掘調査の中で、農村部の調査成果として貴重である。

カワラケは大小2種類で、1は口径7.4cm（2寸半）、底径4.6cm、器高1.4cm、2は口径9.7cm（3寸）、底径4.7cm、器高2.0cm、いずれも底部回転糸切りで、概して薄い作りである。内耳土器は推定口径33cm（1尺1寸）～35cm（1尺2寸）で、体部は肥厚し、高速回転のロクロを使用して体部から口縁端部が丸く仕上げられる。また、口縁に向かって体部が緩やかに外反するものが多い。内耳はかなり団子形に近く、丸みを帯びる。カワラケは約7個体と少なく、逆に内耳土器は13個体と多い傾向にある。



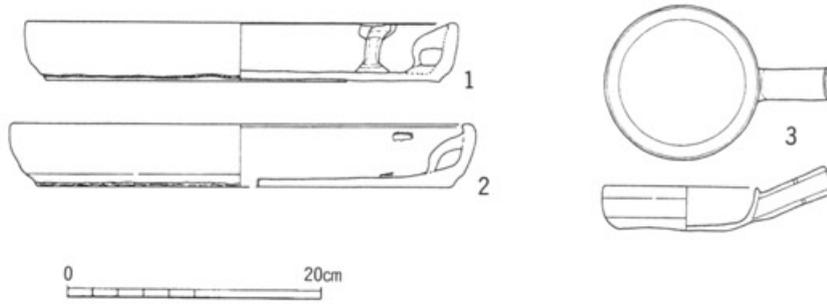
第228図 南広遺跡

弥勒東台遺跡 (第229図)

文献③-276

弥勒東台遺跡は佐倉市弥勒町に所在する。佐倉城開府藩主土井利勝の菩提寺である松林寺の境内の一角を調査した。松林寺外郭の土塁と堀跡を検出し、その堀跡中から多量の遺物が出土した。廃棄された遺物は17世紀から18世紀代・19世紀代を中心に一部明治に至るものまで、数百年の幅を持つ。記録によれば、明治17年（1884）に松林寺本堂が解体されており、それと同時に本堂隣の庫裏も解体され、収蔵物類も廃棄されたと考えられる。近世佐倉に搬入された土器・陶磁器類の生産地や流通量、経路を知る上で重要な遺跡である。

内耳土器は佐倉城跡出土遺物と同形態のものがいくつか見られるが、佐倉城跡に見られない形態として、口径37.8cm（1尺3寸?）、底径31.2cm、器高5.0cmの平底タイプ（2）や、口径35.6cm（1尺2寸）、底径30.4cm、器高5.0cmの平底で、外面底部にちぢれ目、胎土には雲母・石英多量に含むものがある（1）。これらの内耳の付け方は口縁端から底面に渡しているもので、下野・南武蔵タイプと呼ばれているものに非常に似通っている。また、口径12.0cm（4寸）、底径8.5cm、器高3.3cmの外面底部以外に透明釉を掛けた把手付きの炒り鍋が出土している（3）。おそらく江戸在地産のものであろう。

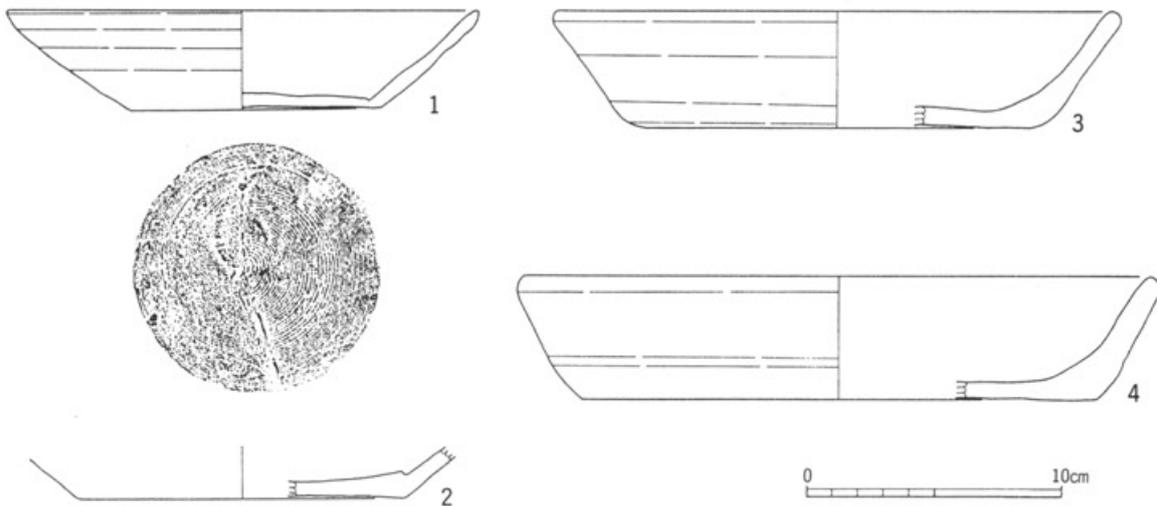


第229図 弥勒東台遺跡

曲輪ノ内遺跡（1次）（第230図）

文献③-181・253

曲輪ノ内遺跡は佐倉市江原に所在し、印旛沼に面する標高28mの台地中央部に位置する。佐倉城とは、鹿島川を隔てて対岸に位置する。江戸から成田に至る佐倉道（成田街道）に面しており、この街道に並行するように、武家長屋の掘立柱建物遺構が検出された。2次調査では佐倉道側に間口1間、奥行2間、反対側に間口1間、奥行3間の長大な長屋遺構を検出している。1次調査では袍衣遺構と考えられる、一辺30cm×22cm×深さ25cmの小土坑を検出した。内部から瀬戸・美濃産高田徳利2点、大型のカワラケ4点、挿鉢片1点が出土した。19世紀半ば頃の良好な遺物群である。



第230図 曲輪ノ内遺跡（1次）

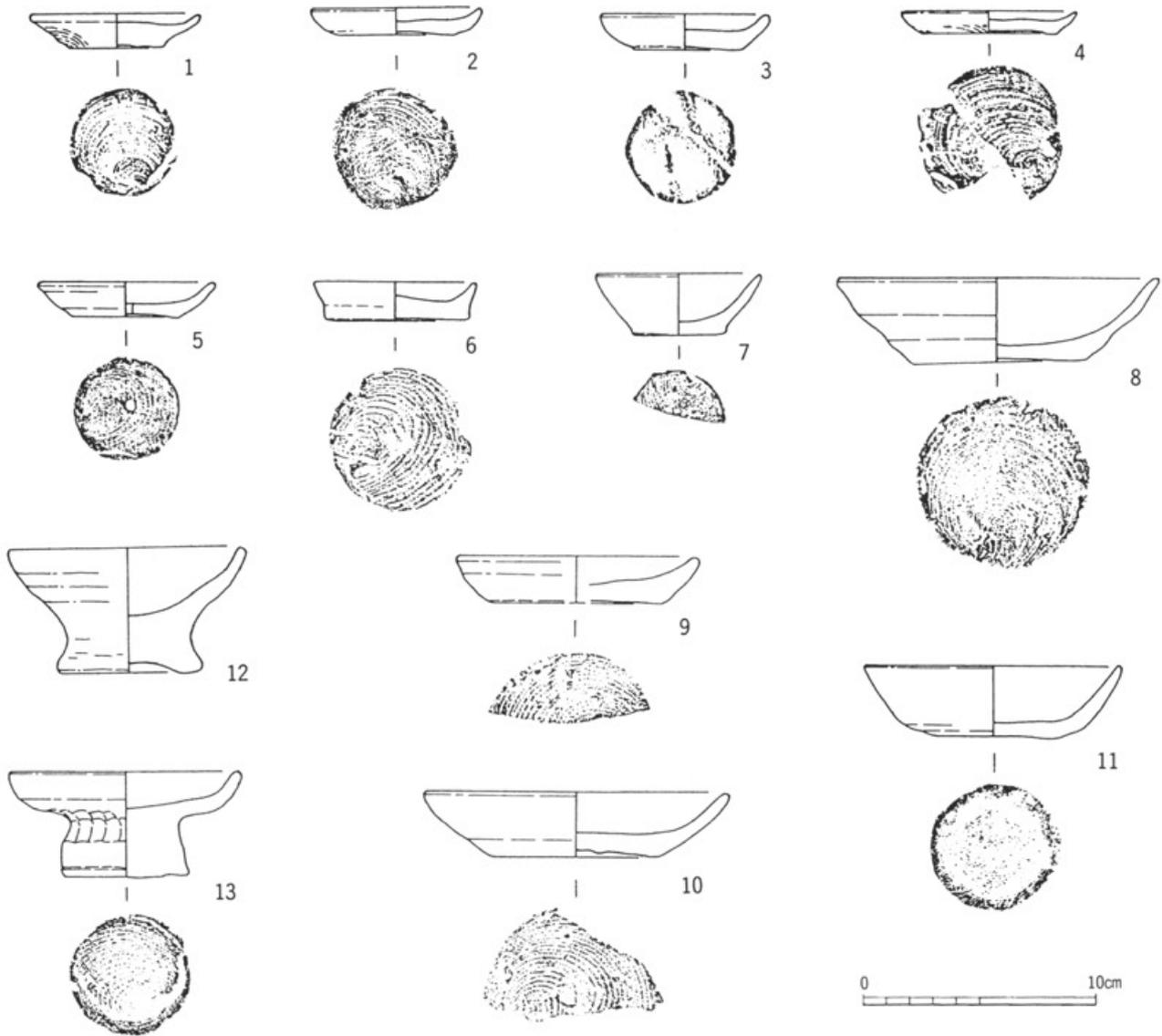
カワラケは器厚の薄いもの（1、2）と、厚いもの（3、4）とに大きく分類できる。前者は口径18.4cm（6寸）、底径9.8cm、器高3.9cmで、底部回転糸切り、体部は直線的に立ち上がる。おそらく江戸カワラケそのものと考えられる。一方、後者は、復元口径22cm～25cm（7寸～8寸）、底径15.2cm～20.0cm、器高4.6cm～4.9cmで、底部ヘラナデ、体部は直線的に立ち上がり、特に立ち上がり部で肉厚となる。中世以来の、在地産カワラケの特徴を残している。

（6） 匠瑳・海上・香取地域

内野遺跡（第231図）

文献③-154

内野遺跡は香取郡大栄町伊能に所在する。利根川支流の大須賀川上流標高40mの台地上に立地する。大須賀氏の居城である松子城跡から南東方向へ、直線距離にして1.7kmに位置する。調査では溝・土塁で区画された地点に、掘立柱建物、土坑、地下式坑、土坑墓、火葬跡、柵列、井戸などが検出されており、土豪層の居館跡と考えられる。後述する馬洗城跡と異なり、当遺跡は文献等で周知されていたものではなかつ



第231図 内野遺跡

た。

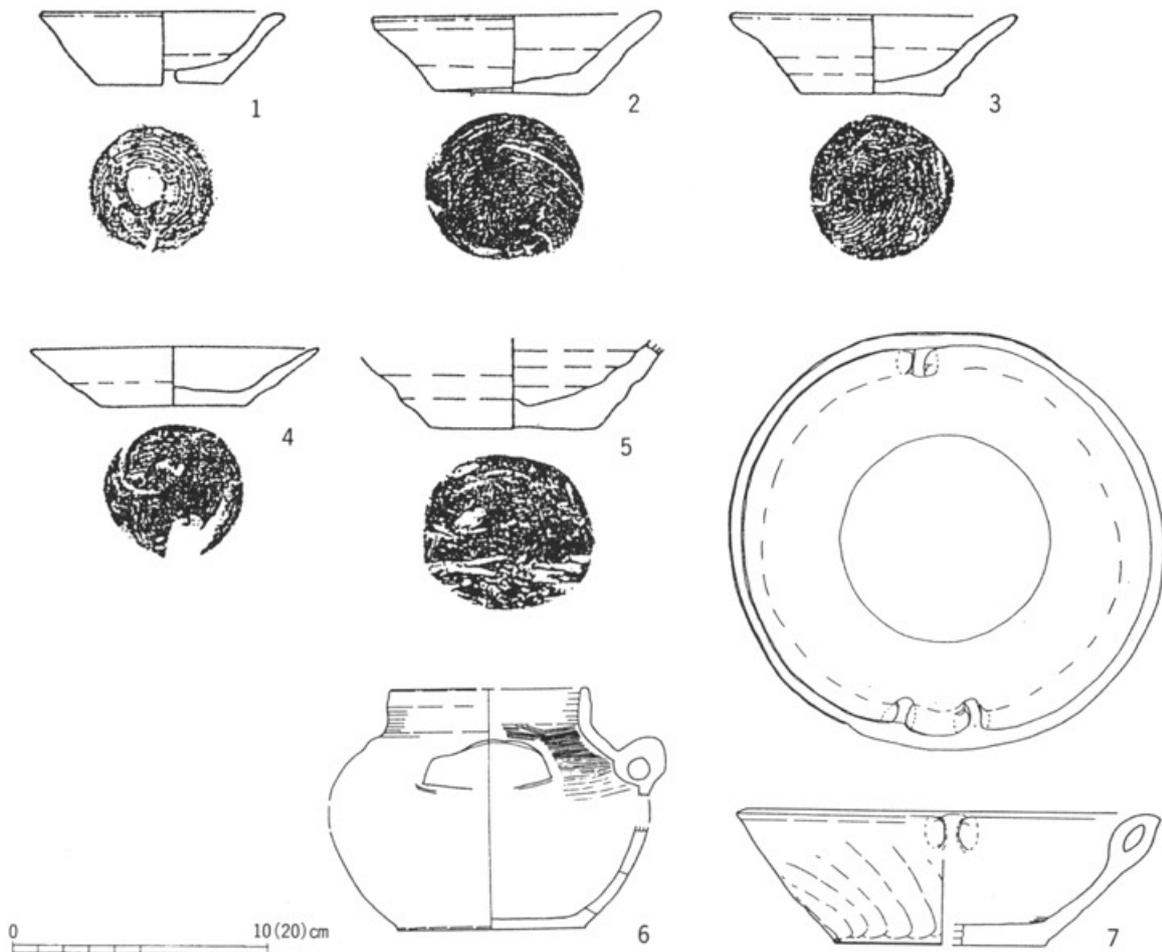
カワラケには口径7.4cm、底径5.8cm、器高1.0cmで、器高が著しく低く、立ち上がりから口縁部間が短く、外面では内湾し、口縁端が鋭利になるものが存在する(4)。これとセットになる大型のものは口径13.6cm、底径7.3cm、器高3.5cmで、体部中央がやや薄くなる(8)。時期に幅があるため、その他様々な形態が存在する。いわゆる杯形、皿形以外に脚部をもつロクロ使用の土器がある。胎土は総じて細砂粒や小砂粒を含み、薄橙褐色から褐色に発色している。底部は摩滅して分からないもの以外、全て回転糸切りである。

篠本城跡(第232図、図版9-1)

文献④-130

篠本城跡は匝瑳郡光町篠本に所在する。篠本城のある標高35m~36mの城山台地は、菱形の形をして、その一角が南側に突き出し、周囲は比高差25mの急峻な崖となって、一気に谷底に落ちている。篠本地区は中世には千田荘に属し、南北朝期には当地を名字とする竹本(ササモトか)氏が千葉氏の内紛をめぐって登場し、以後千葉氏の有力家臣として古文書にたびたび現れる。16世紀にはこの竹本氏にかわって、椎名氏の一族がこの地を領有した。堀によって台地が幾つにも区画され、それぞれの区画に掘立柱建物、地下式坑、土坑墓、粘土敷き土坑、井戸などをはじめ多くの遺構を検出した。

ほとんどのカワラケの体部は緩やかに外反する。1、2、3は底部が最も窪んでおり、そのため中央付



第232図 篠本城跡

近の厚さが最も薄い。4はやや扁平で、体部が次第に薄くなり、口縁端で鋭利になる。体部外面に稜をもつ。5は大型のものであるが、体部上半が不明である。6は土釜で、底部は平底、胴部は球形で、外面には煤が付着する。7は内耳土器で、1対2の3個の内耳が付く。外面には底面から口縁部方向に斜めにナデ調整の痕跡が残る。焼物の組成は、カワラケが6%、内耳鍋が52%で、その他を瀬戸・美濃、常滑、中国陶磁<sup>③-263</sup>で占める。

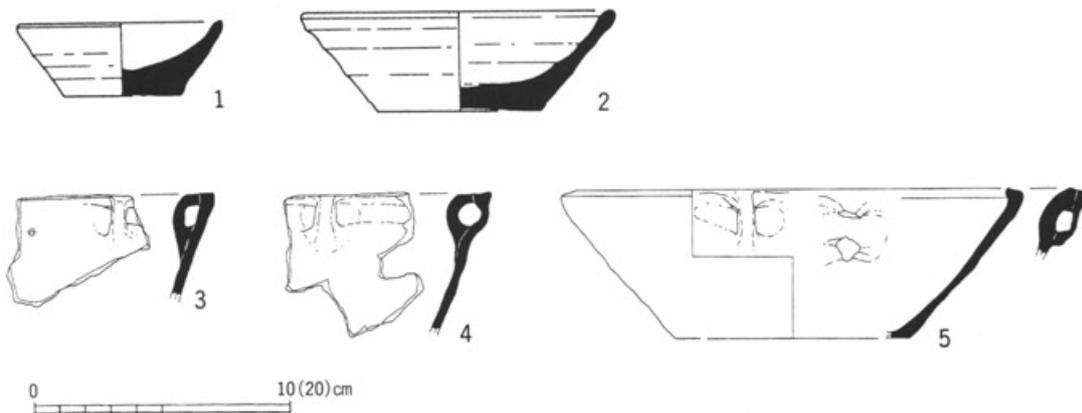
神代夏方遺跡 (第233図)

文献③-198

神代夏方遺跡は香取郡東庄町東和田に所在する。利根川の支流である黒部川の源流に近い標高51mの台地上に位置する。享徳4年(1455)、千葉氏内紛(享徳の乱)に対して、将軍足利義政は内紛鎮圧のため、東常縁を関東に下向させた。常縁は馬加城に籠もる馬加康胤、原胤房らを攻め落とし、また、この時期に常縁は本領である下総国東庄において、和歌一首を王子神(東大神)<sup>①-055</sup>に献じている。

溝で区画された範囲に、掘立柱建物、土坑、地下式坑、土坑墓、井戸、竪穴状遺構などが検出された。掘立柱建物は1間×3間または2間×2間の規模で、掘立柱建物を中心とした中世の屋敷跡と考えられる。

カワラケは口径8cm、底径4.6cm、器高2.8cmの小型のもの(1)と、口径12.2cm、底径6.3cm、器高4.0cmの大型のもの(2)がみられる。いずれも底部が厚く、内面立ち上がりが緩やかで、口縁端でやや肥厚する。内耳土器には口径33.8cm~36.0cm、底径15.2cm~18.2cm、器高11.7cm~13.9cmのものが見られる。内耳はいずれも紐状であるが、紐が付く位置の体部が外に大きく張り出すもの(4、5)と、張り出さないもの(3)の2種類ある。また、口縁端部の処理も内と外方向に若干張り出すもの(4)と、内側にのみ大きく摘み出すもの(5)の2種類が存在する。



第233図 神代夏方遺跡

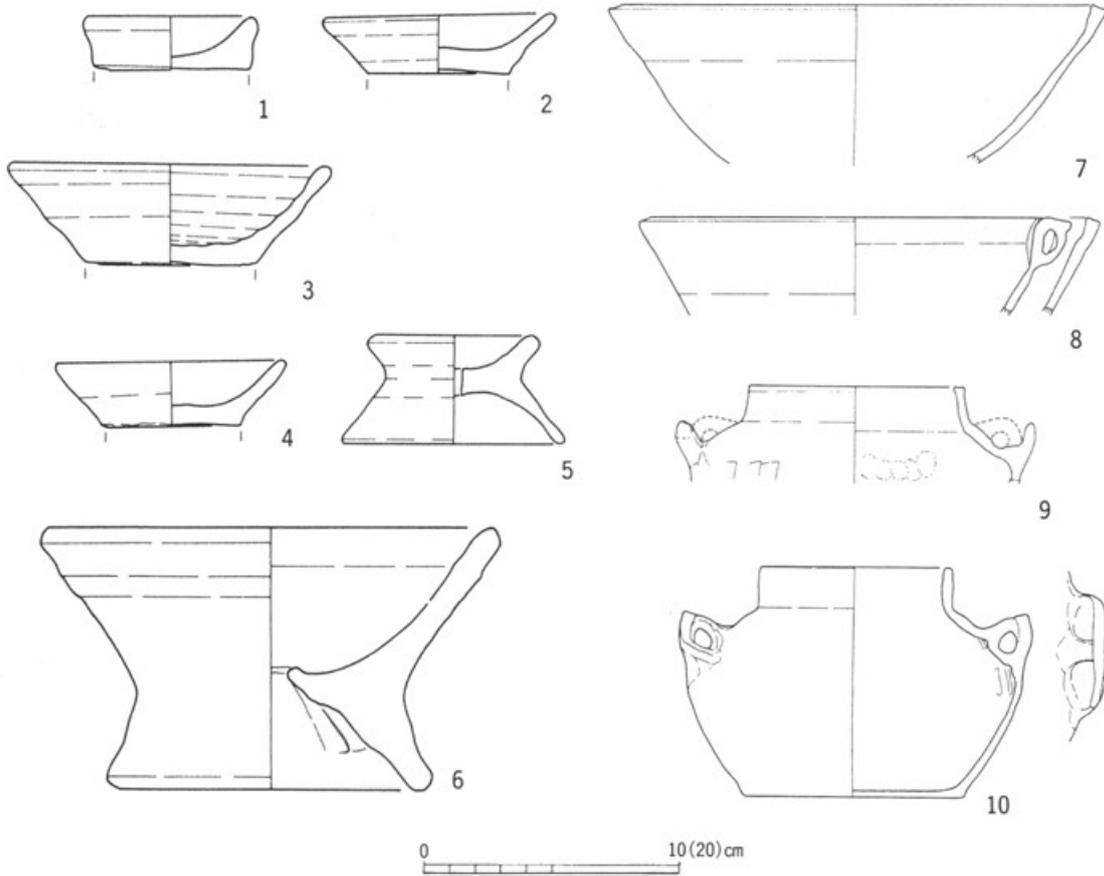
吉原三王遺跡 (第234図)

文献③-169

吉原三王遺跡は佐原市丁子に所在する。利根川下流域の南岸、標高40m前後の台地上で、香取神宮の南東1.3kmに位置する。香取社領34か里のうちの吉原里に相当し、香取神宮の強い影響下にあった。通路として使用されていた溝により3区画に区切られる。11世紀から16世紀に及ぶ墓地遺跡である。

カワラケは大中小の3種類に大きく分類できる。小型の1は口径6.8cm、器高2.1cmで、体部はほぼ直立する。胎土中に長石・石英粒を含む。口縁部には煤が付着する。3は大型で、口径12.6cm、器高4.1cmで、内外面ともロクロ目が顕著に残る。赤褐色で、砂質のため器面がザラザラする。2、4は中型のものであ

る。5、6は脚をもつ特殊な形態で、焼成前に内面中央に孔をあけている。6の脚部内面は工具によって、粘土を掻き取っている。いずれも灯明具として作られたもののようである。内耳土器8は胎土中に雲母を多く含む。土釜28は口径15.2cm、器高18.0cmで、同様に胎土中に雲母が多く含まれる。全体に薄手の作りで、内外面とも丁寧な仕上げである。



第234図 吉原三王遺跡

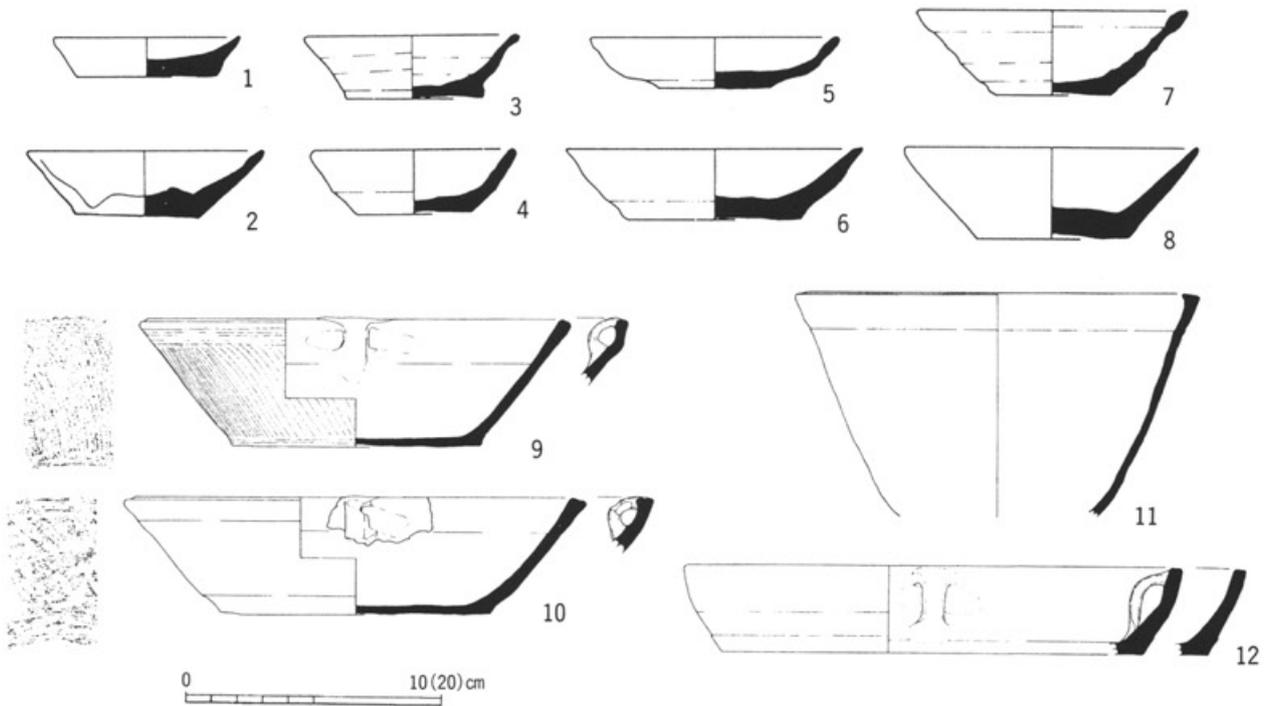
大六天遺跡 (第235図)

文献③-238

大六天遺跡は香取郡小見川町に所在する。利根川下流域南岸、標高40mほどの利根川の流れを見渡せる台地先端に位置する。遺跡隣接地には千葉氏一族である木内氏の名の地である「木内荘木内郷」がある。一方で、近接する境宮神社には永正11年(1514)に粟飯原氏により社殿が造営されたとの社伝があり、16世紀には木内氏から粟飯原氏へ支配者が交替したものと考えられる。調査では堀や溝、段整形によって構成される8つの区画を確認した。中心となるI-e区では、掘立柱建物10棟と曲屋状の掘立柱建物を検出した。この建物は桁行5間、梁行2間の建物に、3間×2間の建物を曲屋状に配置したものである。

カワラケは小型(1)と大型の皿(5、6)があり、また、椀形にも小型(2、3、4)と大型(7、8)がある。5は明褐色で、腰が張り、底部切り離しが狭い。2は内面にロクロ目が顕著に残る。3は口縁端が外反している。灯明皿として使用されていた。7は口縁端が肥厚し、胎土は白色。軽量で、他のカワラケと全く異なる。内耳土器は深いものと浅いものと大きく分かれ、深い11は口縁端が内側に張り出

し、口縁周辺は横ナデを施す。浅いもの（9、10、12）にはそれぞれ特徴が見られる。9は体部外面に斜め方向のハケ目状の痕跡が、また、口縁と底部接合部には横方向のハケ目状の痕跡がある。底面は平坦で、体部は直線的に開く。10は体部外面に底部から口縁に向かって斜め方向のヘラケズリを施す。9、10共に瓦質（須恵質）である。12は近世の内耳土器で、平底の浅いタイプである。内耳は口縁端から体部最下部に付く。内面は横ナデされる。



第235図 大六天遺跡

大塚・塔ノ前遺跡（第236図）

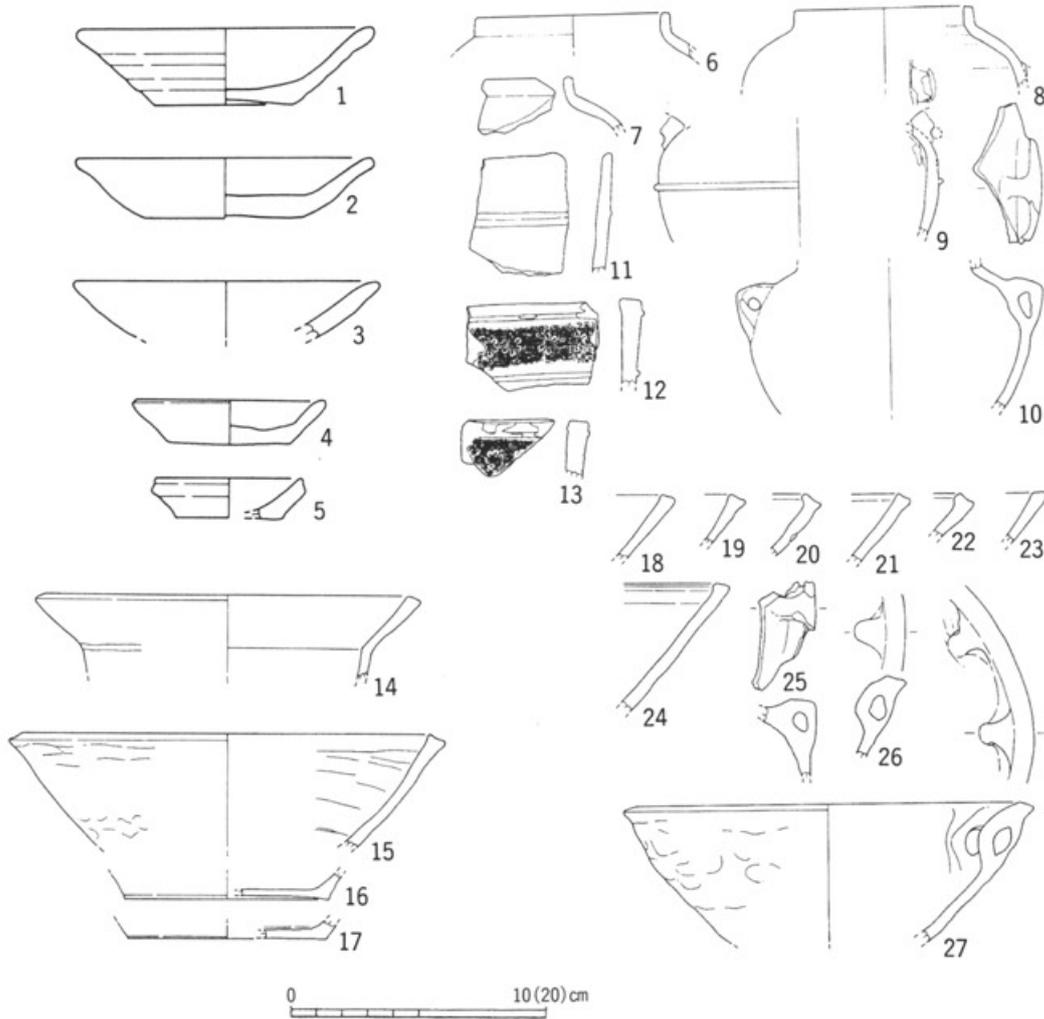
文献③-258

大塚・塔ノ前遺跡は八日市場市横須賀に所在する。標高6m～7mの九十九里砂堤上に立地する。中世横須賀城推定地及び名利長徳寺に接する。長徳寺・横須賀城に関する伝承・経歴によれば、延久2年(1070)から承保元年(1074)頃に源頼義の六男の伊予の阿闍利が地藏堂を創建したと伝えられ、以後幾多の盛衰を繰り返し、現在に至っている。発掘調査では土坑、小ピット群、溝を検出しているが、狭小な調査範囲のため、全体は不明確である。遺物には、瀬戸・美濃大窯2または3段階の鉄釉稜皿をはじめ中世から近世の陶磁器、150点のカワラケ片、95点の内耳土器片、23点の土釜片が出土している。

カワラケには5つのタイプがある。Aタイプ(1)は口径10.4cm～11.6cm、器高2.4cm～3.0cmのもので、内面は底部から緩やかに口縁に延び、口縁端が膨らむ。胎土には白色砂粒と鉄分粒を多く含む。Bタイプ(2)は口径10.0cm前後、薄手で、内面の立ち上がり部分が窪む。直線的で端部を摘み出す口径12.0cm前後のもの(Cタイプ、3)と、小型の口径7.4cmのもの(Eタイプ、4)。Dタイプ(5)は口径5.8cmの2段口縁の小形のものである。内耳土器(14～27)は、口縁端が外側に摘み出されるのが一般的であるが、中には大きく内側に厚く摘み出されるものがある。この内側の端部は使用によるものか著しく摩滅しているものが見られる。これは常滑片口鉢II類11型式の特徴に非常に良く似ている。土釜(6～10)は胎土は

やや砂っぽく、表面は比較的硬く焼け締まっている。体部に鏝の付くものと、付かないものがある。作りは丁寧である。花文のスタンプが見られる深鉢形土器（12、13）の口縁部の破片が出土している。

遺物組成を見ると、土器摺鉢の破片は1点であるが、陶器摺鉢は瀬戸・美濃産が7点、常滑産が1点出土している。内耳土器・土釜には土師質と瓦質があり、破片数で両者ともそれぞれほぼ2対1の比率となり、土師質の方が多い。



第236図 大塚・塔ノ前遺跡

馬洗城跡（第237図）

文献③-160

馬洗城跡は香取郡大栄町に所在する。利根川支流の大須賀川中流域左岸、標高42mの台地南端に位置する。久井崎城同様、大須賀氏の居城松子城を取り囲むように造られた支城といえる。調査では主郭部に掘立柱建物が集中して検出された。日常的に居住していた空間と考えられる。

カワラケは口径10.7cm~10.9cm、器高2.9cm~3.5cmの大型のものと、口径7.2cm~7.9cm、底径2.4cm~2.6cm、器高1.8cm~2.6cmの小型のものに大きく分類できる。大型のものは底部を薄く高台状に切り残し、立ち上がりは内湾気味であるが、口縁端で外反する。内面立ち上がりは緩やかである。小型のものには体部が内湾するものも見られる。また、3は口径8.4cm、底径6.0cmで、5と同様口径と底径の比が小さいものである。胎土中には細砂粒を含み、赤褐色~橙褐色に発色するものが多い。7は雲母粒を含む。